

古事記研究会

平成14年度年報

組織と活動

研究活動報告

北巨摩地域の曾利式土器(前編)

北巨摩市町村文化財担当者会 6

北巨摩地域における曾利式土器の大きさ

—土器研究における小地域の設定に関する基礎的作業—

長谷川誠 25

平安時代の竪穴住居内で鉄製品が出土することについて

大山祐喜 31

発掘調査速報

新規指定文化財

2 0 0 3

北巨摩市町村文化財担当者会

儿々古事記

平成14年度年報

2 0 0 3

北巨摩市町村文化財担当者会

例　　言

- 1 本書は平成14年度（2002）の北巨摩市町村文化財担当者会と会員市町村が実施した事業の報告である。
- 2 本書の執筆は、「I組織と活動」を事務局（長坂町教育委員会）が行い、「II研究活動報告」は文頭に文責を記し、「III発掘調査速報」「IV新規指定文化財」は各市町村文化財担当者および各調査担当者が行っている。
- 3 本書は、佐野隆（明野村教育委員会）が編集した。
- 4 本会の活動ならびに本書の刊行において、山梨県教育委員会学術文化財課、岐北教育事務所、北巨摩市町村文化財審議会委員連絡協議会、都内市町村役場ならびに教育委員会にご協力を頂いた。記して感謝したい。

目　　次

例言・目次

I 組織と活動	1
II 研究活動報告	
北巨摩地域の曾利式土器（前篇）（北巨摩市町村文化財担当者会）	6
北巨摩地域における曾利式土器の大きさ—土器研究における小地域の設定に関する基礎的作業一（長谷川誠）	25
平安時代の堅穴住居内で鉄製品が出土することについて（大山祐吉）	31
III 発掘調査速報	
新府城跡（蓮崎市）	40
梅之木遺跡（明野村）	41
源訪原遺跡（明野村）	43
平山遺跡（須玉町）	45
山ノ神遺跡（須玉町）	46
上小用遺跡（白州町）	47
真原A遺跡（武川村）	48
史跡谷戸城跡及び周辺遺跡（大泉村）	50
井富第4・井富第5遺跡（大泉村）	53
上の原遺跡（高根町）	54
猪田遺跡（長坂町）	56
上日野B・上日野C遺跡（長坂町）	57
中原遺跡（小瀬沢町）	58
平成14年度発掘・試掘調査一覧	59
平成14年度刊行の発掘調査報告書一覧	60
IV 新規指定文化財	
源訪大神社境内の登り塚跡（双葉町）	62
有泉稻荷翁墓及び句碑3基（双葉町）	63
金剛地金山神社祭典（双葉町）	64
伊豆ノ宮大權現湯立祭（双葉町）	65
五社神社の御正神（明野村）	66
高龍寺のシダレクロマツ（武川村）	68
高龍寺のサルスベリ（武川村）	68
宮殿のイロハモミジ（武川村）	69
萬休院のツバキの生垣（武川村）	69



- 1 新府城跡
- 2 榆之木遺跡
- 3 瞢訪原遺跡
- 4 平山遺跡
- 5 山ノ神遺跡
- 6 上小用遺跡
- 7 真原A遺跡
- 8 史跡谷戸城跡及び周辺遺跡

- 9 井富第4・井富第5遺跡
- 10 上の原遺跡
- 11 座田遺跡
- 12 上日野B・上日野C遺跡
- 13 中原遺跡
- 14 跡防大神社境内の壘り窯跡
- 15 有泉福齋翁墓及び句碑3基
- 16 金剛地金山神社祭典

- 17 伊豆ノ宮大權現湯立祭
- 18 五社神社の御正鉢
- 19 高麗寺のシダレクロマツ
- 20 高麗寺のサルスベリ
- 21 宮脇のイロハモミジ
- 21 萬休院のツバキの生垣

I 組織と活動

組織概要

北巨摩市町村文化財担当者会（以下、北文担と略す）は、平成7年4月より北巨摩郡内9町村と蓮崎市の文化財担当者を会員として組織され、文化財保護に関する啓蒙普及活動、文化財保護に関する調査研究、文化財担当者の資質向上を目的とする研修、郡内文化財保護行政の概要を報知するための年報発行を活動の主眼としている。さらに、山梨県教育庁学術文化財課長・峡北教育事務所長・北巨摩文化財審議会委員連絡協議会長を参考に迎え、その活動に指導・助言を頂いている。会運営は各自治体の負担金収入を元で、年報発行のための収入と支出の件は、負担金・事務局費・事業費とは別に設けている（文末、会則参照）。

そうした活動は、月1回の定例会により企画・実施されている。定例会は特に定めはないが、郡内自治体の協力を得て施設を拠点に開催している。

平成14年度北文担役員

平成14年度における北文担の役員は次のとおりである。

会長 山下幸司（蓮崎市）	事務局員 村松佳幸（長坂町）
副会長 雨宮正樹（高根町）	渡邊泰彦（大泉村）
参与 山梨県教育庁学術文化財課長	監事 伊藤公明（大泉村）
峡北教育事務所長	杉本 充（白州町）

北巨摩市町村文化財審議会委員連絡協議会長

以上の役員の他に年報編集・研究活動及び議事録作成のため、次のとおり委員が選任された。

年報編集・研究活動委員 佐野 隆（甲府村）・平山恵一（武川村）

書記 高須秀樹（双葉町）・間間俊明（三日月市）

平成14年度の活動

- 4月17日 定期総会【長坂町中央公民館】平成13年度事業・会計決算報告、平成14年度事業計画・予算・役員人事について協議。
- 5月15日 定例会【高根町生涯学習センター】各市町村の平成14年度事業・県外研修・年報発行について協議。臨地研修：湯沢遺跡出土の平安時代土器の見学
- 6月19日 定例会【武川村教育福祉センター】文化財行政現況調査アンケート実施①、県外研修・年報発行・研究活動について協議。臨地研修：宮闇出遺跡出土の平安時代上器の見学
- 7月27日 定例会【大泉村総合会館】文化財行政現況調査アンケート実施②、県外研修・年報発行・研究活動について協議。研究活動中間報告（長谷川誠「曾利式期の炉について」）
臨地研修：寺所第2遺跡出土の曾利式土器の見学
- 8月21日 定例会【白州町中央公民館】文化財行政現況調査アンケート実施③、県外研修・年報発行・研究活動について協議。臨地研修：上小用遺跡の発掘調査現場見学
- 9月18日 定例会【猪土町ふれあい館】文化財行政現況調査アンケート実施④、県外研修・年報発行・研究活動について協議。臨地研修：大小久保遺跡記録ビデオの鑑賞
- 10月23日 定例会【小瀬沢町福祉活動センター】文化財行政現況調査アンケート実施⑤、県外研修・年報発行・研究活動について協議。臨地研修：上前後沢遺跡出土の弥生時代前期窯の見学
- 11月2日 見学会【蓮崎市宿戸第2遺跡】
- 11月8日 定例会【甲府村埋蔵文化財センター】文化財行政現況調査アンケート実施⑥、県外研修・年報発行・研究活動について協議。臨地研修：源訪原遺跡出土の焼成粘土塊・古形土器の見学
- 11月17日 見学会【大泉村国指定史跡谷戸城跡】県外研修
- 12月18日 定例会【蓮崎市市民会館】文化財行政現況調査アンケート実施⑦、県外研修・年報発行・研究活動について

- て協議。臨地研修：国指定史跡新府城跡の発掘調査現場見学、苗敷山山頂遺跡出土遺物の見学
- 1月15日 定例会【双葉町民会館】県外研修・年報発行・研究活動・研修会について協議。臨地研修：塔之越経筒の見学
- 1月18日 県外研修Aコース【新潟県上越地方】上越市埋蔵文化財センター、新井市郷土資料館、はーとぴあ中郷、妙高村雪國民俗資料館の見学（参加者3名）
- 2月19日 定例会【須玉町ふれあい館】県外研修・年報発行・研究活動・研修会について協議。
北巨摩郡中巨摩文化財担当者合同研修会
- 3月19日 定例会【長坂町中央公民館】文化財行政現況調査結果報告。県外研修・年報発行について協議。研究活動報告（長谷川誠「曾利期の石燈籠と土器の大きさの関係について」、大山祐喜「奈良・平安時代集落出土の鉄製品について」、間間俊明「北巨摩地域の曾利式土器（前篇）」）臨地研修：蝶塚遺跡の発掘調査現場見学研修会「中世から近世の考古学」川代孝氏（山梨県埋蔵文化財センター）
- 3月28日 県外研修Bコース【長野県東信地方】望月牧関連遺構の見学、望月町歴史民俗資料館見学
- 3月29日 県外研修Cコース【東京都多摩地域】八王子城跡、滝山城跡、前田耕地遺跡の見学

文化財行政現況調査

地方分権とともに平成12年度の文化財保護法改正により、市町村は今まで以上に文化財行政に責任を負うことになった。また市町村合併の論議が活発化し、これまでの文化財行政の在り方を振り返る必要が生じた。

そこで北文担では各市町村の文化財行政の現状を把握するため、アンケート方式で現況調査を行った。調査項目は下記のとおりである。

第1回「一般文化財」	第5回「埋文・調査基準と体制」
第2回「文化財審議会他」	第6回「埋文・積算基準」
第3回「埋文・周知と調整」	第7回「埋文・出土品の取扱い」
第4回「展示・収蔵施設」	第8回「学校教育・社会教育との連携」

今後、この調査結果をもとに、より良い文化財行政の在り方について検討していかたい。

平成14年度北巨摩市町村文化財担当者会会計決算報告

収入の部

単位：円

項目	予算額	決算額	比較増減	備考
前年度繰越金	0	0	0	
市町村負担金	100,000	100,000	0	10市町村×10,000円
その他の収入	100	0	△100	預金利息
合 計	100,100	100,000	△100	

支出の部

単位：円

項目	予算額	決算額	比較増減	備考
事務局費	70,100	68,717	△1,383	
通信費	65,100	65,407	307	切手代（通知・年報発送用）
事務費	5,000	3,310	△1,690	菓子折 望月町議長食代
事業費	30,000	31,283	1,283	
資料普及活動費	10,000	12,224	2,224	上越地方資料普及及施設視察研修
講師謝礼	10,000	10,000	0	講師1名×10,000円
研修会費	100,000	9,059	△941	八王子城他研修
合 計	100,100	100,000	△100	

収入決算額100,000円 - 支出決算額100,000円 = 0円

平成14年度年報発行特別会計

収入の部

単位：円

項目	予算額	決算額	比較増減	備考
年報発行費	500,000	500,000	0	10市町村（負担金等）×50,000円
合計	500,000	500,000	0	

支出の部

単位：円

項目	予算額	決算額	比較増減	備考
年報印刷製本費	500,000	500,000	0	A4判、700部
合計	500,000	500,000	0	

収入決算額500,000円－支出決算額500,000円＝0円

北巨摩市町村文化財担当者会会則

- 第1条 本公司は、北巨摩市町村文化財担当者会と称し、事務局を会長の定めるところにおく。
- 第2条 本公司は、各市町村における文化財保護・研究・活用の推進のために、必要な研修を行うことと同時に文化財担当者相互の親睦を図り、北巨摩地区文化財行政の進展に資することをもって目的とする。
- 第3条 本公司は、前条の目的を達成するために、次の事業を行ふ。
- (1)文化財調査成果を地域社会に還元するための各種行事の企画・運営。
 - (2)各市町村の文化財を素材とした月例の研究会の開催。
 - (3)先進地との交流および視察。
 - (4)各市町村単位で行う事業の相互援助。
 - (5)関係機関との文化財行政についての研究協議。
 - (6)関係機関との文化財調査についての研究協議。
- 第4条 本公司は、各市町村教育委員会に勤務する文化財担当者および調査員をもって組織する。
- 第5条 本公司に次の役員をおく。
- 会長1名、副会長1名、事務局員2名、監事2名、参与3名
- 第6条 役員の選出は次のようにする。
- (1)会長・副会長は、会員の中から会員の互選とする。
 - (2)事務局員は会長が委嘱する。
 - (3)監事は役員以外の会員の中から1名、北巨摩教育事務所から1名を選出する。
 - (4)参与は、山梨県教育庁学術文化財課長、北巨摩教育事務所長および北巨摩文化財審議会委員連絡協議会長をもって構成する。
- 第7条 役員の任期は1年とする。ただし、事務局員は2年とする。役員の再任にあたってはこれを防げない。
- 第8条 会長は、会を統括するとともに外部に対して会を代表する。副会長は、会長を助け会員事故ある時は、これに代わる。事務局員は、庶務・会計にある。監事は、会計を監査する。
- 第9条 本公司の経費は、各市町村負担金およびその他の収入をもってあてる。各年度の市町村負担金額は事業計画に準じて前年度に会員協議のうえ取り決める。
- 第10条 会計は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。
- 第11条 会計の処理については、年度末および必要に応じて会員に報告する。

付則

この会則は、平成7年4月1日から実施する。



県外研修 新潟県妙高村雪国民俗資料館



県外研修 滝山城跡の見学



県外研修 長野県北御牧村



県外研修 望月牧開連遺構の見学

II 研究活動報告

北巨摩地域の曾利式土器（前篇）

北巨摩市町村文化財担当者会

はじめに

北巨摩地域の10市町村では、毎年数多くの遺跡が発掘調査されている。その多くから、山梨県の縄文時代中期後半を代表する曾利式土器が膨大に出土している。

曾利式土器の研究は、1965年の藤森栄一氏による井戸尻編年の設定により始められる。その後先達による研究・発掘調査成果により、曾利式土器は甲府盆地から八ヶ岳山麓を中心に分布する型式と捉えられるようになつた。

近年では、曾利式土器の地域ごとの型式的相違が指摘されるなど新たな方向性が示されている。このような中

で、北巨摩市町村文化財担当者会では、地域に有用な編年を作成し、曾利式土器文化圏での北巨摩地域の位置付けや小地域ごとの特色の抽出を試みることにした。

平成11年度から第1図のような統一様式を用いて、各市町村担当者が北巨摩地域の曾利式土器の集成を分担しておこなつた。対象は、報告書が刊行されたもののうち、主に遺構から出土したものである。その際に遺構や出土石器などを集成対象とした。集成と同時並行で、北巨摩地域を中心としたこれまでの研究成果と課題および曾利式期の遺跡分布を検討した。
(平山恵一)



第1図 集成様式と集成例

第1章 研究小史

曾利式土器の研究はその型式名が付されて以来、40年近くの研究が蓄積されている。その研究史について近年では、今福利恵氏が詳細に分析している。

ここでは、本稿で取り扱う山梨県北西部である北巨摩地域を中心とした近年の論文や報告書等をまとめつつ、これまでの研究を振り返り、課題などを述べていくこととする。

北巨摩地域中心の土器編年提示で先駆けとなるのは柳坪遺跡をはじめとする中央道建設に伴う発掘調査による資料を用いた、米田明調氏の研究を擧げることができる（米田1978・1986）。中でも曾利II式とIII式の差異と曾利V式の細分については今なお課題となっている。

曾利IV式とV式の差異は脣部文様の蛇行懸垂文（縦位

波状懸垂文）の有無としている（第2図）。それに対し、櫛原功一氏は脣部地文の「ハ」の字状文の有無をメルクマールとしており、統一的見解が見出せていない（第3図）。

その後、末木健氏により『縄文文化の研究』・『縄文土器大観』で曾利式土器編年が提示される（末木1981・1988）。この頃まで甲府盆地内での発掘調査事例は少なく、八ヶ岳山麓出土資料を中心に進められてきたといえる。

1987年に駿河堂遺跡群の報告書が刊行され、その中小野正文氏は編年を提示した。この資料を中心として山形眞理子氏は、これまで八ヶ岳山麓を中心に進められてきた曾利式土器編年を再構築する作業をおこなつた。

曾利式土器は「胴部主紋様として懸垂文」を持ち、かつ「胴部地紋として縦の条線を持つ」ことが条件とし、施紋順序に「施紋順序A」（胴部懸垂文→胴部地文）と「施紋順序B」（胴部地文→胴部懸垂文）の存在を指摘した。この「施紋順序B」の出現が加曾利E式との関係の中で発生するとし、曾利古式と曾利新式の2大別を提示した。また、曾利式と加曾利E式の終末について、「金の尾段階」と「一の沢1号住段階」を設定し、同時に終了しないことを改めて示した（山形1996・1997）（第4図）。

山形眞理子氏の論考に前後する中、資料の増加も後押しし、曾利式の地域性が論じられ、近年では地域性を視野に入れた編年が提示されている。その成果として、橋原功一氏、今福利恵氏、佐野隆氏や伊藤公明氏を中心に振り返りたい。

瀬原氏は甲府盆地東側と八ヶ岳西南麓の曾利I式土器を比較し、以下の地域差を明らかにした。

- ・曾利古式に八ヶ岳西南麓では大型長胴甌は少なく、小型深鉢が主体である。
- ・粘土紐蛇行隆線文が八ヶ岳西南麓では頸部文様に多用されるのに対し、甲府盆地東側では胴部文様に多用される。
- ・鋸節状粘土紐文、連続爪形文、横位綱帯沈線文、交瓦沈線蛇行隆帶、工字状文などの文様が八ヶ岳西南麓中心に見られる。この指摘により、一地域として扱われてきた山梨県内に、地域差が存在することが明らかとなった（瀬原1993）。

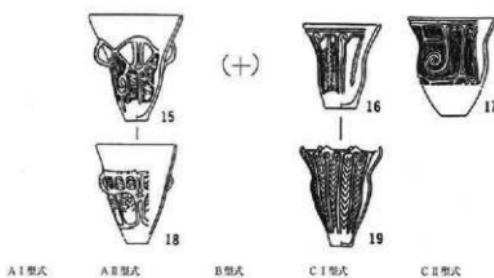
さらに社口遺跡（高根町）を報告する中で、中期3・4段階とした曾利I式土器の特徴として次のことを指摘した（第5図）。

- ・頸部文様帶中の溝巻文は、甲府盆地東側では少ない。
- ・頸部の橋状把手は、甲府盆地東側では少ない。
- ・頸部文様の人体文系統は、甲府盆地東側では少ない。
- ・頸部の波状文は、本来甲府盆地東側に多い。

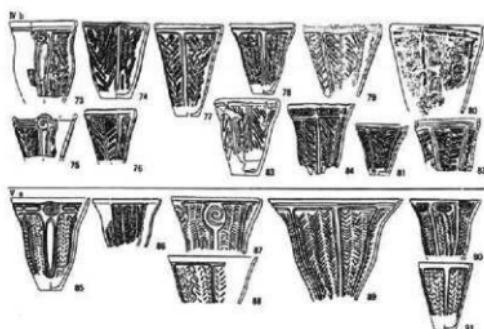
氏はこれららの研究をふまえ、「曾利式土器編年私案」を提示した。山形氏と異なり、

著者注記

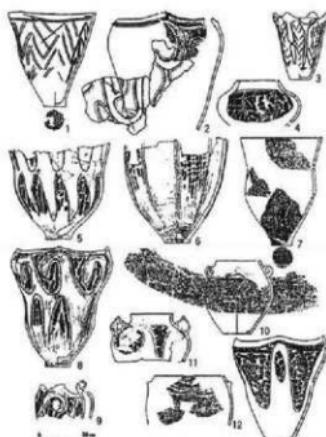
著者注記



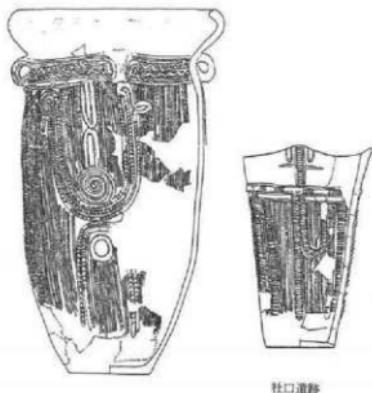
第2図 米田明調氏の曾利IV式とV式の区分（米田1978から作成）



第3図 橋原功一氏の曾利IV式とV式の区分（橋原1999）



第4図 山形眞理子氏の中期終末土器（山形1996）



第5図 八ヶ岳南麓の曾利式土器の特徴

曾利式土器の地域差を考慮しながら、各地域間の差異を明確にしつつ、他地域との比較がおこなわれた。曾利式土器を器形、口縁部文様帯、胴部文様モチーフ、地文の組み合わせにより分類し、7類型に分け、各類型変遷を示しながら、併行関係を探った。結論として、5大別11細分することを提示した（柳原1999）。

柳原氏による一連の研究の集大成であるが、氏が述べるように、型式学的検討を中心に進められており、遺構の重複関係などの層位的検討作業は今後の課題である。

今福氏は井戸尻編年で示された曾利I～V式の細分は有效であり、曾利古式・新式という呼称があくまでも甲府盆地東側中心の編年であり、新たな型式名をつけることは混乱を招くとし、名称としての曾利I～V式の妥当性を説いている（今福1999a・b）。

このような考え方を基に、曾利I式古・新段階、II式、III式、IV式古・新段階、V式古・新・終末段階の9細分を提示した。これまで曾利II式は胴部の地文や懸垂文のあり方で2細分案が提示されていた（米田1986）が、八ヶ岳地域と甲府盆地東地域の地域差の可能性が高いことを示唆した（今福1999a）。

曾利II式期に見られる結節繩文について、柳原氏は柳坪北遺跡（長坂町）を整理する中で、これまで結節繩文施文が曾利II式古段階のメルクマールとされてきた変遷を再考した。口縁部文様帯の有無によりA・B類に分類し、さらに口縁部文様区間に縄文施文されているものをa類、沈線施文をb類とし、a→b類への変遷を推察した。また、結節繩文が曾利II式の中で減少しながらも

存在することも指摘し、この変遷が有効な地域が八ヶ岳周辺に限定されることも確認している（柳原2002）。

佐野氏は次郎構遺跡（高根町）・諏訪原遺跡（明野村）・屋敷添遺跡（同村）の資料を用いて、曾利V式を曾利新3式古・中・新段階と曾利新4式に細分した。曾利新4式は山形氏の「金の尾段階」に相当し、同様に曾利式の終焉は加曾利E式よりも前段階であることを提示した（第6図）。御歳地遺跡（須玉町）をはじめとする北巨摩地域で曾利式を伴わず加曾利E4式のみの構成があることから、西関東地域における状況（山本1992）と異にする可能性が高い。

曾利式と加曾利E式の終末問題について、平山恵一氏は、中谷遺跡（都留市）や大月遺跡（大月市）などの資料を用いて検討を加えている（平山2000）。加曾利E3式は曾利新3式古～新段階に、加曾利E4式（古）は曾利新3式新段階の一部と曾利新4式に併行し、加曾利E4式（新）に曾利式は伴わないとした（第7図）。

このように曾利式と加曾利E式の終末問題については、山梨県内ではタイムラグを認める考えが多いようである。しかし、一方で資料が少ない点や後期の土器型式とのつながりを視野に入れ再検討すべきという意見もある（今福1999）。

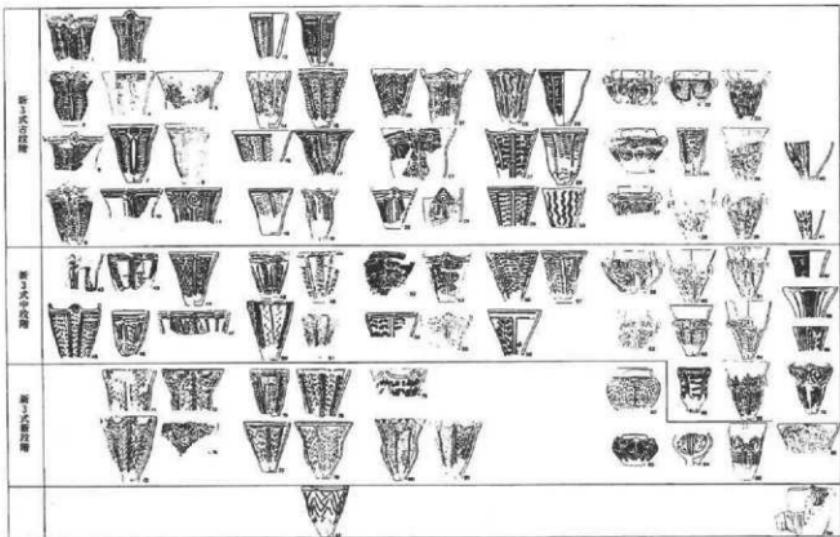
伊藤氏はX字状把手付大型深鉢形土器（以下、X状把手深鉢とする）の分析を通して、以下のように八ヶ岳南麓・西南麓・甲府盆地で地域相が異なることを指摘した（伊藤1998・2001）。

- ・八ヶ岳南麓の曾利II式期のX状把手深鉢が、把手部と胴部文様が独立しているのに対し、西南麓や甲府盆地では連続的に文様が続く。
- ・八ヶ岳西南麓では南麓に先行して地文の変化が認められる。
- ・甲府盆地における初期のX状把手深鉢の地文が条線文であること、および曾利II式新段階で地文に列点文を施す個体が少ない。

これまで曾利式土器の地域性について具体的に示されていなかった中の指摘であり、今後の研究の方向性を示したものといえる（第8図）。

胎土分析といった土器型式分析以外から地域差を示した河西学氏の論考がある。分析の結果、八ヶ岳南麓と一般的に呼ばれている地域内で土器群の胎土に違いがあることを指摘し、「八ヶ岳南麓の拠点集落は広域的で活発な交流」がなされているが、「蓋無川流域の拠点集落および拠点集落周辺の小集落は狭小的で低調な交流」であったと推定している（河西2001）。

このような研究成果を基に、北巨摩市町村文化財担当



第6図 佐野隆氏の曾利V式の編年 (佐野1997)

曾利E式土器												曾利V式土器												
(12C)			新一大式古器			新二式古器			新三式古器			(12C)			(12C)			(12C)			(12C)			
			1	2		5	6	7	15	16		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
			3	4		8	9	10	17			13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
			5			12	13	14	18	19		26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
			31	32		39	40	41	42	43		44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56
			33	34		37	38	39	40	41		42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54
			35	36		40	41	42	43	44		45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57

第7図 平山恵一氏の曾利V式と加曾利E 3 : 4式の編年 (平山2000)

者会では北巨摩地域（八ヶ岳南麓）の地域区分の中での地域差を明確にしつつ、曾利式土器を構成する類型別変遷や地域的特徴を捉えた細分をおこなうこととした。その過程として、北巨摩地域内の曾利式期遺跡分布図を本調査の有無にかかわらず作成し、幅年資料として用いる遺跡の意味付けをおこなう。その上で、区分した各地域の土器群の様相を捉えることとする。（間間俊明）



第8図 八ヶ岳南麓のX字状把手付大型深鉢形土器

第2章 北巨摩の地理的環境と曾利式期の遺跡分布

第1節 北巨摩の地理的環境

山梨県北西部（北巨摩地域）の地形を特徴付ける要因として、八ヶ岳連峰と茅ヶ岳、釜無川と塩川・須玉川が挙げられる。

長野県との県境を為す八ヶ岳連峰は北巨摩地域の北限を画すもので、その南麓は蓮崎岩屑流によって形成された緩やかな傾斜面となっている。この南麓の西側を流下する釜無川と東側を流下する塩川・須玉川に浸蝕・分断された台地は、側面の切り立った崖が約28km（7里）続くことから七里岩台地（地元では台上と呼ばれる）と呼ばれ、八ヶ岳から続いて三角形に南へ張り出した形になっている。さらに、この台地の南端は、最大幅1.5km、長さ9kmの細長い特殊な台地となっている。

一方、釜無川と塩川・須玉川の流域にも浸蝕作用により幅の狭い平地～緩傾斜面が形成されている。七里岩台地を挟んで流下するこれらの河川は、細長い台地が始まると辺りで須玉川が塩川に合流し、この台地が終わるところで塩川が釜無川に合流する。須玉川と合流する付近の塩川は、茅ヶ岳西麓を巡るように流れしており、この部分では塩川左岸は茅ヶ岳の西麓とも重なっている。

以上のように地形的に七里岩台地（高根町・大泉村・長坂町・小瀬沢町・蓮崎市的一部分）、塩川流域（須玉町・明野村・蓮崎市的一部分・双葉町）と釜無川流域（白州町・武川村・蓮崎市的一部分）の3地域に分けることが可能である。しかし、地理的区分が必ずしも曾利式土器の地域性にオーバーラップするとは限らないことは、これまで

の研究や発掘調査時の経験則から明らかである。第2節以下では、前述した地理的区分を基本としつつ、地域性を視野に入れ、説明することとする。（渡辺泰彦）

第2節 曾利式期の遺跡分布

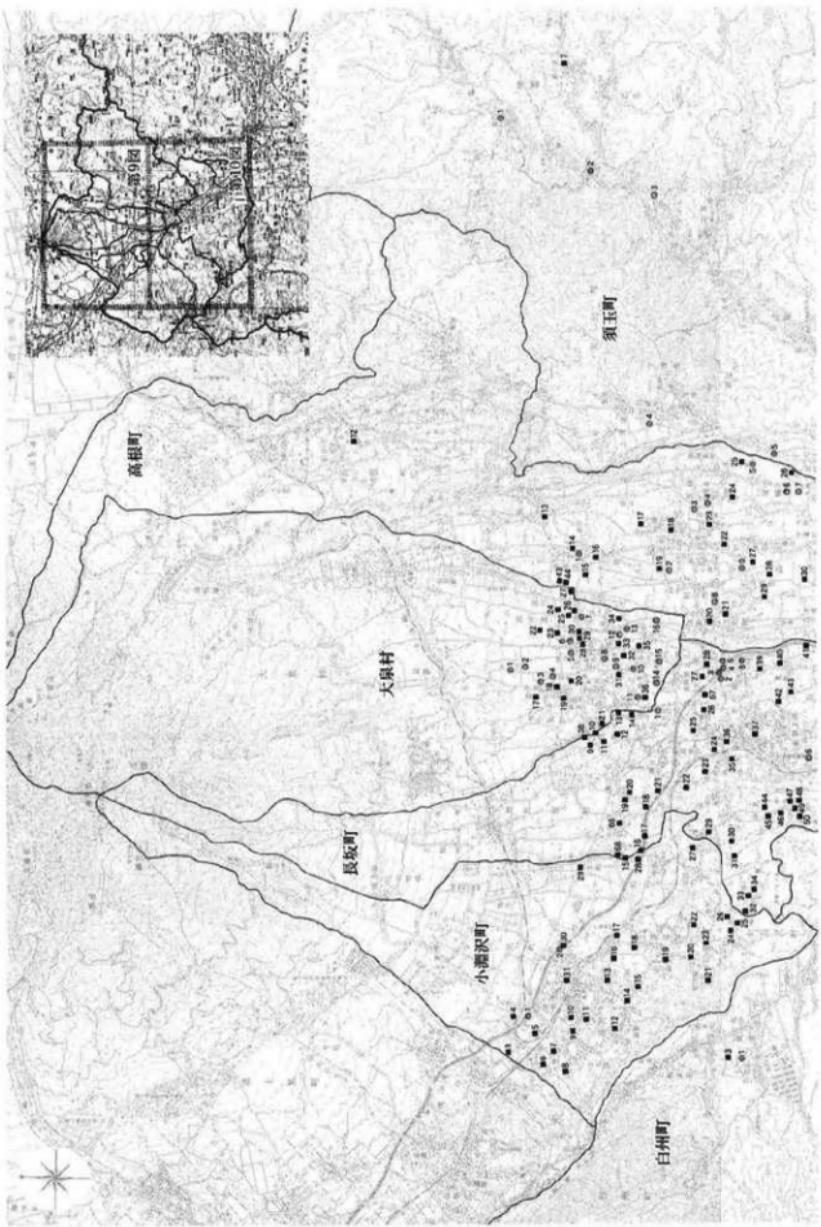
北巨摩地域では、各地域で地形の様相が多岐にわたる。ここでは各地域での遺跡分布を概観する（第9・10図、第1～4表）。

七里岩台地北半（高根町・大泉村・長坂町・小瀬沢町）では、標高1000m付近で八ヶ岳の裾野が緩傾斜になり、地形の変化点となっている。遺跡は、この地形変化点より低い場所にある。鳩川・油川・泉川・川俣川などの小河川が南北に流れ、水資源に地理的偏りがないためか、台地上の各地に見られる。また台地西側の縁辺部沿いには、台地幅が急激に細くなる場所から県境まで断続的に遺跡が存在する。

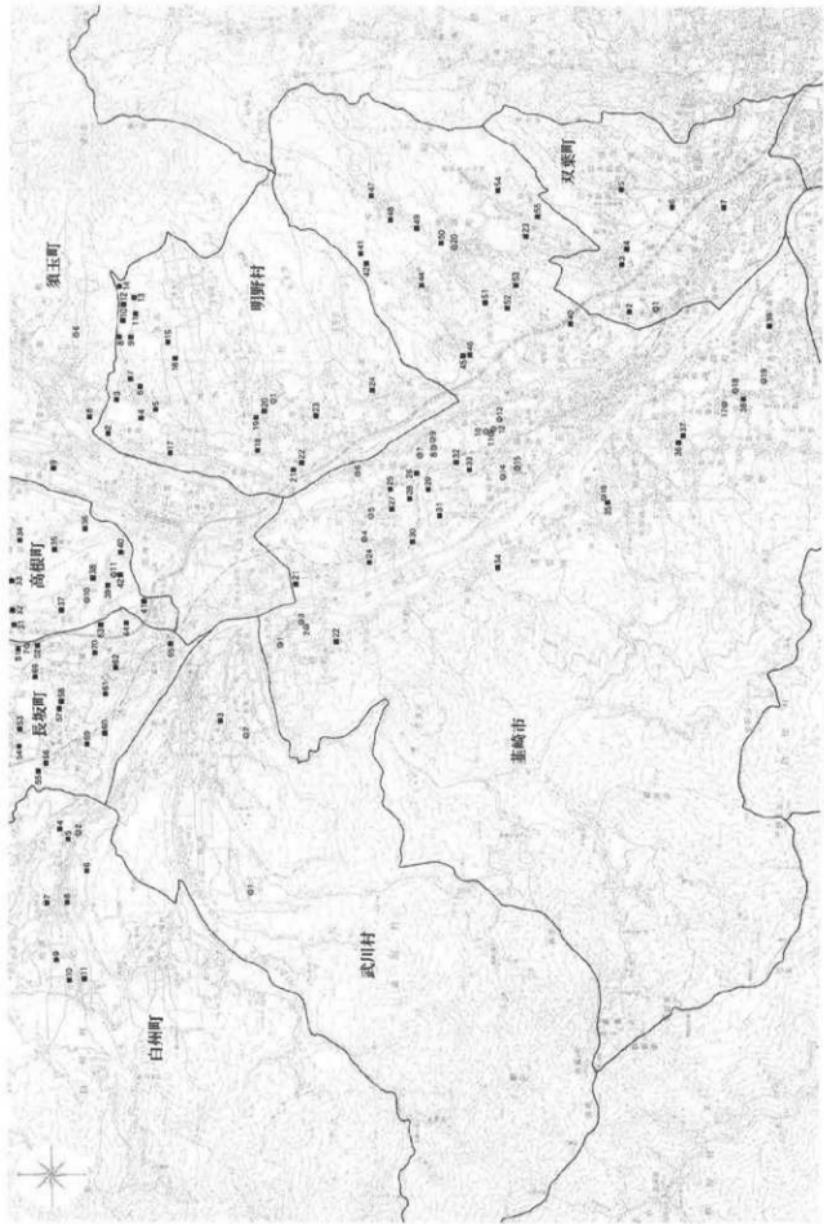
七里岩台地は標高600m付近で急激に幅が狭くなるが、この地点には遺跡は現在のところ確認されていない。これ以降では台地上に小河川はなく、湧水地・湿地が点在し、遺跡も同様である。

釜無川右岸では、河岸段丘の幅が南にいくほど広くなる。南アルプスからの傾斜がきつく段丘の幅が狭い場所（白州町・武川村）では、釜無川に流れ込む小河川沿いに、その中流にまで遺跡が立地する傾向がみられる。対して段丘の幅が広い場所（蓮崎市）では、小河川からや離れた場所で、下流域に立地する。

塩川流域では、茅ヶ岳の山麓が緩やかに延びており、



第9図 北巨摩地域の曾利式路線分佈図(1) S = 1 / 100,000 (◎は料金付道路、■は料金外の曾利式路の道筋)



第10図 北巨摩地域の曾利式町道路分布図(2) S=1/100,000

第1表 遺跡地名表(1)

Ku	地区	遺跡名	市町村名	字名	刊行年	執筆者	報告書名	発行機関	墓室対象	備考
1	茅ヶ岳	高台・中谷井	明野村	上手高台	1994	佐野 隆	高台・中谷井	明野村教育委員会	住 1	
1	台上	大和田第3	大泉村	谷戸	1990	伊藤公明	大和田第3	大泉村教育委員会	その他	
2	台上	大和田第2	大泉村	谷戸	1989	伊藤公明	大和田・大和田第2	大泉村教育委員会	その他	
3	台上	大和田	大泉村	谷戸	1989	伊藤公明	大和田・大和田第2	大泉村教育委員会	住 7・土坑 4・その他	
4	台上	方城第1	大泉村	谷戸	1988	伊藤公明	方城第1遺跡	大泉村教育委員会	住 8・土坑 13・その他	
5	台上	姥神	大泉村	西井山	1987	斎原功一	姥神遺跡	大泉村教育委員会	住 12・土坑 2・その他	
5	台上	姥神	大泉村	西井山	1993	斎原功一	「普利」式土器の再検討 「鶴文時代」4	鶴文時代文化研究会	その他	採集資料
6	台上	東姥神B	大泉村	西井山	1985	斎原功一	東姥神B遺跡	大泉村教育委員会	住 1・その他	
7	台上	古林第4	大泉村	西井山	1998	伊藤公明	「古林第4遺跡」山梨県史	山梨県	土坑 3	
8	台上	天神A区	大泉村	西井山	1994	新津 健	天神遺跡	山梨県教育委員会	住 5・土坑 1	
9	台上	山崎	大泉村	西井	1987	小林弘正	「鶴文時代の上坑について」 「研究紀要」4	山梨県総合文化財センター・山梨県立考古博物館	土坑 1	
10	台上	城下	大泉村	谷戸	1990	八巻り志夫	城下・原田遺跡	山梨県教育委員会	その他	
11	台上	豆生田第3	大泉村	谷戸	1986	斎原功一	豆生田第3遺跡	大泉村教育委員会	その他	
12	台上	宮地第2	大泉村	西井山	1991	伊藤公明	宮地第2・宮地第3遺跡	大泉村教育委員会	住 6・その他	
13	台上	宮地第3	大泉村	西井山	1991	伊藤公明	宮地第2・宮地第3遺跡	大泉村教育委員会	住 1・その他	
14	台上	金生	大泉村	谷戸	1989	新津 健	金生遺跡II (鶴文時代編)	山梨県教育委員会	住 2	
15	台上	寺所	大泉村	谷戸	1987	新津 健	寺所遺跡	山梨県教育委員会	住 1	
16	台上	甲ヶ原	大泉村	西井山	1988	山本茂樹ほか	甲ヶ原遺跡IV	山梨県教育委員会	住 16・土坑 9・その他	
16	台上	甲ヶ原	大泉村	西井山	1994	山本茂樹ほか	甲ヶ原遺跡I (第5次調査)	山梨県教育委員会	住 1	
16	台上	甲ヶ原第6地点	大泉村	西井山	1994	伊藤公明	甲ヶ原遺跡第6地点・第7地点	大泉村教育委員会	住 2	
16	台上	甲ヶ原第7地点	大泉村	西井山	1995	伊藤公明	甲ヶ原遺跡第6地点・第7地点	大泉村教育委員会	住 3・土坑 4	
16	台上	甲ヶ原	大泉村	西井山	1996	山本茂樹ほか	甲ヶ原遺跡II (第3次・第4次調査)	山梨県教育委員会	住 2	
1	台上	中原	小瀬沢町	上久保	1974	末木 健	山梨県中央道埋蔵文化財包 藏地元発掘調査報告書	山梨県教育委員会	住 7	
2	台上	上平井出	小瀬沢町	宮久保	1974	末木 健	山梨県中央道埋蔵文化財包 藏地元発掘調査報告書 -北口 側部小瀬沢町内-	山梨県教育委員会	住 1・土 1	
3	塙川	上の平	須玉町	小尾	1998	須玉町史	須玉町史	須玉町	住 2	
2	塙川	塙川	須玉町	北志	1992	塙川明廣	塙川遺跡	山梨県教育委員会	住 6	
3	塙川	鄭飛地	須玉町	増富	1987	田代 朝	鄭飛地遺跡	山梨県教育委員会	住 1	
4	塙川	津金御所前	須玉町	下津金	1987	山路恭之助	津金御所前遺跡	須玉町教育委員会	住 1	
5	塙川	川又南	須玉町	六平	1986	山路恭之助	川又南遺跡	須玉町教育委員会	住 1・その他	
6	茅ヶ岳	上ノ原	須玉町	江草	1999	斎原功一ほか	上ノ原遺跡	上ノ原遺跡発掘調査 報告書	住 12・土坑 123・その他	
1	台上	野添	高根町	東井山	1987	山河二三子ほか	山梨県高根町野添遺跡発掘 調査報告書	八ヶ岳南麓遺跡学術 調査会	住 3・土坑 3・その他	
2	台上	米田	高根町	村山西割	1997	雨宮正樹	藤林寺跡遺跡・八ツ牛遺跡 ・片井北遺跡・八ツ牛北遺跡 ・下風呂遺跡・米田北成跡	高根町教育委員会	住 1	
3	台上	東久保	高根町	村山北割	1984	雨宮正樹	東久保遺跡	高根町教育委員会	住 1	
4	台上	社口	高根町	村山北削・東 割	1997	斎原功一	社口遺跡第3次調査報告書	社口遺跡発掘調査班	住 2・土坑 1・その他	
5	台上	川又坂上	高根町	糞輪・荒輪削 田	1993	新津 健	川又坂上遺跡	山梨県教育委員会	住 2・土坑 1・その他	
6	台上	海道前C	高根町	糞輪	2000	田口明子ほか	古墳遺跡・大林・京峰・宮の前 遺跡・海道前C遺跡・人林遺跡	山梨県教育委員会	住 5・土坑 1・その他	
7	台上	宮の前	高根町	糞輪	2000	田口明子ほか	古墳遺跡・大林・宮の前 遺跡・海道前C道路・大林道路	山梨県教育委員会	住 1	
8	台上	西原	高根町	村山西割	1987	雨宮正樹	西原遺跡・当町遺跡	高根町教育委員会	住 1	

第2表 遺跡地名表(2)

No	地区	遺跡名	市町村名	字名	刊行年	執筆者	報告書名	発行機関	集成対象	備考
9	台上	下風呂	高根町	村山東割	1997	雨宮正樹	幕林寺跡・八ツ牛遺跡・ 持井北遺跡・八ツ牛北遺跡・ 下風呂遺跡・米田北遺跡	高根町教育委員会	その他	
10	台上	丘影凹	高根町	下黒沢	1995	野代幸和	丘影凹遺跡(第1・2次調査)	山梨県教育委員会	住1・土坑1	
11	台上	次郎様	高根町	下黒沢	1996	雨宮正樹	次郎様遺跡	高根町教育委員会	住13・土坑17	
12	台上	別当西	長坂町	大八田	1997	小宮白 隆	別当西遺跡	長坂町教育委員会	その他	
2	台上	柳坪北	長坂町	大八田	2002	鶴原功一	柳坪北遺跡	柳坪北遺跡調査会	住2・その他	
3	台上	柳坪A	長坂町	大八田	1975	木本 健は か	山梨県中央道埋蔵文化財包 括地発掘調査報告書一北巨 摩郡坂牧・明野・蘿崎地内一	山梨県教育委員会	住6	
3	台上	柳坪A	長坂町	大八田	1986	森田明訓	柳坪遺跡	山梨県教育委員会	住5・その他	
4	台上	柳坪B	長坂町	大八田	1975	木本 健は か	山梨県中央道埋蔵文化財包 括地発掘調査報告書一北巨 摩郡長坂・明野・蘿崎地内一	山梨県教育委員会	住14・土坑1	
4	台上	柳坪B	長坂町	大八田	1986	米田明輝	柳坪遺跡	山梨県教育委員会	住2・土坑1	
5	台上	境原	長坂町	大八田	1997	小宮山 隆	柳坪南遺跡・境原遺跡	長坂町教育委員会	その他	
6	台上	酒呑塙	長坂町	長坂上条	1996	小宮山 隆	酒呑塙遺跡G区	長坂町教育委員会	住4	
7	台上	頭舞	長坂町	豪川	1975	木本 健は か	山梨県中央道埋蔵文化財包 括地発掘調査報告書一北巨 摩郡長坂・明野・蘿崎地内一	山梨県教育委員会	住15・土坑 1・その他	
8	台上	石原庄重	長坂町	大八田	2001	平野 修	石原庄北遺跡 Jマーク地 点発掘調査報告書	石原庄北遺跡発掘調 査会	その他	
1	益無	北堀地	北埼市	門野町上門井	1989	山下孝司	北堀地遺跡	北埼市教育委員会	住2	
2	益無	堀地	北埼市	門野町上門井	1993	山下孝司	堀地遺跡II	北埼市教育委員会	土坑2	
3	益無	石ノ坪 (東地区)	北埼市	門野町上門井	2000	鶴原功一	石ノ坪遺跡(東地)(X)	北埼市教育委員会	住14・土坑3	
4	益無	宿尻	北埼市	穴山町宿尻	1993	中山誠二 ほか	宿尻遺跡	北埼市教育委員会	住4	
4	益無	宿尻	北埼市	穴山町宿尻	2002	間間後明ほ か	宿尻遺跡	北埼市教育委員会	その他	
5	台上	伊藤庭第2	北埼市	穴山町伊藤庭	1991	山下孝司	伊藤庭第2遺跡	北埼市教育委員会	その他	
6	台上	中本庄	北埼市	穴山町中本庄	1987	山下孝司	中本庄遺跡	北埼市教育委員会	その他	
7	塙川	中田小学校	北埼市	中田町中條	1985	山下孝司	中田小学校遺跡	北埼市教育委員会	住1・その他	
8	塙川	金山	北埼市	中田町中条	1985	山下孝司	金山遺跡	北埼市教育委員会		
9	塙川	前田	北埼市	中田町中条	1988	山下孝司	前田遺跡	北埼市教育委員会		
10	塙川	北後田	北埼市	藤井町坂井	1990	山下孝司	北後田遺跡	北埼市教育委員会	住15	
11	塙川	宮ノ前	北埼市	藤井町駒井	1992	山下孝司	宮ノ前遺跡	北埼市教育委員会	住13 か	
12	塙川	後田	北埼市	藤井町坂井	1989	山下孝司	後田遺跡	北埼市教育委員会	住3・その他	
13	塙川	後日堂ノ前	北埼市	藤井町北下 条・坂井	1997	伊藤正彦	後日堂ノ前遺跡	北埼市教育委員会	その他	
14	益無	坂井(木ノ前)	北埼市	藤井町坂井	1998	坂井遺跡	北埼市教育委員会	土坑5		
15	益無	坂井南	北埼市	藤井町坂井	1984	山下孝司	坂井南遺跡	北埼市教育委員会	住1・土坑3	
16	益無	新日	北埼市	袖ヶ崎町武出	1996	伊藤正彦	新日遺跡	北埼市教育委員会	上丸6	
17	益無	焼地	北埼市	大草町上条東 沢	2002	山下孝司	「葛地」遺跡【ハヤカ考古】 平成13年度年報	北埼市教育委員会 財担当者会		
18	益無	羽根前	北埼市	大草町上条東 沢	1999	山下孝司	羽根前遺跡	北埼市教育委員会	その他	
19	益無	下鳥城	北埼市	大草町上条東 沢	2001	秋山圭子	「下鳥城遺跡調査追報」[八 ヶ岳考古] 平成12年度年報 財担当者会	北埼市教育委員会	住1	
20	塙川	飯米場	北埼市	難坂町宮久保	2002	間間後明ほ か	飯米場遺跡	北埼市教育委員会	住1・土坑 2・その他	
1	益無	上小原	白州町	鳥原	1990	折井 敦	東石民部跡(第2次)	白州町教育委員会	住5	
2	益無	根古屋	白州町	古ヶ原	1985	平野 修	根古屋遺跡	白州町教育委員会	住9	
3	茅ヶ岳	唐松	足典町	宇津谷	1996	五味信吾	唐松遺跡	山梨県教育委員会	住3・土坑6	
4	益無	真原A	武川村	山高	2001	竹田真人	「山梨県北巨摩郡武川村真原 A遺跡5号坑について」[八 ヶ岳考古] 平成12年度年報	北巨摩郡市町村文化 財担当者会	土坑1	
2	益無	向原	武川村	高沢	1985	里村 見	向原遺跡(概要)	武川村教育委員会	住1	

第3表 遺跡地名表(3)

No.	地域	遺跡名	市町村名	字名
2	茅ヶ岳	諏訪原	明野村	上神取諏訪原
3	茅ヶ岳	北原	明野村	浅尾新田北原
4	茅ヶ岳	寒陣堂	明野村	浅尾板浦
5	茅ヶ岳	神石II	明野村	浅尾新田諸石
6	茅ヶ岳	桃石	明野村	浅尾平石
7	茅ヶ岳	天王原	明野村	浅尾天王原
8	茅ヶ岳	上原I	明野村	浅尾上原
9	茅ヶ岳	上原II	明野村	浅尾上原
10	茅ヶ岳	上原III	明野村	浅尾上原
11	茅ヶ岳	上原IV	明野村	浅尾上原
12	茅ヶ岳	水路北	明野村	浅尾浅尾原
13	茅ヶ岳	上原田	明野村	浅尾上原
14	茅ヶ岳	上原IV	明野村	浅尾浅尾原
15	茅ヶ岳	施ノ木	明野村	浅地施ノ木
16	茅ヶ岳	梅ノ木II	明野村	浅尾浅尾原
17	茅ヶ岳	寺前	明野村	上神取寺前
18	茅ヶ岳	桑森	明野村	上手桑森
19	茅ヶ岳	清水端	明野村	上手清水端
20	茅ヶ岳	平林	明野村	上手平林
21	茅ヶ岳	下反保	明野村	上手下反保
22	茅ヶ岳	栗敷添	明野村	上手栗敷添
23	茅ヶ岳	剣刺場	明野村	上手剣刺場
24	茅ヶ岳	中原	明野村	小笠原大主主
17	台上	林崎	大泉村	谷戸
18	台上	豊武	大泉村	谷戸
19	台上	下新所	大泉村	谷戸
20	台上	方城第2	人泉村	谷戸
21	台上	吉柳	大泉村	谷戸
22	台上	東原第3	大泉村	西井出
23	台上	東原第1	大泉村	西井出
24	台上	志林第1	大泉村	西井出
25	台上	若林第2	大泉村	西井出
26	台上	古林第1	大泉村	西井出
27	台上	油川第3	大泉村	西井出
28	台上	新井	大泉村	西井出
29	台上	中村	大泉村	西井出
30	台上	中村第2	大泉村	西井出
31	台上	城下第2	大泉村	谷戸
32	台上	寺所第2	大泉村	西井出
33	台上	宮地第4	大泉村	西井出
34	台上	古林第3	大泉村	西井出
35	台上	鴻沢	大泉村	西井出
36	台上	豆生山第1	大泉村	谷戸
3	台上	上前後沢	小瀬沢町	上高保
4	台上	上井造	小瀬沢町	上久保
5	台上	宗高	小瀬沢町	上久保
6	台上	岩窓	小瀬沢町	岩窓能
7	台上	竹原	小瀬沢町	上宮原能
8	台上	上官原	小瀬沢町	上官原他
9	台上	天神宮	小瀬沢町	上久保他
10	台上	御平	小瀬沢町	尾根御平
11	台上	殿平	小瀬沢町	高野殿平
12	台上	高野	小瀬沢町	高野舟久保
13	台上	上深沢A	小瀬沢町	宮久保
14	台上	上八里出	小瀬沢町	宮久保
15	台上	篠沢	小瀬沢町	宮久保
16	台上	夏秋	小瀬沢町	夏秋他
17	台上	東の前	小瀬沢町	上曾尾越の前
18	台上	東尾根	小瀬沢町	上曾尾根長尾根
19	台上	源氏塚	小瀬沢町	上曾尾源氏塚
20	台上	東車	小瀬沢町	上曾尾東車
21	台上	田畠	小瀬沢町	上曾尾田畠領
22	台上	尾尾	小瀬沢町	上曾尾氣尾
23	台上	江戸山	小瀬沢町	下曾尾江戸山

No.	地域	遺跡名	市町村名	字名
24	台上	前田北	小瀬沢町	下曾尾前田北
25	台上	前田南	小瀬沢町	下曾尾前田南
26	台上	深町	小瀬沢町	松向深町
27	台上	広面南	小瀬沢町	松向広面
28	台上	小野	小瀬沢町	女取区小野
29	台上	猿八田	小瀬沢町	女取区猿八田
30	台上	下平井出	小瀬沢町	宮久保
31	台上	上庄	小瀬沢町	尾根上庄
7	塙川	人柴	猿玉町	増富
8	塙川	下平	猿玉町	見立
9	塙川	糸糸	猿玉町	石糸子
12	台上	念場原	高根町	清里
13	台上	鬼敷形	高根町	長沢
14	台上	新林・石垣取	高根町	東井出
15	台上	曾の神	高根町	村山北割
16	台上	二の原A	高根町	村山北割
17	台上	二ノ原	高根町	地
18	台上	旭西久保八	高根町	村山北割
19	台上	大久保・八ツ牛	高根町	村山北割
20	台上	大坪	高根町	五町田
21	台上	高瀬原A	高根町	五町田
22	台上	石四前	高根町	村山東割
23	台上	横森	高根町	村山北割
24	台上	横森・横森前	高根町	実穂
25	台上	下原	高根町	寛輪新町
26	台上	海造前B	高根町	実穂
27	台上	上ノ反	高根町	村山東割
28	台上	老々森B	高根町	村山西側
29	台上	宮地	高根町	村山西割
30	台上	長崎A	高根町	小池
31	台上	宮尾根B	高根町	上風沢
32	台上	宮尾根A	高根町	上風沢
33	台上	長崎・後原	高根町	上風沢
34	台上	宮の前B	高根町	鹿原
35	台上	西ノ入	高根町	下風沢
36	台上	新井B	高根町	下風沢
37	台上	宮岩戸	高根町	下風沢
38	台上	馬場	高根町	下風沢
39	台上	大坪	高根町	下風沢
40	台上	坂上	高根町	下風沢
41	台上	坂上	高根町	下風沢
42	台上	打越	高根町	下風沢
43	台上	石堂A	高根町	東井出
44	台上	石堂B	高根町	東井出
9	台上	牛久保	長坂町	白井沢
10	台上	坂屋敷東	長坂町	白井沢
11	台上	坂屋敷	長坂町	白井沢
12	台上	牛久保南	長坂町	白井沢
13	台上	神之原	長坂町	白井沢
14	台上	屋敷財	長坂町	白井沢
15	台上	上フノリ平西	長坂町	大井ヶ森
16	台上	七フノリ平南	長坂町	大井ヶ森
17	台上	下フノリ平	長坂町	大井ヶ森
18	台上	葛原	長坂町	大井ヶ森
19	台上	西下岸敷	長坂町	白井沢
20	台上	東下岸敷	長坂町	白井沢
21	台上	新出森	長坂町	白井沢
22	台上	西中久保	長坂町	中丸
23	台上	久保	長坂町	中丸
24	台上	房尾敷	長坂町	大八田
25	台上	成岡	長坂町	大八田
26	台上	小屋原	長坂町	大八山
27	台上	柳新唇	長坂町	大八田
28	台上	疊田	長坂町	大八田

第4表 遺跡地名表(4)

No	地域	遺跡名	市町村名	字名	No	地域	遺跡名	市町村名	字名
29	台上	池の平	長坂町	中丸	43		欠番		
30	台上	東堀4	長坂町	中丸	44	茅ヶ岳	牛ヶ馬場	並崎市	徳坂町三之森
31	台上	東堀1	長坂町	中丸	45	茅ヶ岳	富ノ下	並崎市	徳坂町三之森
32	台上	後平	長坂町	中島	46	茅ヶ岳	社森	並崎市	徳坂町三之森
33	台上	風平北	長坂町	中島	47	茅ヶ岳	久保	並崎市	徳坂町柳平
34	台上	風平	長坂町	中島	48	茅ヶ岳	新井前	並崎市	徳坂町柳平
35	台上	高松	長坂町	長坂上条	49	茅ヶ岳	唐沢	並崎市	徳坂町柳平
36	台上	人林	長坂町	長坂上条	50	茅ヶ岳	上手沢	並崎市	徳坂町宮久保
37	台上	上町	長坂町	長坂上条	51	茅ヶ岳	夏狩	並崎市	徳坂町宮久保
38	台上	机屋敷北	長坂町	白井沢	52	茅ヶ岳	女大石	並崎市	徳坂町宮久保
39	台上	石原山南	長坂町	大八田	53	茅ヶ岳	鳥ノ小池	並崎市	徳坂町宮久保
40	台上	上ノ巣敷	長坂町	夏秋	54	茅ヶ岳	辻原磨	並崎市	徳坂町上今井
41	台下	頭無A	長坂町	夏秋	55	茅ヶ岳	絆原	並崎市	徳坂町上今井
42	台上	泡之森	長坂町	大八田	3	蓋無	東原	白州町	鳥原
43	台上	段道	長坂町	淡沢	4	蓋無	押野	白州町	花水
44	台上	新宿区健康村	長坂町	中丸	5	蓋無	星敷平	白州町	台ヶ原
45	台上	和手	長坂町	中丸	6	蓋無	陣ヶ原第1	白州町	白須
46	台上	腰垂	長坂町	中丸	7	蓋無	井音源小学校	白州町	白須
47	台上	愛久保	長坂町	中丸	8	蓋無	柳原	白州町	白須
48	台上	城山上	長坂町	中丸	9	蓋無	大除第5	白州町	白須
49	台上	店久保	長坂町	中丸	10	蓋無	竹字	白州町	白須
50	台上	浜春日麻美術館南	長坂町	中丸	11	蓋無	綱井第1	白州町	白須
51	台上	夏秋拂坪	長坂町	夏秋	2	塙川	駒沢	双葉町	宇津谷
52	台上	頭無(一本木)	長坂町	塙川	3	塙川	猛石	双葉町	宇津谷
53	台上	中反	長坂町	長坂上条	4	塙川	宇津塙	双葉町	宇津谷
54	台上	長坂上条	長坂町	長坂上条	5	塙川	新庄塙上	双葉町	团子新田
55	台上	池之半北	長坂町	日野	6	塙川	東福	双葉町	岩森
56	台上	池の半船和鬼北	長坂町	日野	7	塙川	重子石	双葉町	今井
57	台上	龍角西	長坂町	長坂下条	3	蓋無	黒沢	武川村	黒沢
58	台上	龍角	長坂町	長坂下条					
59	台上	上日野	長坂町	日野					
60	台上	上日野B	長坂町	日野					
61	台下	下尾敷	長坂町	長坂下条					
62	台上	原町曲差本牧前	長坂町	塙川					
63	台上	配罪	長坂町	塙川					
64	台上	魏馬場	長坂町	塙川					
65	台上	上日野春	長坂町	日野					
66	台上	横山平	長坂町	大井ヶ森					
67	台上	中之台	長坂町	大八田					
68	台上	上ノリ平北	長坂町	大井ヶ森					
69	台上	大久保	長坂町	淡沢					
70	台上	宮久保	長坂町	塙川					
21	台上	軍久	藍崎市	穴山町石水					
22	蓋無	穴浪円井	藍崎市	内野町宇波円井					
23	茅ヶ岳	辻合	並崎市	徳坂町長久保					
24	台上	裕尻第二	並崎市	穴山町宿尻					
25	台上	印新附中学校跡	並崎市	穴山町石水					
26	塙川	露紙長林	並崎市	中田町中條					
27	台上	石水耕倉	並崎市	穴山町石水・耕倉					
28	塙川	中田山道	並崎市	中田町中條					
29	塙川	忍岐殿	並崎市	中田町中條					
30	台上	南原	並崎市	穴山町石水					
31	塙川	田舎	並崎市	中田町中條					
32	塙川	長林	並崎市	中田町中條					
33	塙川	物井上野	並崎市	藤井町・物井・中田町中條					
34	蓋無	青木山沼	並崎市	酒井町・青木					
35	蓋無	鷹塚	並崎市	神山町北高地					
36	蓋無	旭上族北割金山	並崎市	旭町上條北割					
37	蓋無	旭金山	並崎市	旭町上條北割					
38	蓋無	大門	並崎市	大草町上條北割					
39	蓋無	長坂道下	並崎市	龍岡町上條東側					
40	茅ヶ岳	外輪原	並崎市	上ノ山外輪原					
41	茅ヶ岳	柿原第1	並崎市	徳坂町三之森					
42	茅ヶ岳	柿原	並崎市	徳坂町三之森					

遺跡は、その中腹にまで存在している。やはり小河川沿いに多く見られる。

このほか、塙川上流と川俣川上流に遺跡が確認されている。いずれも他地域との連結点として機能していた可能性があり、注目される。
(秋山圭子)

第3章 各地域の様相1（主要遺跡の概要）

編年作成にあたり、本来であれば、曾利式期を通じて集落がほぼ継続的に営まれたと考えられる遺跡を扱うことが妥当である。しかし、調査面積などの制約があることから、遺跡内容の異なるものも対象としなければならない。このようなことから、本章では、第2章で地域区分した3地域の中で、編年作業の基盤とする主要遺跡について概観していく。

(1) 七里岩台地（台上）

七里岩台地は、前述したとおり高根町・大泉村・長坂町・小瀬沢町・垂崎市の一部が該当するが、垂崎市の七里岩台地は、八ヶ岳山麓から延びる細長い特殊な台地であり、八ヶ岳山麓とは一線を画す地域である。また、高根町・大泉村・長坂町・小瀬沢町は台上4町村と呼ばれることもあり、以前から同一地域という認識が強い。よって、ここでは台上4町村の遺跡を扱うこととする。

台上では、開発行為が多かったこともあり、他地域と比べると曾利式期の遺跡の調査が多い。よく知られている遺跡では、曾利式土器編年研究上欠くことのできない柳坪遺跡（長坂町）、頬無遺跡（同町）があり、最近では甲ヶ原遺跡（大泉村）や酒呑場遺跡（長坂町）など長期間継続して営まれた大規模集落跡の調査もあり、曾利式土器の資料が今まで以上に充実したものになりつつある。

曾利式期の集落は、前期から後期までといった長期間継続する大規模な集落と、それ以外の中・小規模な集落に分けられる。どちらの集落も住居跡が多く、多いところでは数十軒も発見されるが、曾利式期の住居跡どうしの重複は意外ほど少ない。あつたとしても、曾利前半と後半の離れた時期の重複が多く、近接した時期の重複は少ない。編年を作成するにあたり、塙甕や床直、覆土中出土など、住居跡のどこから出土したのかによる、時間差の確認が必要となってくる。

以下、台上の主要遺跡の概要を述べていく。

酒呑場遺跡（長坂町）

大規模集落跡の筆頭として挙げられる遺跡である。現在、山梨県格農試験場などが建っている。宮川と大深沢川とに挟まれた舌状台地上に立地している。標高は690~710mである。

1995~1997・2001年に山梨県埋蔵文化財センターにより調査され、前期前半から後期初頭までの集落跡が発見された。南北に2つの環状集落が認められ、曾利式期の集落は南側のそれに隣接している。住居跡以外に配石遺構数基やそれに伴う壇臺、単軸壇臺が発見されている。調査範囲は遺跡範囲の東側約5分の1程度しかないが、

県内でも最大級の遺跡であることに間違いはないであろう。

曾利I~V式まで継続して出土しており、また、曾利式直前の井戸尻式や加曾利E式等も出土しているので、曾利式だけでなくその前後型式や他地域型式との関係の把握が期待できる。

甲ヶ原遺跡（大泉村）

酒呑場遺跡と並ぶもう1つの大規模集落跡である。油川と甲川に挟まれた南に緩く傾斜する尾根上の、標高800m前後に立地する。1989~1997年の間、合計7次にわたる調査が山梨県埋蔵文化財センターによりおこなわれ、また、その周辺の小規模開発に伴う発掘調査が大泉村教育委員会によりおこなわれている。

遺跡の継続期間は、前期初頭・前期後半から中期後半までであり、南北に並ぶ3つの環状集落が展開すると想定されている。遺跡の範囲は南北約1km、東西約300mの大規模なものであるが、調査の大部分を占める道路建設地は、遺跡の中央を通るため、各集落に幅約12mのトレーニチを入れたようなものである。集落展開を見る上では決して十分とはいえない。

出土土器については、井戸尻式土器と共伴しているイノシシをモチーフとした大型把手をもつ土器（A-7号土坑出土）や、八ヶ岳では少ない大型反彌甕（1~4号埋甕）、刺突文地文のX状把手深鉢（第6地点2号住居跡出土）など、前期の資料が注目される。

海道前C遺跡（高根町）

南北に細長く延びる尾根上に立地する。標高は675mである。藤内式から曾利V式期の集落で、曾利式期はII~V式の住居跡が確認されている。曾利IV式期は6軒と、調査された範囲の中では時期別の住居数が最も多く、最盛期と見ることができる。国道バイパス建設地のため、集落の西側に幅約15mのトレーニチを入れたようなものである。

注目される土器は、曾利IV式期の12号住居跡から出土した4基の埋甕であり、4基の埋甕の埋設された時間差があると考えられるので、曾利IV式の細分の可能性もあるであろう。また、12号土坑からは曾利V式土器2個体と加曾利E式土器が共伴しているので、両者の時期の対比に有効であろう。曾利IV式期の住居跡が多いこともあり、曾利後半の資料がまとまっている。

社口遺跡（高根町）

南北に細長く延びる尾根状台地に立地する。構造は、台地の斜面から谷部にかけて分布し、標高は725~737m

である。遺構はないが草創期から早期の土器がまとまって出土している。

住居跡としては中期前葉から後期前葉まであり、曾利式期はI式期だけ6軒、II~IV式期で6軒発見されている。調査区の中で、時期によって選地が異なっており、南側の台地に曾利I式期の住居跡が、北側の台地に曾利II~IV式期の住居跡が分布している。それぞれの集落は約250m離れている。調査は3次までおこなわれ、総調査面積は約5400m²である。この調査も、南北に標高の異なる集落の西側を、幅約10mのトレンチを入れたようなものである。特殊遺構では集石炉が出土している。

出土土器に関しては、31号住居跡で曾利I式がまとまって出土しており、報告書の中で、型式学的に見て2段階の時期に分けられる可能性を示している（鶴原1997）。わずかに口縁部が開いた円筒形のものを井戸尻末・曾利I式直前段階としている。

また、9号住居跡出土の曾利III~IV式を、型式学的に3段階に細分している。

頭無遺跡（長坂町）

南北に細長く延びた尾根状台地上の、標高657mに立地する。直径約60mの集落の東側を調査したことになる。曾利I~V式期までの住居跡が継続して営まれており、住居数は曾利III~IV式期が多い。配石遺構が調査区北側にあり、垂飾も発見されている。

曾利式期の住居跡の重複は少ないが、2号住居跡と3号住居跡が曾利V式期での重複関係をもち、前後関係が確認できる事例である。また、10号住居跡と12号住居跡も、記述の中では重複部分が少なかったこともあり新旧関係については触れられていないが、曾利II式期での重複関係がある。

この調査で、曾利式期の住居跡15軒中9軒に埋甕が発見され、その内7号住居跡と10号住居跡の2軒に2基確認された。それは各住居跡が拡張されたことに伴い、埋甕が複数埋設されたのであり、そこに時間差が確認できる。特に10号住居跡は、幡文地文のX状把手深鉢と口縁部に重弧文を施した紐線文土器が埋甕であり、報告書では断定していないが、住居跡平面図の位置関係からX状把手深鉢→紐線文土器の順が妥当であろう（第11図）。

このように時間差を確認できる事例が比較的多く、今でも曾利式土器編年には欠くことのできない遺跡である。

柳坪A・柳坪B・柳坪北遺跡（長坂町）

南北に緩やかに傾斜する台地上に立地する。1973年に中央道木本線建設に先立ち柳坪遺跡として調査されたが、調査区中央に浅い谷が形成されており、東西に集落が分かれているため、西側をA地区、東側をB地区と称した。

1984年の長坂インターチェンジ建設に先立つ調査でも、その谷によって集落が分かれている様子が明確になったので、現在では、それぞれを柳坪A遺跡、柳坪B遺跡とし、遺跡名を分けている。

柳坪北遺跡は柳坪A遺跡のすぐ南に隣接し、同一の遺跡と考えられる。2001年にガスパイプライン埋設工事に先立つ調査がおこなわれた。その結果、A・B遺跡合わせて東側集落では、曾利I~V式期の住居跡が12軒確認され、その内訳はI式期2軒、II式期4軒、III式期4軒、IV式期1軒、V式期1軒である。

東側のB遺跡ではII式期1軒、III式期3軒、IV式期8軒、V式期4軒が発見されている。どちらの集落も南北に広がっていくと思われ、その一部を調査したに過ぎない。

両遺跡とも、住居数の多さの割に近接した時期の重複は少ない。A遺跡では五領ヶ台式から曾利V式期までの住居跡があり、断続的ではあるが、中期全般にわたり集落が営まれている。その内曾利II~III式期の住居が多い。一方、B遺跡では中期前半の住居跡ではなく、曾利式期になり集落が展開してくる。その最盛期は曾利IV式期である。曾利式期になり、西側のA遺跡から東側のB遺跡に集落が広がっていたとも考えられる。

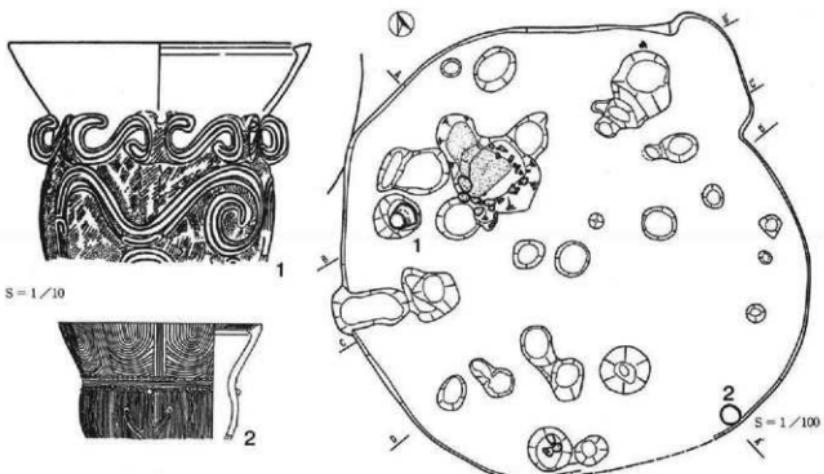
長坂インターチェンジ建設の際の調査報告では、曾利II式の結節繩文地文と刺突文地文に時期差があるとしている。また、曾利IV式とV式の關係で、蛇行沈縫文の消滅を曾利V式とし、その前段階に、口縁部横帯区画文様帶の消滅、全て沈縫施文、蛇行沈縫が残存している段階を設定した。そして、それらを基に曾利式土器を9細分する編年案を提示している。この9細分案は、その後の編年研究へ多大な影響を及ぼしている（米田1986）。

姥神遺跡（大泉村）

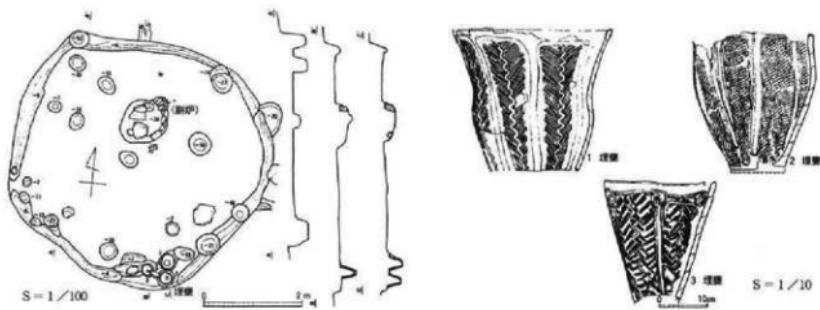
標高885~892m付近の尾根上に立地している。そこは東川右岸の南向き傾斜地である。中期後半から後期中葉まで存続し、曾利式期の住居跡は12軒あり、その内訳はII式期4軒・III式期2軒・IV式期4軒・V式期2軒である。近隣の住宅地から曾利I式の深鉢が3点出土しており、柳原氏はこの土器を中心に、八ヶ岳南麓と甲府盆地の曾利式土器の地域差を論じている（鶴原1993）。

遺跡の中央の一部を調査したと考えられ、集落の様相は十分把握できていない。なお、丸石・土偶等が出土している。

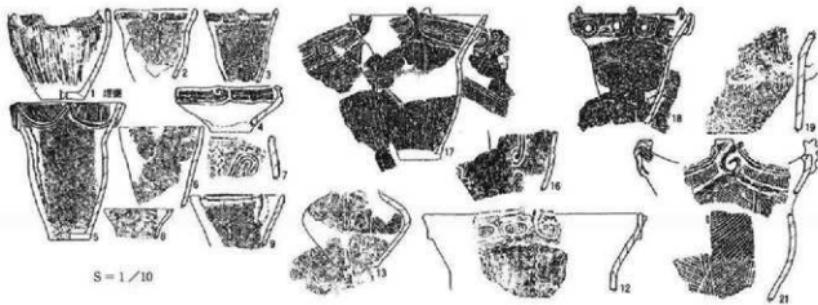
21号住居跡から曾利III式の特徴である肥厚帯口縁の崩壊と見られるような土器が出土し、II~III式の変遷を考える上では欠かせない資料であろう（第13図）。また、12号住居跡から曾利IV式の埋甕が3基出土し、時間差を確



第11図 頭無遺跡10号住居址および出土埋甕



第12図 姉神遺跡12号住居址および出土埋甕



第13図 姉神遺跡21号住居址出土土器

話できる事例となっている（第12図）。

曾利式期の住居跡の重複関係は多く、以下の7例確認できた。（矢印は古い方から新しい方へ向いている。）

4号住居跡（III式）→11号住居跡（IV式）

14号住居跡（II式）→12号住居跡（IV式）

14号住居跡（II式）→13号住居跡（V式）

17号住居跡（II式）→16号住居跡（II式）

17号住居跡（II式）→18号住居跡（IV式）

17号住居跡（II式）→21号住居跡（II式）

21号住居跡（II式）→20号住居跡（V式）

同一時期や続続する時期の重複は7例中3例ではあるが、それ以外も式の前後関係を確定する上で貴重な事例である。II式同士の重複が2例あり、II式を細分する際の参考資料となり得るであろう。

次郎構造跡（高根町）

扇状地上に立地し、標高は620mである。周辺では丘陵状の微高地が連続するが、遺跡は微高地間の鞍部に立地する。曾利後半の住居跡が13軒発見され、III式期1軒・IV式期5軒・IV～V式期1軒・V式期6軒である。それ以外に4基の埋甕も発見されている。集落の半分は調査されていると思われる。

土坑も数多く発見され、曾利式だけでなく加曾利E式も出土している。また、土坑からヒスイの大珠1点が出土している。

曾利IV～V式の出土が主体を占め、報告書の中で佐野氏が、駿遊堂遺跡の編年案を基に3時期に細分している。

天神遺跡（大泉村）

標高800～850mの尾根上に立地する。A・B・Cの3地区が調査され、C地区からは前期後半の集落が発見され有名である。曾利式期の集落はA地区にあり、II～III式期の住居跡が5軒発見された。

2号住居跡から壺形土器・肥厚帶口縁土器・繩文地文の区画文土器がそれぞれ完形で出土し、その共伴関係が注目される。また、7号住居跡の埋甕は、米田氏が結節繩文地文と刺突文地文の時期差を説明する際の資料であり、重要な事例となる。

大和田遺跡（大泉村）

北東から南西方向に展開する幅40～50mのやせ尾根の先端部に立地している。住居跡は曾利IV～V式が7軒発見されているが、上器は前期末から中期末まで出土している。住居跡の分布の南東側に曾利IV～V式の廐乗場が確認され、これは集落の営まれていた時期と一致し、接合関係は確認できなかったが、集落域を考える上で重要な事例となっている。集落の東西約3分の2を調査したと考えられる。

次郎構造跡と同様、曾利IV～V式が主体であり、該期の集落様相を示しているとともに、4号住居跡と7号住居跡が曾利IV式期での重複関係をもち、IV式の細分を検討する上で貴重な事例である。

方城第1道跡（大泉村）

標高80～90mのやせ尾根の先端部に立地している。標高は905～910mである。この集落は尾根の西側斜面にあり、周辺の地形から、西側の谷部と東側の尾根部によって区画された単一の集落と考えられる。曾利III～V式期にかけて住居跡が8軒発見されたが、住居跡に重複関係はない。配石遺構や集石遺構を伴っており、配石遺構からはヒスイの玉が出土している。集落全体の8割近くを調査していると思われ、該期の小規模集落の様相を示しているであろう。

中原道跡（小瀬沢町）

小河川の開削で舌状台地となった標高920～930mの南北向き緩傾斜地に立地している。中期後半から後期前半まであり、曾利式期はII・IV・V式期の住居跡がある。その内約半分がV式期に集中している。住居跡の分布は、調査区の東西に分かれているため、別々の集落の可能性がある。

（村松佳幸・長谷川誠）

塙川流域

塙川流域は概ね現在の行政区分の須玉町・明野村が対象域となる。八ヶ岳に源を発する須玉川と金峰山・瑞牆山・小川山に発する塙川とが須玉町大豆生田の南で合流し下流する。両河川によって形成された段丘平坦面を中心にして遺跡が確認されている。須玉川流域では大規模な調査事例はないが、津金御所前遺跡（須玉町）3号住居跡出土の水桶把手付土器や、川又南遺跡（同町）出土の曾利V式の屋外埋設土器などが確認されている。一方塙川流域では、近年園場整備やゴルフ場・ダム建設に伴って大規模な発掘調査が実施され、平坦面だけでなく山間部に展開した集落の様相も明らかになりつつある。

塙川遺跡（須玉町）

塙川は最上流域において本谷川と釜瀬川に分かれるが、本遺跡はその両河川に挟まれた舌状の段丘先端部に存在する。標高約840mの山間部に立地し、早期から晩期の土器が比較的豊富に出土している。曾利IV式期の住居跡が6軒検出されており、希少な平坦面に重複することなく点在していることから、一時的に集落が営まれたものと考えられる。また、近隣の綿藏地遺跡（須玉町）1号住居跡において中期終末期の好資料が出土している。

上ノ原遺跡（須玉町）

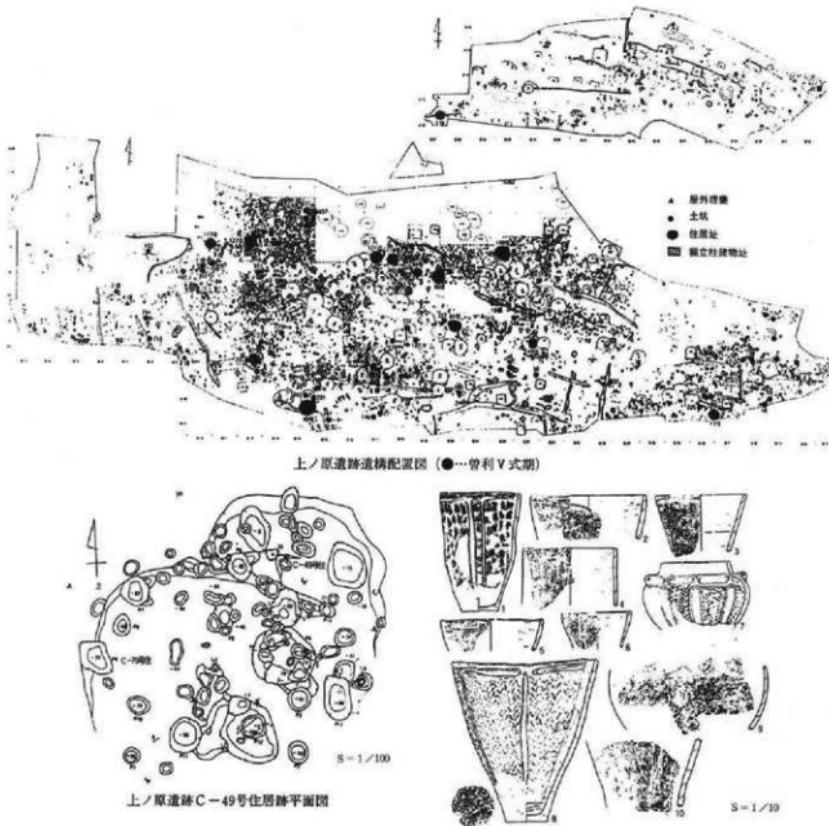
標高770～850m付近の西向きに傾斜した尾根筋上および南斜面に立地する。中期末から後期前半の住居跡が100

軒以上確認されている。住居跡の多くは塁之内式期のものであり、該期の集落の規模としては全國的にも最大級である。遺跡の南側には茅ヶ岳山麓で数少ない水流である漫沢が流れる。調査区域から北東数百mの位置に湧水地点があることから、遺跡範囲は沢沿いにさらに奥へと続く可能性がある。住居跡は曾利IV式期では南斜面の縁辺部に3軒が点在し、曾利V式期では、尾根中央部に直径約80mの円を呈するように15軒が散在している(第14図)。中期末から称名寺式期の土坑数は住居数に対して非常に多く、特に曾利V式期には住居数の約10倍にも及んでいる。土坑内から曾利式終末段階の良好な資料がいくつか出土しており、加曾利E式との編年対比や後期への

連続性を考える上で好資料となることだろう。

▲ 蔵訪原遺跡(明野村)

塙川左岸の崖線部上に立地し、標高は約550mを測る。中期中葉から後葉にかけての住居跡が40軒以上検出されている。遺跡範囲は約2万m²以上に及び、100軒を超える住居跡が存在すると考えられ、発掘調査および表探された土器の分布状況から、環状集落と想定される。24号住居跡において曾利V式がまとまって出土している。佐野氏はこれらの土器群を山形氏の編年案を基に、出土状況と口縁部文様の消長により、曾利新3式古・中・新段階に3細分している(佐野1997)。



第14図 上ノ原遺跡全体図とC-49号住居跡

崖敷添遺跡（明野村）

塙川左岸の崖縁部上に立地し、標高は約505mを測る。早期末から後期中葉までの遺構・遺物が検出されており、曾利終末期の遺構として25号住居跡・34号住居跡・50号土坑などがある。（坂口広太）

（3）釜無川流域

釜無川流域は概ね現行の垂崎市の一帯・双葉町・白州町・武川村が対象域となる。塙川左岸の双葉町は地理的区分では塙川流域とすべきであるが、便宜的にここで扱うこととする。また、七里岩台地の幅狭となる地域も同様に扱うこととする。これは、これまでの研究の中で、双葉町出土の土器群が甲府盆地内出土のものと近似していることが明らかなことを考慮したためである。

本地域での曾利式期の遺跡発掘調査例は古くは坂井遺跡（（垂崎市））や飯米場遺跡（（同市））にはじまり、近年では緊急発掘調査によりその数は増加している。

青松遺跡（双葉町）

塙川と釜無川の合流地点に近い標高380m前後の台地上に広がる遺跡である。五領ヶ台式期・井戸尻式から曾利II式期および曾利V式期の堅穴住居跡や土坑が確認されている。曾利式期の堅穴住居跡数は少ないものの、大木8b式が出土するなど他地域との併行関係を知る上で重要な遺跡といえる。

調査地点北側に集落跡が展開されることも予想されるが、比較的小規模な集落跡であった可能性が高い。

後田遺跡（垂崎市）

配石遺構と屋外埋設土器が混在する遺構を伴う集落跡であり、北後田遺跡も同一集落跡に含まれる。塙川右岸の微高地に立地し、遺跡範囲は不明であるが、環状集落跡の東部の一部が調査されたものといえよう。十三背提式、曾利II・IV・V式の遺構・遺物が出土し、特に曾利IV～V式期の堅穴住居跡が中心である。屋外埋設土器は曾利IV～V式のX状把手深鉢であり、型式的な時間差は認められるものの同一集団により埋設された可能性が高い点で、土器個々の変遷を考えていく上で重要な資料といえる。（第15図）。

宿尻遺跡（垂崎市）

七里岩台地の幅が狭くなり始める垂崎市穴山町に所在し、兜山と能見城山に挟まれた標高530m前後の台地上に立地する。台地中央部と沢へ向かう斜面地の調査が実施されている。台地中央部では中期から後期の堅穴住居跡6軒と土坑37基が確認され、6号住居跡内からは曾利II～III式の良好な資料が出土している。斜面部では後期の堅穴住居跡1軒と曾利式期を中心とした廐場場と考えられる包含層を確認している。曾利式後半期の土偶が3点

出土しており、土偶と他の遺物の廐場行為の比較に重要な資料といえる。

坂井遺跡（垂崎市）

宿尻遺跡と共に七里岩台地上の標高480m前後に位置する。西から東に向かう沢を挟むように台地が広がり、その全体にわたり遺跡は占地する。

次に釜無川右岸地域の遺跡について述べていく。

石之坪遺跡（垂崎市）

約2万5000m²の舌状台地に広がると推定される遺跡で、その約80%が調査されている。表裏縄文から晩期浮縫文期まで、途中に生活痕跡のない時期も含まれるが、縄文時代を通して土地利用がなされたといえる。近隣では坂井遺跡や向原遺跡（武川村）などが知られ、集落跡の規模としてはほぼ同じと考えられる。曾利式期の堅穴住居跡および土坑は100基以上である。

他の遺跡では堅穴住居跡の重複が極であるのに対し、当遺跡では重複が多い傾向がある。ただし、著しきることにより、同一遺構覆し内での出土土器の比較可能な事例が少ない。土坑内出土例では良好な縦年資料となりうるものもある。特に曾利V式と加曾利E4式の共伴する土坑や曾利IV式期の堅穴住居跡で層位学的に検討可能なものなどがある（第16図）。

向原遺跡（武川村）

黒沢川と小武川に挟まれたやや東西に細長い標高550m前後の台地上に位置する。これまでに4回にわたり調査が実施され、中期中葉から後葉を中心に住居跡が35軒ほど確認されている。曾利I式期とIII式期の住居跡が数軒検出されており、担当者によると井戸尻式～曾利I式にかけて唐草文系統の土器群がやや多く見られ、下流域にあたる垂崎市内の遺跡とは違いを見せていく。

真原A遺跡（武川村）

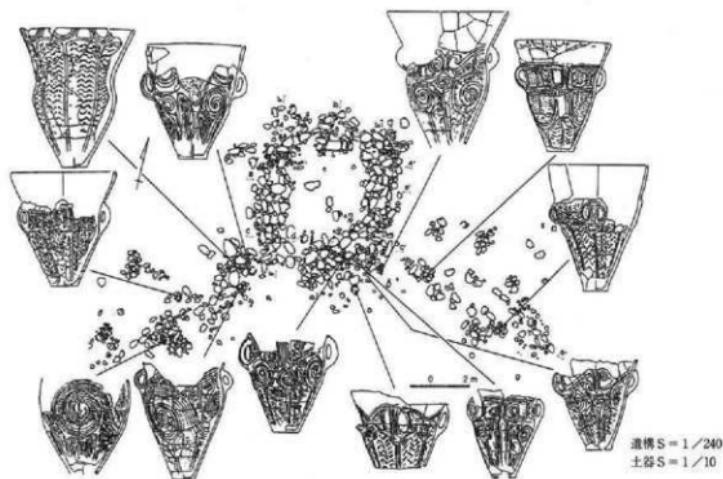
石空川、黒沢川に挟まれた北向きの傾斜をなす標高約710mの台地上に立地する。5回の発掘調査が実施され、曾利II～III式期の住居跡が7軒、II～IV式期の土坑が100基以上確認されている。1999年の調査では、5号土坑から11個体の曾利IV式土器が出土した特異な例が確認されている（竹田2001）。

上小用遺跡（教水石民部館跡）（白州町）

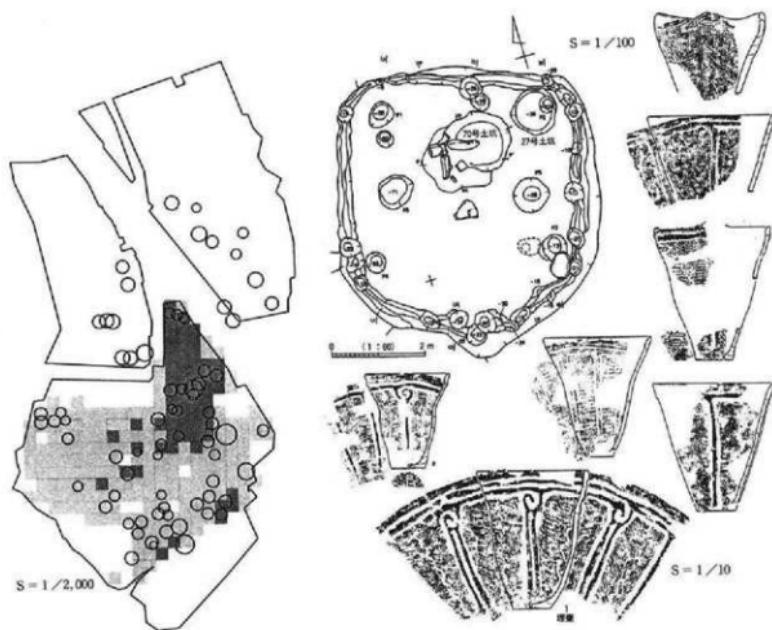
雨乞山から釜無川に至るまでの標高710m前後の河岸段丘上面に占地する。遺跡範囲確認調査のみであるが、曾利I式の良好な資料が出土している。

根古屋遺跡（白州町）

尾白川の右岸、標高580m前後の河岸段丘上に立地する。曾利III式期を中心とした堅穴住居跡が重複して確認されている。曾利III式期に確実に時間的幅の存在するこ



第15図 後田遺跡 2号配石造構および出土埋甕



第16図 石之坪遺跡曾利後半住居跡位置図および東地区32号住居と出土土器

とを裏付ける遺跡である。

台地上の縁辺部の一部を対象とした調査であり、さらに西側に集落跡が展開するものと考えられる。

(間間俊明)

(以下、次号)

〈引用・参考文献〉

なお、報告書のうち第2章第2節内の「遺跡地名表一覧」と重複するものに関して基本的に割愛した。

伊藤公明 1998 「X字状把手大型深鉢形土器の展開—八ヶ岳西南麓を中心として—」『八ヶ岳考古』平成9年度年報 北巨摩市町村文化財担当者会

2001 「縄文時代中期後半の地域性」『山梨県考古会誌』12 山梨県考古学協会

今恒利恵 1999 a 「中部高地 中期（曾利式）」『縄文時代』10 縄文文化研究会

1999 b 「縄文時代の編年（中期後半）」『山梨県史』

原始・古代2 山梨県

間間俊明 2001 「山梨県縄文時代中期土器研究略史」『山梨県考古学会誌』12 山梨県考古学協会

河西 学 2001 「山梨県のグリーンタフ地域における縄文中期曾利式土器の産地」『山梨県史研究』9 山梨県史編纂室

梅原功一 1993 「曾利I式土器の再検討—山梨県大泉村姥神遺跡の資料をもとに—」『縄文時代』4 縄文時代文化研究会

1997 「社口遺跡第3次調査報告書」高根町教育委員会・社口遺跡発掘調査会

1999 「曾利式土器の編年私案」『山梨県考古学論集』IV 山梨県考古学協会

2002 「曾利式土器の一様相—結節縄文をもつ土器を中心に—」『山梨県考古学会誌』13 山梨県考古学協会

佐野 隆 1997 「曾利式土器終末期の編年について」『八ヶ岳考古』平成8年度年報 北巨摩市町村文化財担当者会

木木 健 1981 「曾利式土器」『縄文文化の研究』4 蔦山閣出版

1988 「曾利式土器様式」『縄文土器大観』3 中期 II 小学館

縄文中期集落研究グループ 1995 「縄文中期集落研究の新地平」

竹田真入 2001 「山梨県北巨摩郡武川村真原A遺跡5号土坑について—事例紹介と性格の検討—」『八ヶ岳考古』平成12年度年報 北巨摩市町村文化財担当者会

平山惠一 2000 「山梨県における縄文時代中期終末の土器様相—曾利式土器編年と加曾利E式土器編年の対比から—」『八ヶ岳考古』平成11年度年報 北巨摩市町村文化財担当者会

米田明訓 1978 「曾利式土器編年の基礎的把握」『長野県考古

学会誌』30 長野県考古学会

1986 「柳坪遺跡」山梨県教育委員会

山形眞理子 1989 「曾利式土器における施文順序の意義」「甲斐の成立と地方的展開」角川書店

1996・1997 「曾利式土器の研究—内的展開と外的交渉の歴史—上・下」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』14・15 東京大学文学部考古学研究室

山本孝司 1992 「加曾利E3・4式と曾利V式について」『古代』94 早稲田大学

北巨摩地域における曾利式土器の大きさ

——土器研究における小地域の設定に関する基礎的作業——

長谷川 誠

1. はじめに

北巨摩文化財担当者会では、北口摩地域の曾利式土器の研究を進めてきた。今年度の報告では、その編年案までは提示できなかったものの、米年度の報告においては北巨摩地域の曾利式土器の編年案を提示することになっている。詳しくは今年度の報告に記されているので省くこととするが、この報告では北巨摩地域を、その地形的特徴から台地上、塩川流域、笠無川流域の3地域に作業仮定として便宜的に区分し曾利式土器の特徴を探っている。

近年の縄文土器の編年研究においては、これまでの「究極的な細分」という從来の方向性とともに、より小地域における地域的特徴の抽出という新たな方向性が提示されている。小林謙一は、近年の編年研究の大きな特徴は地域の細分化であると語っており(小林2001)、私たち北巨摩文化財担当者会の研究もこの流れの中で捉えられることはまちがいない。

ここで考えなくてはならないのは、編年研究におけるこの2つの流れは相反するものであるということである。そもそも土器は大きさや、文様などからみればどれ一つとして同じ物はない。しかし、時間軸として土器を利用し、またその背景に共通の観念を共有するグループを想定しながら、個別的な土器群から最大公約数的に共通点を抽出し一般化していくことが編年研究の過程である。

一方一般化された土器をもう一度地域という観点から個別化していくうする流れが小地域の抽出する上での過程である。一般化と個別化という相反する研究の方向性が共存しているのが現在の土器研究であり、このまま両者の流れが進んでいくならばどこかで矛盾を矛盾として抱き込めなくなる可能性は高く、両者を結び付ける研究の視点が必要となってくるのであろうが、今回は北巨摩地域における曾利式土器について、その大きさを統計的に計上することにより、地域的な特徴が抽出されるのかどうかを検討し、北巨摩文化財担当者会における曾利式土器研究のバックアップをするものである。

2. 研究小史

小林達雄は、「土器の機能・用途は上器のかたちに関係するとともに、その大きさとも密接に関わる」と土器の大きさについての研究の重要性を説いた(小林1988)。土器の大きさ、容量に関する研究は、古くは栗粒を実際に土器に入れ土器の容量を計測した藤村の研究(藤村1981)

などを端緒として、以後遺跡単位における分析(藤村1981林1981など)、ある特定地域内での分析(佐原1976など)が行われてきた。

縄文土器の大きさに関する研究では、南関東西部の加曾利E式深鉢形土器を対象とし、土器容量を時間軸に当てはめようとした村石の論考(村石1985)がある。村石は加曾利E式各期の容量を計測し、第IV期に容量が格段に大きくなることを指摘した。黒岩は同じく加曾利E式土器の容量を計測し、容量の大きさで7つのグループが存在することに注目し小さい順にA～F類に分類し、さらにはA類からE類までは、ほぼ2倍前後の増加率を示すことから、土器の容量がある用途や機能の違いによって作り分けられていた可能性を示した(黒岩1987)。

曾利式土器については、これまで甲府盆地や北巨摩地域、八ヶ岳西麓では土器の大きさに違いがあると指摘されてきたが、具体的に統計的なデータとして提示されたことはなかった。黒岩が指摘しているように土器の大きさから土器の機能・用途にまで迫れる可能性もあることから、重要な研究領域であることはまちがいない。小稿ではこれまで統計的なデータがなかった曾利式土器について、統計的なデータを提示するとともに、土器の大きさから小地域の設定・抽出を試みる。

3. 分析方法

対象とする資料は、北巨摩郡内から出土している34遺跡589個体の曾利式土器である。同じく中期後半の加曾利E式土器については、曾利式土器と共に伴することも多い。特に曾利式土器の終末と加曾利E式土器の終末とは時間的に離れていることが分かってきており、山梨県内の中期終末においては加曾利E式だけになる時期があると指摘がなされている(山形1996・1997 佐野1997 平山2000)。両型式の関係については極めて重要な問題であるが、今回は曾利式土器の大きさについて分析を進めていくことに重点をおいているため、加曾利E式については取り上げないことにとする。型式については、藤原の編年案(藤原1999)に基づくものとするが、細別についてはまだ流動的な部分を残しているため、研究者内で基本的な合意に達していると考えられる曾利I～V式までの5段階の区分を用いた。

地域分けについては、台地上、笠無川流域、塩川流域の3地域に便宜的に分ける。それぞれ、台地上については概

ね小瀬沢町、長坂町、高根町、大泉村の4町村、釜無川流域については概ね鹿崎市、白州町、双葉町、武川村の4町村、塙川流域については概ね須玉町、明野村の2町村を指すこととする。地域分けの根拠については北巨摩文化財担当者会の報告に譲ることとする。

計測は、土器の口径、底径、器高の3つの部位について行う。口径、器高については5cmごとに、底径については1cmごとに区切り、それぞれ時期ごとに地域ごとに棒グラフを作成した。グラフ内の10~15cmとは10cm以上15cm未満ということである。さらに、口径と底径、口径と器高、底径と器高との関係をみるために、それぞれ散布図を作成した。散布図についても、時期と地域を基準にしそれぞれグラフを作成した。

4. 分析

今回取り上げた資料は、北巨摩郡内から出土した曾利式土器589個体である。時期ごとの数をみてみると、曾利I式が64個体、曾利II式が47個体、曾利III式が117個体、曾利IV式が194個体、曾利V式が153個体である。

地域ごとの資料数については、釜無川流域108個体、塙川流域79個体、台上411個体であり、台上が突出して資料数が多いのが分かる。台上については他の地域と比べ、古くから高速道路や圃場整備などに伴う開発が多く調査数が多いのに対し、釜無川流域、塙川流域では大型開発が台上に比べ少なかった。近年圃場整備などに伴う調査がここ数年増加し曾利式土器の資料数も増えているが、現在整理中のものもあり、ここでは取り上げられなかつた資料もあるため、実際にはこの2地域については資料数は増加する。しかし台上の資料数が多い傾向については大きく変わることはないとであろう。

次に地域ごとに時期ごとの資料数をみてみたい(第1図)。全ての地域でI、II式期が少なく、IV、V式期に資料数が増加する傾向は見受けられる。しかし塙川流域においては特に曾利IV、V式期が突出する傾向があり、釜無川流域、台上では曾利IV式期にピークがあるのに対し、塙川流域では曾利V式期にピークがくるなど地域間で若干の違いがあるようである。

器高の大きさについては、全体では25~30cmのところにピークが存在している。時期別にみていくと(第3図)曾利I、IIについては20~30cmに90%は集中する傾向にあるが、基本的にどの時期も25~30cmにピークを持ち、30cm以降は緩やかに減少するという同じ傾向を持つようである。しかし地域別にみると、それぞれ若干の違いが見てとれる。台上では25~30cmのところにピークを持ち、そこから急激に資料数は減少する。しかし釜無川流域で

は25~30cmに最大のピークを持つものの、台上では1点しかない35~40cmのところで、釜無川流域ではもう一つのピークを持つ。釜無川流域については器高の大きさの幅が広いということが指摘できる(第2図)。

統いて口径の大きさであるが、全体としては20~25cmにピークを持つ。しかし、曾利III、IV式期については15~20cmにピークを持つことから、口径については曾利III~IV式期で一度小さくなり、V式期に再び大きくなっていく傾向が見てとれる(第4図)。地域別にみてみると(第5図)、15~30cmに集中することはどの地域についてもいえる。しかし、第6図を見ると台上地域では30cm以降資料数は激減し、30~35cmでは台上全体の7%を占めるだけであるのに対し、釜無川流域では同じく30~35cmのところで16%を占め、塙川流域では35~40cmのところで18%を占めるなど台上地域に比べ、釜無川、塙川の両地域の方が口径については大きいものが多いことが分かる。

底径については全体としては7cmをピークに、6~9cmの間に80%を占める。時期別に大きな差があるわけではないようである。

ここまで器高、口径、底径それぞれの大きさをみてきた。しかし、土器のプロポーションは器高、口径、底径それぞれの大きさの関係に規定されてくるものと考えられる。そこで次に器高と口径、器高と底径、口径と底径の大きさの関係についてみていく。

はじめに口径と底径の関係であるが、時期ごとにみてみると(第12図)曾利II~V式期については底径:口径の比率が1:2から1:4の間にまんべんなく分布しているのが分かる。これまでも指摘されていていることがあるが曾利I式期においては1:2の直線沿いに集中しているのが分かる。これまでも指摘されていていることがあるが曾利I式期においては他の時期と比べ底径と口径の大きさが近いことがこのデータからも証明される。地域ごとではそれほど差はない。

統いて口径と器高の関係であるが(第10図)曾利III~V式期については、口径:器高が1:1から1:2の間に分布するが、曾利I、II式期については1:1の直線上に近いところに固まって分布している。このことから曾利I、II式期では口径と器高がほぼ同じ大きさであったものが曾利III~V式期では口径に対し器高が大きくなっていることが分かる。地域ごとにみてみると(第11図)、台上については口径:器高が1:2の直線に沿うように分布しているが、台上と比べると塙川流域、釜無川流域については口径に対し器高が大きいという地域的な特色がみられる。

底径と器高の関係については、底径：器高が1：2から1：6の間に広く分布する(第12図)。地域ごとにみてみると(第13図)、その比率は1：2から1：5の間に分布するが特に釜無川流域については1：5に近い方に分布していることが分かる。

5.まとめ

これまでも、甲府盆地の曾利式土器は大きく、長野県富士見町などの八ヶ岳西麓の曾利式土器は小さいという指摘はされてきた。今回の集成、分析でこの中間地帯である北巨摩地域のなかにおいても、幾つかの点から土器の大きさの違いが出てくることが指摘できた。ある程度の資料数が確保できた台上地城と釜無川流域地城とを比較すると、以下のこと事が分かった。

- ・器高の大きさを比較すると、台上においては25~30cmのところにピークを持ち、そこから急激に資料数は減少する。しかし釜無川流域では25~30cmに最大のピークを持つものの、台上では1点しかない35~40cmのところで、釜無川流域ではもう一つのピークを持つ。
- ・口徑の大きさを比較すると台上地城では30cm以降資料数は激減し、30~35cmでは台上全体の7%を占めるだけであるのに対し、釜無川流域では同じく30~35cmのところで16%を占め、塙川流域では35~40cmのところで18%を占めるなど台上地城に比べ、釜無川流域、塙川流域の両地域の方が口徑については大きいものが多いことが分かる。
- ・口徑と器高の比率を比較すると、台上については口徑：器高の比率が1：2の直線上に沿うように分布しているが、台上と比べると塙川流域、釜無川流域については口徑に対し器高が大きいという地域的な特色がみられる。

これらの点から、台上の曾利式土器に比べ、釜無川流域の土器の方がサイズが大きいものが多いということができるのではないかだろうか。

今回分析らしい分析はすることがほとんどできず、データの提示に終始してしまった感は否めないが、少なくとも土器の大きさから小地城が抽出できる可能性は台上地城と釜無川流域地城の比較において指摘できたと思う。塙川流域地城については、他の2地域よりも資料数が非常に少なく、資料も曾利式後半に圧倒的に偏るなど、他の2地域との差異は明瞭である。このことから北巨摩地域を台上、釜無川流域、塙川流域の3地域に分類することには蓋然性が高いものと思われる。今後この小地城のあり方に目を配りながら、北巨摩地域の縄文時代中期後半を研究していきたい。

最後に今後の課題を列記させていただきたい。

- ・今回は、器高、口径の大きさ、口径と器高の比率の3点から地域性を看取ることができたが、この3つの視点が他の地域や他の時期についても、小地域の把握に有用であるかを検討していく必要がある。
- ・今回は資料数の限界もあり、地域と時期の検討を別々に行わなければならなかった。今後は資料数を確保してそれぞれの時期ごとに地域差が検出できるのかどうか確認していく必要がある。
- ・台上地城と釜無川流域でみられたサイズの違いが、これまで指摘してきた甲府盆地と八ヶ岳西麓のサイズの違いが反映されたものであるのかさまざまな視点から検討していかねばならない。
- ・曾利式土器にはいくつもの類型があることが知られている。この類型ごとに大きさに差があるのかどうかも検討していく必要がある。

末尾になるが、小稿をまとめるにあたり北巨摩文化財担当者会の諸氏には、日頃より大変お世話になった。特に佐野隆氏には、貴重な助言をいただいた。文末ながら記して感謝申し上げる次第である。

参考・引用文献

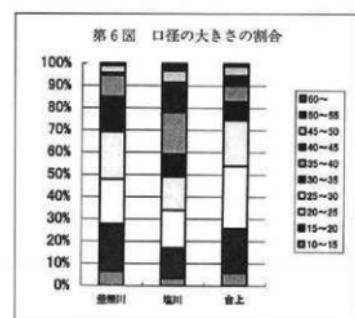
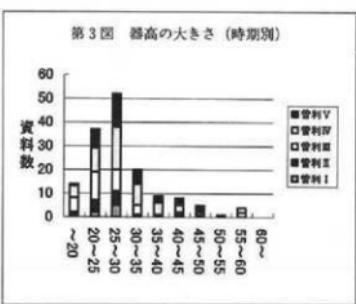
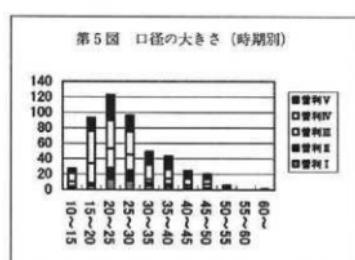
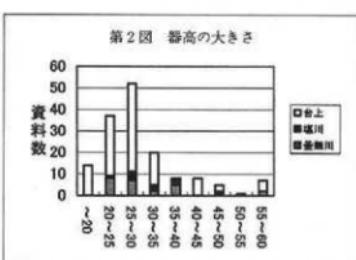
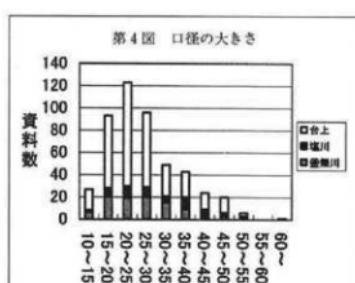
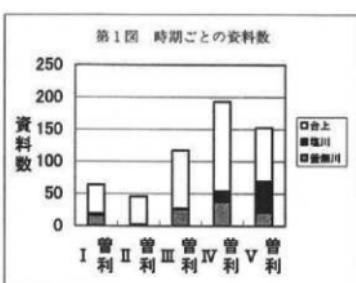
- 伊藤公明 1998「X字状把手付大型深鉢形土器の展開—八ヶ岳西南麓を中心として—」『八ヶ岳考古』平成9年度年報
北巨摩市町村文化財担当者会
- 河西 学 2001「山梨県のグリーンタフ地殻における縄文中期曾利式土器の産地」『山梨県史研究』9 山梨県史編纂室
- 梅原功一 1993「曾利I式土器の川嶋村—山梨県大泉村姥神遺跡の資料をもとに—」『縄文時代』4 縄文時代文化研究会
- 1999「曾利式土器の綱谷私案」『山梨考古学論集』IV
- 黒岩 隆 1987「縄文I式土器の大きさ—深鉢形土器の容量を中心として—」『東京考古』第5号
- 小林達雄 1988「縄文土器の器形と用途」『縄文土器大観3 中期2』 小学館
- 佐野 隆 1997「曾利式土器終末期の編年について」『八ヶ岳考古』平成8年度年報 北巨摩市町村文化財担当者会
- 佐原 寛 1976「弥生土器」日本の美術125
- 林 謙一 1981「器の容積について」『幾羅木郷遺跡発掘調査報告書第1集』
- 平山憲一 2000「山梨県における縄文時代中期終末の土器様相—曾利式土器編年と加曾利E式土器編年の対比から—」『八ヶ岳考古』平成11年度年報 北巨摩市町村文化財担当者会

藤村東男 1981「土器容量の測定—晩期純文式土器を例として」『考古学研究』28-3

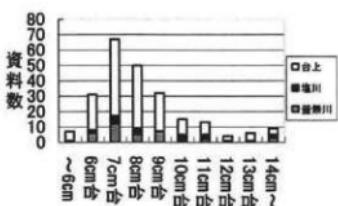
村石真澄 1985「深鉢のサイズからみた社会変動—縄文時代

加曾利E期の南関東西部について—」『法政史論』12

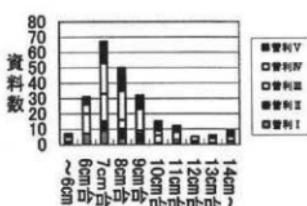
山形眞里子 1996・1997「曾利式土器の研究—内的展開と外的交渉の歴史—上・下」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』14・15 東京大学文学部考古学研究室



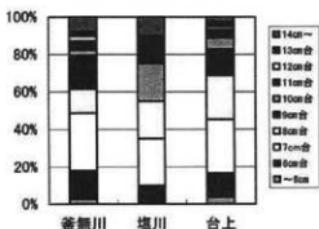
第7図 底径の大きさ



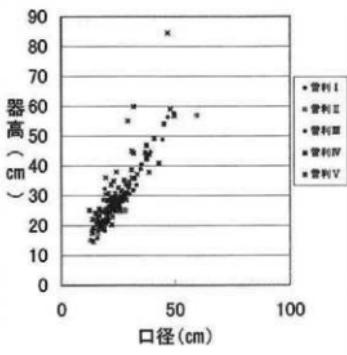
第8図 底径の大きさ



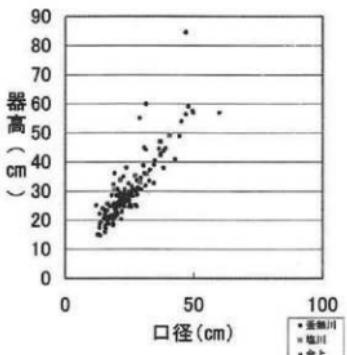
第9図 底径の大きさの割合



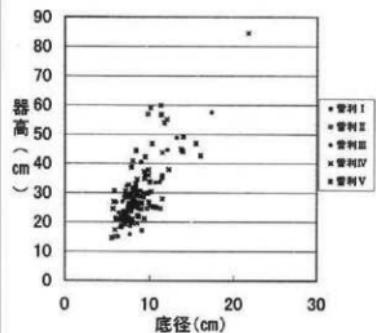
第10図 器高／口径 (時期別)



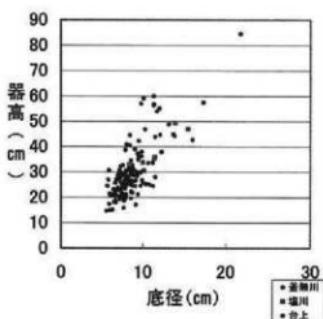
第11図 器高／口径 (地域別)



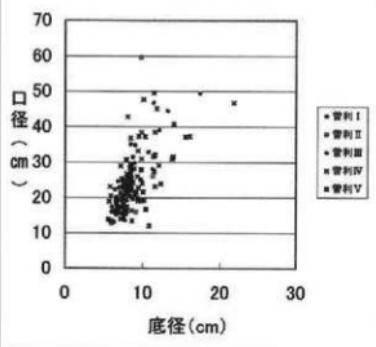
第12図 器高／底径



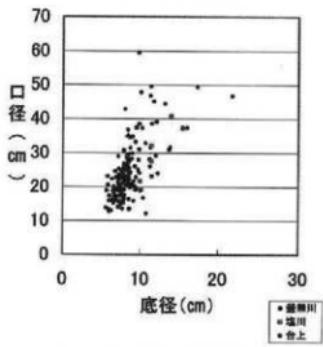
第13図 器高／底径



第14図 口径／底径



第15図 口径／底径



平安時代の堅穴住居内で鉄製品が出土することについて

大山祐喜

1はじめに

平安時代の集落の調査において、出土総数は多くないが一般的に見られる遺物に刀子や鉄鎌などの鉄製品がある。完形もしくはそれに近い鉄製品が出土すると、我々は感覚的に「捨てられたものではないだろう」と考えるが、具体的に「捨てられたものではない」ことを示す事例は少ないのである。金属は錆直すことにより再生できることを考えると堅穴住居内から出土するということ自体が、何らかの意図のもとにそこに残されたことを暗示しているともいえよう。

しかし、堅穴住居から出土する鉄製品とその出土状況から、当時の人々の具体的行為と意図を読み取ることは容易ではない。また、出土鉄製品の背後にどの程度明確な行為と意図があるのか保証の限りではない。そこで小稿では堅穴住居内の鉄製品の出土位置を集成し、その出土位置や状況に一定の傾向が認められるかを確認したい。そしてこの作業を基礎として平安時代の人々の具体的な行為を抽出する手がかりを模索してみたい。

2方法

堅穴住居から出土する鉄製品の出土位置や状況を確認するため平面分布図を作成する。作業対象の範囲は北巨摩郡内に限定し、報告書の刊行されている平安時代遺跡のうち、鉄製品の出土位置が明らかなるものを対象として分布図を作成した（第9図、第10図）。

北巨摩郡のうち八ヶ岳山麓、茅ヶ岳山麓などの丘陵部の遺跡は、9世紀中頃に出現し10世紀後半までに衰退・消滅するという共通した継続性を示し、遺跡内容をみてても比較的同質的な印象を受ける。平安時代には御牧が置かれるという共通点もあり、相互に比較し合う対象としては好適地である。それに対して蘿崎市宮ノ前遺跡などが立地する塩川田沼澤原の低地（藤井平）は、条里の痕跡が確認され、奈良時代から集落が営まれ、平安時代には村落内寺院が創建されるなど、丘陵部とは異なる様相を示す。そこでこの地域の資料は丘陵部の遺跡と対比させるため、9世紀中頃から10世紀末に限って抽出した。

分布状況を検討する鉄製品は、各遺跡において共通して出土し、かつ出土上例数が多い鉄鎌、刀子、鎌、紡錘具とする。この他の器種は出土例が1、2点と少なく出土位置を示しても偶然性を排除できないため扱わなかった。

堅穴住居は大型から小型まで規模が様々であるがおお

むね隅丸正方形である。そこで出土位置を相対化して堅穴住居のモデル図内に示した。また分布状況において器種による相違が認められるかどうかを確認するため器種別の分布図も作成した。

北巨摩郡内の平安時代の堅穴住居は東壁にカマドを造りつけるのが多いが北壁に設けられる例もある。出土位置の分析において、鉄製品の背景に何らかの宗教的意図を予想できるが、その場合方位は重要な要素である。しかし北と東の2ヶ所にカマドを持つ模式図を作成すると、本来はカマドの存在しない北壁付近で出土している鉄製品と北カマド付近で出土した鉄製品とを図上で区別しにくい不便さが生じてしまう。そこで北カマドと東カマドの2種の図を比較しても分布の傾向に大きな差は生じなかつたこともあり、検出事例が多い東カマドの住居における方位に統一し、カマドの存在する壁を東壁とする模式図を作成した。

破片などの小さな遺物は遺構内への流入など偶然の混入が考えられるため、残存度が2/3以上の場合は完形品、それ以下を細片とし区別した。紡錘具が折損していることが多い紡錘具に対してこの基準を当ててみると、完形と判断される例が少なくなる。またその他の鉄製品と異なり、防輪のみであっても意味を持つ形態であると予想されるため、防輪のみの残存度が2/3以上であっても完形と判断した。同様に紡錘のみの場合においても意味を有する可能性が考えられるが、釘や器種不明と判断されている例が多くあり、紡錘と特定できる例が少ないと考えられるため除外した。

床面直上出土と覆土中出土の場合も区別して表示している。また鐵治遺構からの出土遺物に関しては鐵冶炉や金床石など堅穴住居には存在しない施設との位置関係という要素が考えられるため今回の作業から除外した。

対象とした遺跡は以下のとおりである。

（八ヶ岳山麓）

高根町社口遺跡^(注1)

大泉村寺所遺跡^(注2)、豆生田第3遺跡^(注3)

長坂町石原田北遺跡^(注4)、相原遺跡^(注5)

（茅ヶ岳山麓）

須玉町上ノ原遺跡^(注6)

明野村梅之木遺跡^(注7)

（塩川低地）

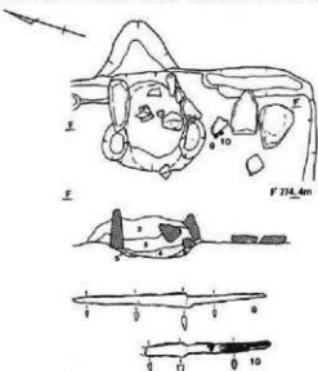
これら以外の遺跡であっても特徴的な出土状況等を示す遺構があり、適時紹介する。今回は筆者の怠慢により報告書レベルでの事例集成にとどまっており、本来はさらに多くの鉄製品が北亘摩郡内において出土していることをお断りしておく。

3 器種別の分布状況

鉄製品の分布状況を器種ごとに観察すると以下のようない傾向が見て取れる。

刀子

カマド周辺、住居中央、北東隅、北西隅で多く出土している。上ノ原遺跡C-43号住居ではカマドが解体されており、袖石の一部を抜き取りカマド右脇の床面に置き、その袖石とカマド本体との間の覆土中からほぼ完形の刀子2点が出土している(第1図)。梅之木遺跡55号住居では



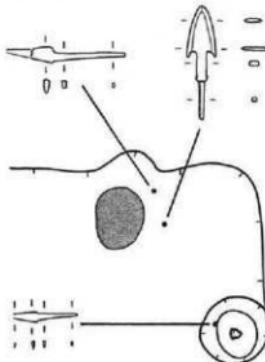
第1図 上ノ原遺跡C-43号住居カマド (1/40、鉄製品1/4)

南壁沿いの103号ビットから完形の刀子が壺の破片とともに出土している(第2図)。床面下からの鉄製品の出土事例も1例確認できた。梅之木遺跡101号住居内258号土坑で、壺とともに刀子と鎌が出土している(第3図)。刀子、鎌ともに完形で、壺も完形で供繕具として使用された痕跡が認められず未使用のまま埋められたようである。

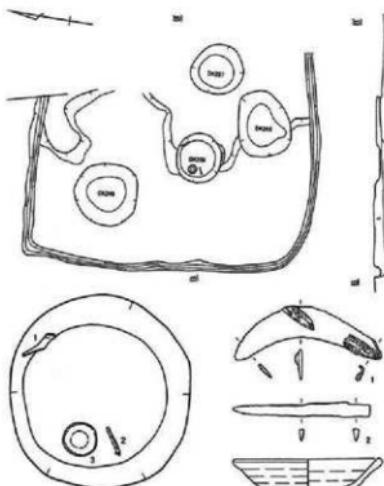
鉄鎌

カマド内や北壁沿いで多く出土している。前掲の梅之木遺跡55号住居ではカマドの火床面上で刀子と鉄鎌が出土している。同60号住居ではカマドはやはり解体されて構築材の礫が置き直され、その覆土中から完形の鉄鎌が

出土している。梅之木遺跡31号住居では北壁沿いの床面上から完形の鉄鎌が出土しており、報告によるとその先端は北に向いていたという。社口遺跡1号住居からは鉄鎌状鉄製品2点と刃を研ぎだしていない刀子にも見える剣状鉄製品2点が床面上約10cm上から束ねたように出土しており(第4図)、報告者は「儀器的なものであろう」としている。



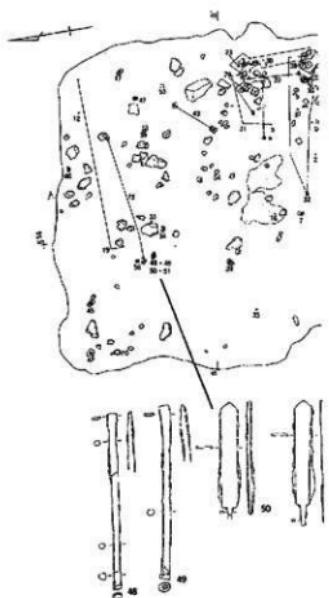
第2図 梅之木遺跡55号住居 (1/40、鉄製品1/4)



第3図 梅之木遺跡101号住居 (1/80、土坑1/20、遺物1/4)

鎌

刀子、鉄鎌と比較すると出土量は少ないが、多くがカ



第4図 杜口遺跡1号住居 (1/80、鉄製品1/4)

マド周辺の床面直上で出土している。杜口遺跡29号住居ではカマド左脇の床面直上から完形で出土しており、詳細な位置は不明だが中田小学校遺跡17号住居ではカマド正面の床面直上から完形で出土している。このように床面直上からの出土が多いことも鐵の特徴といえるだろう。

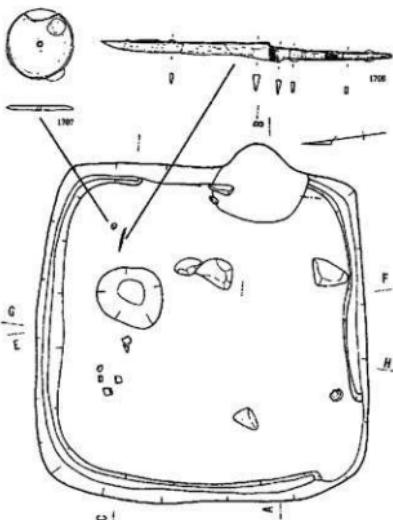
紡錘具

北東隅からも出土しているが、北壁、西壁、東壁沿いの立ち上がり付近からの場合がほとんどである。寺所遺跡17号住居（第5図）では北東隅で紡輪部と刀子が、山梨県北巨摩郡明野村寺前遺跡（28）9区平安2号住居（第6図）では西壁沿いで灰釉陶器碗の破片とともに組み合わせて使用されたと推測させる出土状況を見せていく。

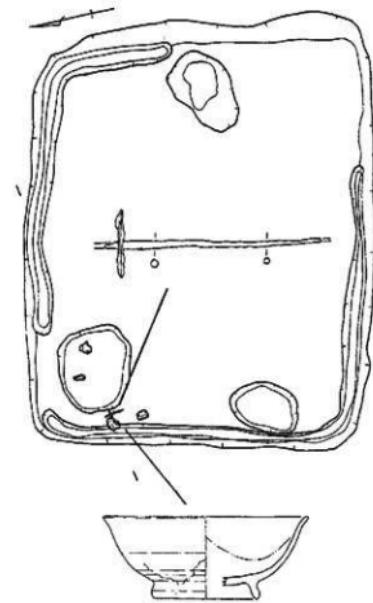
4 鉄製品の分布の傾向

以上のように各鉄製品は、竪穴住居内の出土位置にある程度の傾向が認められるようである。前節で確認した器種別の分布傾向をふまえて鉄製品全体の出土位置を見てみると以下のような傾向が看取される。

- ① カマドとその脇、住居中央、北東隅、北西隅、北壁沿いの5ヶ所に鉄製品が比較的多く分布する。…



第5図 寺所遺跡17号住居 (1/50、鉄製品1/4)



第6図 寺前遺跡平安2号住居 (1/50、遺物1/4)

- 方、住居の南側での出土は少ない。
- ② カマド内では鉄鎌の出土が主体的であり、覆土中、床面直上の両方から出土している。刀子と鎌はカマド周辺からの出土であり、鎌は全て床面直上からの出土である。
 - ③ 床面中央での出土はほとんどが刀子である。床下の土坑内からの出土も見られる。
 - ④ 北東隅部では刀子、鉄鎌のほかに紡錘具が出土している。刀子、鉄鎌は覆土中から出土し、紡錘具は床面直上からの出土である。
 - ⑤ 北壁沿いでは刀子、鉄鎌、紡錘具が出土しているが特に鉄鎌の出土数が多い。また紡錘具も他の場所に比べて多く出土している。
 - ⑥ 鎌はカマド周辺以外ではほとんど出土していない。
 - ⑦ 住居居中央では他の場所と比較して刀子破片の床面直上出土が目立つ。

このように鉄製品の堅穴住居内の出土位置には5つのまとまりが確認できた。また住居の北側での鉄製品の出土が日立つ一方で南側ではほとんど出土しない。このような傾向から、鉄製品は住居内の空間や方位、あるいはその両者を意識していたと推測される。

前節で指摘した、鎌はカマド周辺、鉄鎌はカマド内と北壁沿いといったような器種の違いによる出土位置の相違は、不要となつた鉄製品を単に廃棄した結果とは考えにくい。このことは、むしろ器種の違いを意識した何らかの行為が存在していた結果と考えられないだろうか。

5 鉄製品が示す人々の行為

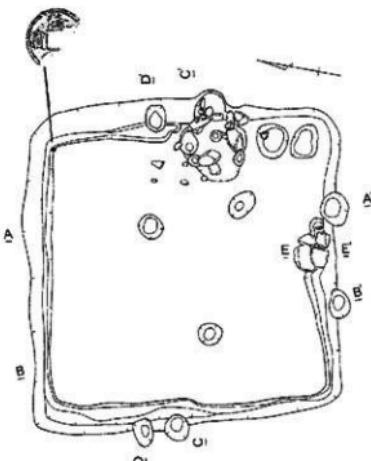
前節までに確認された、器種の違いによる使い分けや出土位置のまとまりから、鉄製品を残すという行為にどのような意味があったのかを予測してみたい。

上ノ原遺跡C-43号住居の例では抜き取った袖石をカマド脇に置き、その近くに刀子を置くという、単なるカマドの解体ではない、定式化された行為の存在が推測される。また梅之木遺跡55号住居のようにカマドの大床面で鉄鎌が出土する例については、カマドの解体途中で鉄鎌が偶然に混入するとは考えられず、意図的に置かれたことを示していると考えられる。これらの例から、カマド内やその周辺に鉄鎌、刀子が集中するのは、カマド廃絶とともに祭祀との関連が予想される。カマド解体とともに祭祀行為については既に指摘されており(13)、祭祀具として墨書き器や灯明具が挙げられているが、刀子や鉄鎌も祭祀具としての性格が与えられていたのではないだろうか。

鎌はカマド周辺に集中している。長野県岡谷市梨久保遺跡57号住居(13)では新旧2基のカマドが検出されており、解体、撤去された旧カマドの位置である北壁中央に鎌が密着して出土している。この例からは、機能が停止したカマドに対して鎌を使用する行為が看取される。このことからも鎌は、カマドとの強い関連性がうかがえ、カマド周辺以外ではほとんど出土しないことから、祭祀具としてはカマドに特化した性格が与えられていたと推測される。

刀子の破片など住居中央の床面直上で出土する遺物は、生活時からそこに置かれていたとは到底考えられず、住居廃絶時の行為をあらわすものであろう。片や床下の土坑での鉄製品の出土は、住居建築前の地鎮行為をあらわし、位置、意味ともに対照的なものと考えられる。

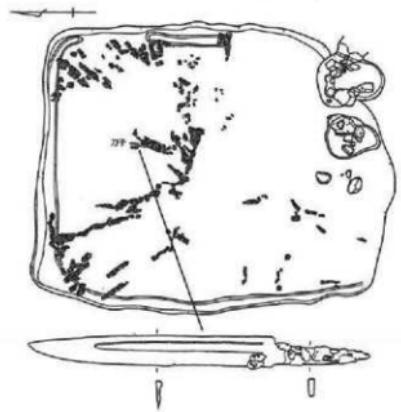
住居の北東隅は刀子や鉄鎌などの出土する頻度が高いが、鉄製品ではなく銭貨が出土している例もある。梅之木遺跡76号住居では周溝内から、半分に切断されたと思われる「隆平永宝」が出土している(第7図)。堅穴住居内で出土する銭貨に対しては祭祀具としての性格が指摘されており(13)、この事例からも北東という方位に対する強い意識が看取される。北東隅という思い当たるのが鬼門である。陰陽五行説の方位観では北の陰から東の陽に転ずる急所であるという。この方位観に基づき、新築住居の安置、居住者の平安を願う祭祀として、鬼門(北東)と表鬼門(南西)の柱穴に鉄鎌を埋納したり、屋根裏へ矢を射る儀礼の存在が指摘されている(13)が、前掲



第7図 梅之木遺跡76号住居(1/80、銭貨1/2)

第2図、梅之木遺跡55号住居内の103号ピットは南壁際に設けられていることから裏鬼門を意識して刀子を納めたと考えられる。また北東隅では鉄錐に加えて刀子の出土も多く見られることから、矢を射る行為に代えて刀子を納めるということもあったのではないだろうか。覆土中からの出土が多いのは、竪穴住居廃絶後に構築材とともに落下、埋没したためと考えられる。

住居の南側からの出土がほとんど見られない一方で、刀子や鉄錐が北西隅や北壁沿いから出土しているということは前述の屋根裏に矢を射たり刀子を納める行為とともに、北東を含めた北という方位に対する古代人の特別の関心を示すものと考えられる。明野村寺前遺跡10区平安29号住居（第8図、写真1）では大型の刀子が住居北側の床直面上から出土している、本住居は焼失住居であり炭化材が刀子の上に重なって検出されていることから上屋に納められていた刀子が構築材とともに崩落した結果であると理解できる。



第2図 寺前遺跡平安29号住居（1/80、鉄製品1/4）



写真1 寺前遺跡平安29号住居刀子出土状況

筋錐具は南壁以外の壁際で出土しているが、刀子や鉄錐と異なり、カマド内や住居中央で出土していないことから、刀子や鉄錐とは目的の異なる行為に用いられたと考えられる。また前述の刀子や灰陶陶器とともに出土している例からは、筋錐具の単独での使用だけでなく他の遺物と組み合わせた使用も推測される。

6 まとめ

前節までの検討の結果から、鉄製品は本来の使用目的ではない祭祀行為に利用され、祭祀の内容に応じて特定の器種が選択されていたという仮説を提示した。その背景にはカマドの解体行為のような民間祭祀や陰陽道などが渾然一体となった古代人の宗教観やさらには民間宗教者の存在が予想される。

鉄製品と祭祀行為との対応関係には、器種により程度の差が予想される。刀子は特定のまとまりに基中せず、一般的に見られることから汎用的な性格を持っていると考えられる一方、鎌はカマドに関する行為に特化した性格が与えられていたと考えられる。鉄錐はカマド内と住居北側に見られ、用途の限定性においては刀子と鎌の中間的な性格がうかがえる。

7 今後の課題

今後、仮説を検討し、深化させていくための課題を示しておきたい。

今回の検討範囲は北巨摩郡内に限定したものである。小稿において提示した鉄製品を用いた祭祀行為の存在が、同質的な集落が多く存在する北巨摩郡内に限られるものなのか、ほかの地域でも見られるもののかを明らかにするためには、検討地域の拡大が必要である。地域という視点以外にも官衙周辺とそれ以外の集落といった性格の異なる集落間における分布傾向にも注意を払いたい。差違があるならば住居内の儀礼作法における地域的な相違や、住居内の祭祀を行ったと考えられる民間宗教者の活動のありかたや行動範囲を明らかにする手がかりとなるであろう。

祭祀行為に対して儀器として製作された鉄製品の存在も考えられる。刀子や鉄錐の刃の研ぎ出しがない鉄製品が祭祀行為に用いられる可能性もあり、刃の研ぎ出しの有無や、単に未製品と判断されがちな、刃の研ぎ出しのない鉄製品の扱いにも注意を払いたい。

今回は分析対象としなかったが、社口遺跡5号住居、宮ノ前遺跡211号住居など、鍛冶遺構ではない住居のカマドから鉄錐が出土する事例が見られ、鉄製品と同様にカマド廃絶時の行為に用いられた可能性も考えられる。梅

之木遺跡74号土坑では鉄滓が焼きこてや墨書き器片とともに出土している。覆土は人為的に埋め戻されていると推測されることから鉄滓が意図的に埋められた可能性を示唆している。今回試みた作業を応用すれば鉄滓に与えられた性格も明らかにすることが可能であると思われるところから、発掘時に省略されがちである鉄滓にも出土位置の記録が必要であることを指摘したい。

カマドの覆土中から出土する刀子や鉄鎌には、焼絶時だけではなくカマドを造りつける際に構築材の中に納められた可能性も考えられる。構築時に納められた鉄製品なら熱を受けている可能性もあり、解体時に納められたものなら熱を受けないと想われるところから、鉄製品の被熱度の有無を観察することにより、どの段階でカマド内へ鉄製品を納めたのかが推測できるかもしれない。

平安時代の人々は日常生活においても鬼門など方位に対する強い意識が働いていると思われる。ましてや祭祀行為に対しては方位はさらに重要な要素となるであろうことから刀子や鉄鎌の刃先の方向や置きかたなどにもこの意識が反映されているかもしれない。鉄製品の出土位置だけでなく鉄製品の向きにも注意を払い、発掘調査時に記録する必要があろう。

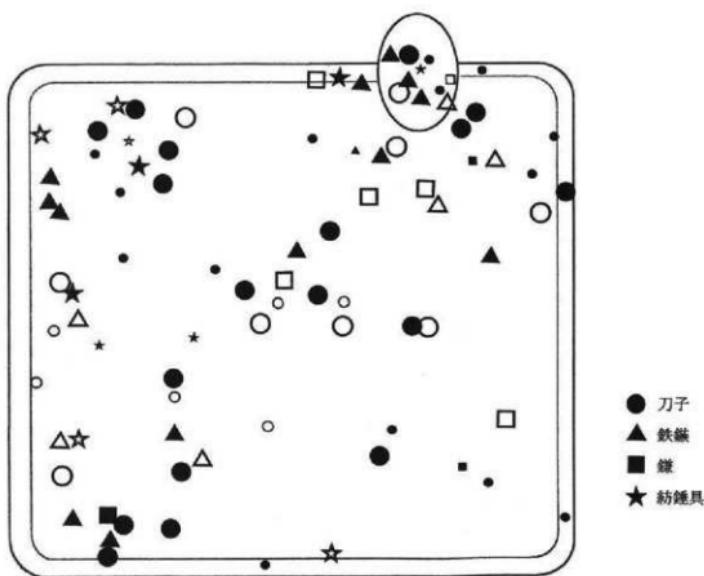
8 わおりに

以上のように鉄製品の出土位置の傾向とその意味についての検討を行ったが、北巨摩郡という限られた範囲による少ないデータからの傾向の提示と解釈にとどまった。また時期ごとの様相の変化についても全く手付かずになってしまった。しかし本稿がたたき台となり平安時代研究の進展の一助になればと切に願う次第である。先輩諸氏のご叱正を願いたい。

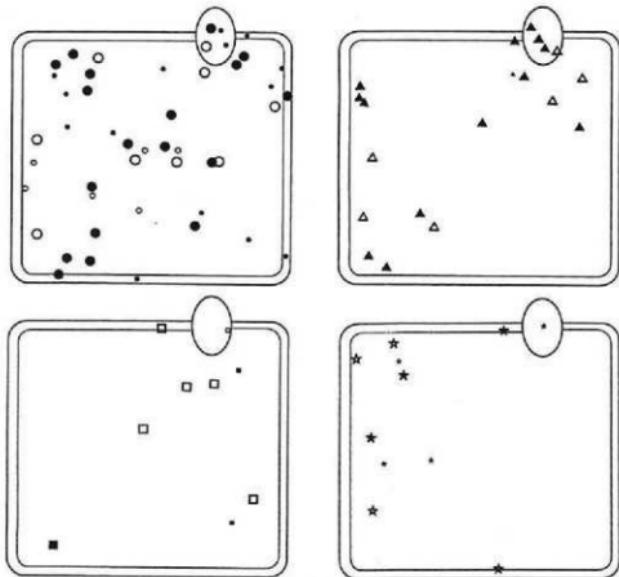
最後になりましたが、小稿の作成にあたり瀬田正明氏、平野修氏、保坂康大氏、山下幸司氏ほか北巨摩市町村文化財担当者会の皆様にはご指導、ご協力を頂きました。記して感謝いたします。

註

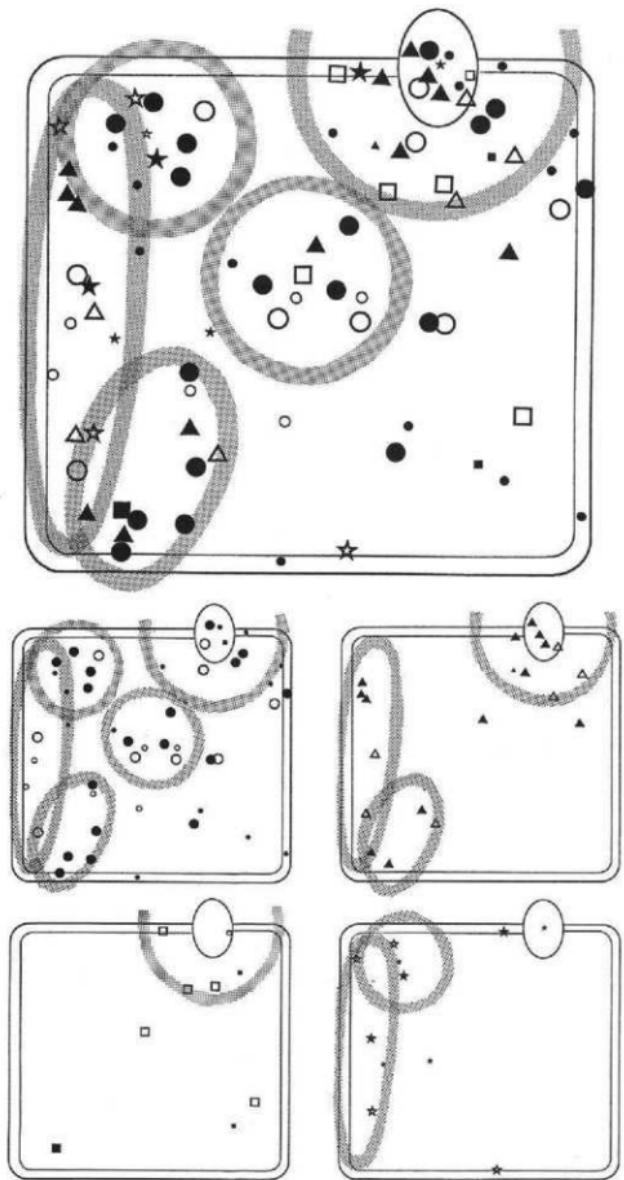
- (1) 櫻原功一ほか 1997『社口遺跡第三次調査報告書』 社口遺跡発掘調査団
- (2) 新津 鶴・八巻与志夫 1987『寺所遺跡』 山梨県教育委員会
- (3) 伊藤公明・渡辺泰彦 2000『豆生田第3遺跡』 大泉村教育委員会
- (4) 平野 修ほか 2001『右原田北遺跡』 右原田北遺跡発掘調査団
- (5) 宮沢公雄 2000『村屋遺跡第二次発掘調査報告書』 相
- (6) 平野 修・櫻原功一 1999『上ノ原遺跡』 上ノ原遺跡発掘調査団
- (7) 佐野 隆 2002『梅ノ木遺跡I』 明野村教育委員会
大山祐喜・原 正人 2003『梅ノ木遺跡II』 明野村教育委員会
- (8) 平野 修・櫻原功一 1992『宮ノ前遺跡』 蓼崎市教育委員会
- (9) 北巨摩市町村文化財担当者会 2000『寺前遺跡』「八ヶ岳考古」平成11年度年報
北巨摩市町村文化財担当者会 2001『寺前遺跡』「八ヶ岳考古」平成12年度年報
- (10) 遺構の詳細については未報告であるが、筆者が調査を担当した遺跡であり、特徴的な遺物出土状況を確認することができたため小稿に掲載した。
- (11) 塙 隆 1995『竈の発見プロセスとその意味』「山梨県考古学協会誌」第7号
- (12) 戸沢光則ほか 1985『梨久保遺跡』 岡谷市教育委員会
- (13) 深澤耕幸 2000『古代東国の大穴墓と錢貨』「府中市郷土の森紀要」13
- (14) 松村恵司 1993『鐵鎌と鍛葉儀札』「山梨県考古学協会誌」第7号



* 大きなドットは完形品、小さなものは断片をあらわす。
白抜きのドットは床面直上出土、墨塗りのものは複土中の出土をあらわす。



第9図 鉄製品出土位置図（全機種および器種別）



第10図 出土位置によるグループ割り図（全機種および器種別）

III 発掘調査速報

新府城跡

所在地 蕨崎市中田町中条

調査原因 環境整備にともなう発掘調査

調査期間 2002年7月2日～2003年3月31日

調査面積 約2000m²

調査期間 蕨崎市教育委員会

調査担当 山下孝司



発掘調査の概要

新府城跡の発掘調査は平成10年度から実施されており、今年度は5年目にある。調査は平成12年度に行われた掲示の試掘調査を踏まえて、掲示から城内に入った郭において実施した。郭は東西100m、南北25mの東西方向に細長い長方形を呈しており、北側には水堀と土塁、東から南側にかけては空堀、西側は七里岩の断崖となっている。本郭からさらに城内に入るには、南側の土橋と東側において空堀を越える掛け橋が考えられる。

郭は南側が一段高い南北二段の構造となっており、調査は地形等を考慮し小グリッドを設定して、面的に掘り下げを行った。調査の結果明確に建物と判断できるよう

な遺構は検出されなかったものの、北側の低い部分では土の硬化面が検出され、築城当時の通路面ではないかとの判断がなされた。北側土塁は傾斜面に盛り土を行いつくらっていた。土橋西側の空堀部分の調査では、堀に2mも土が堆積しており、ローム土層～PM-1層を掘りぬき八ヶ岳岩屑流堆積物まで掘り下げた状況が明らかとなつた。さらにこれまで武田氏滅亡後の徳川段階、あるいはもっと新しい段階で埋め立ててつくられているのではないかと疑問が出ていた土橋に関しては、ロームを掘り残してつくられていることが判明した。出土遺物は少なく、土器片・青磁破片・鉄砲玉などとなっている。



空堀作業風景



近景



土橋発掘風景



土橋～空堀部分

梅之木遺跡

所 在 地 明野村浅尾字梅ノ本地内

調査原因 畑地帯総合整備事業

調査期間 2002年5月14日～2002年9月24日

調査面積 22,500m²

調査機関 明野村教育委員会

担当者 大山祐喜

梅之木遺跡は湯沢川南の尾根筋、標高760mから780m付近に位置する遺跡である。2000年に明野村教育委員会が調査を実施した平安時代後半の集落跡と一連の遺跡であり、平安時代後半の竪穴住居が26軒、掘立柱建物7棟、土坑12基、縄文時代中期後半の竪穴住居4軒、土坑1基、弥生時代の土坑5基が検出された。

縄文時代中期後半の竪穴住居は曾利III式期から曾利V式期のものである。縄文4号土坑は曾利III式期の住居で、床面上約3cmから15cmで16点の黒曜石と4点の白色石英が出土した。黒曜石2点と4点、白色石英4点がそれぞれ接合している。本住居からは石器や未製品の出土がなく石器製作址とは考えられず、多くが住居の東側に半円形に分布していることから壁に沿って意図的に置かれたものと推測される。

弥生時代の土坑は条痕文土器とともにものである。322号土坑は直径1.4mの円形土坑であり、土器片とともに2枚の扁平な櫛が出土している。327号土坑は断面形がフラスコ状を呈しており、波状文の施された水神平式土器も出土している。また深さ1.6m以上を測る大型の土坑2基も検出されている。

平安時代の遺構は遺跡全域に分布している。竪穴住居は一定の範囲に分布している。9世紀後半の住居が遺跡の東部まで分布しており、10世紀代以降になると住居数は減少し西南部へ分布していくようである。掘立柱建物は出土遺物がなく帰属時期は不明であるが、住居が分布する中で2～3棟ずつまとまりをみせている。土坑は橢円形、もしくは円形で竪穴住居や掘立柱建物とは離れた地区に集中している。

9世紀第3四半期頃の竪穴住居は9軒あり、97号住居からは「目」と墨書のある大小久保型壺と「倭」と墨書のある甲斐型壺が出土している。「目」「倭」とともに県内では類例をみないので注目される。「目」は「さかん」とも読み、国司の四等官を指す可能性も推測される。『日本文德天皇實錄』には仁寿二年(852)年に甲斐國に目を1名増員したという記録がみえ、土器の実年代とも



一致している。「倭」は『延喜式』神名帳に登録されている「倭文神社」との関連が想起されるが、同社は現在の並崎市總坂宮久保に鎮座する同名社に比定されている。またこの住居では床下の土坑内から滑石製の桙帯が出土しており、床下土坑の数が多い点とも合わせて出土遺物、構造ともに遺跡内で異質な印象を受ける住居である。同時期の110号住居からも「目」墨書のある大小久保型壺が1点出土している。

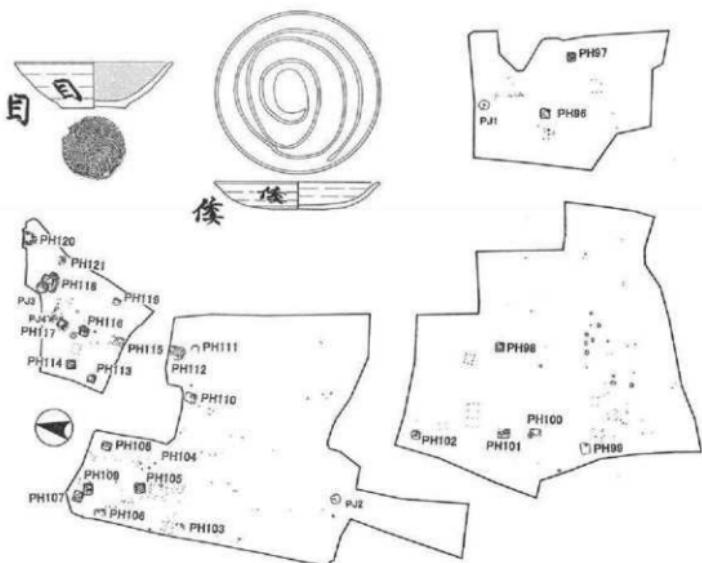
9世紀第4四半期頃の住居は2軒検出されている。前期の住居との重複は見られない。

10世紀第2四半期頃の住居は2軒検出されており、116号住居は一部の壁面を共有し2面の床面をもつ住居であった。

10世紀第3四半期頃の住居は5軒検出されている。101号住居は床面を貼床によって構築している。床面下の土坑が4基検出されたが、住居のほぼ中央に位置する土坑からは壺と刀子、鎌がほぼ同一レベルで出土した。壺には使用された痕跡はなく、まるで新品のようである。覆土は地山と同質の單一の土である。これらの点からこの土坑は意図的に壺と鉄製品を埋めたものと考えられる。

10世紀末から11世紀前葉の住居は3軒検出されている。いずれの住居も1辺5m以上と本遺跡内では大型の規模をもつ。118号住居は1辺約7mと本遺跡最大規模の住居である。金床石と思われる扁平な櫛がカマドの脇から出土している。鐵滓が多數出土し、床面の一部が著しく被熱していたことから鍛冶遺構と考えられる。120号住居では鐵滓が多數出土し、羽口と思われる土器製品が出土していることからこちらも鍛冶遺構ではないかと推測される。

本遺跡の西2kmには寺前遺跡があり、9世紀後半から11世紀代の竪穴住居100軒以上と掘立柱建物約20棟が調査されている。本遺跡では出土数が少ない灰陶陶器や綠釉陶器が多數出土しているが墨書土器の出土量は本遺跡と比較すると非常に少なく、存続時期の重複する遺跡においても異なる様相を見せている点が注目される。



梅之木遗址全体图 (S = 1/2,000) 97号住居出土遗物 (S = 1/4)



图文 4 号住居出土遗物出土状况



327号土坑遗物出土状况



101号住居床下遗物出土状况



118号住居

諏訪原遺跡

所在地 北巨摩郡明野村上神取1590番地
調査原因 農地転用
調査期間 平成14年9月25日～平成15年3月28日
調査面積 720m²
調査主体 明野村埋蔵文化財センター
担当者 佐野 隆

諏訪原遺跡は縄文時代中期後半、曾利式期を主体とする集落遺跡で、平成4年から個人住宅建設、柔接根にともない継続的に発掘調査を実施している。¹¹⁾茅ヶ岳山麓の西端、標高550m前後の塙川河岸段丘上に立地する。

平成14年度は、環状をなすと思われる住居群の北東部において発掘調査を実施した(第1図)。井戸尻式期の住居1軒と土坑、曾利II式期からIV式期の住居5軒と土坑、近世初頭の石列、溝跡が検出されている(写真1)。

4号住居

4号住居(写真2)は長軸8m、短軸7.4mの楕円形に竪穴を掘り込んだ住居で、7本の主柱穴と周溝が検出され、南端に埋甕3基を備える。埋甕と床面出土土器から曾利III式期の住居と思われる。ほかに古い柱穴と周溝が発見され、少なくとも2回の建替え、拡張を経た住居である。一辺1.25mの石圓炉(写真3)は住居の中央から奥壁に寄った位置に設けられ、炉底は被熱し焼土化している。西辺の炉石と北辺炉石の一部は、新しい土坑に切られて失われている。炉の東南角には石片と磨石、北東角には棒状礫が立てられ小礫で囲った小型深鉢が埋められている(写真4)。炉埋土は炭化物粒子を多く含む黒色土で、洗浄の結果、炭化した食料残滓が検出された。住居を埋める埋土中と床面上では多数の礫が出土しているか、遺物の出土量は多くない。

炉の奥壁側の床面上には角柱状の礫などが配された施設が検出された(写真5)。角柱状の礫は古い柱穴の埋土上にごく浅い窪みを設けて立てられていたと思われ、検出時には斜めに倒れかけていた。立石は途中で割れ、上部は既に抜き取られていた。この立石を圍むように磨石、扁平の丸石、扁平礫、小型の立石、黒曜石原石が据えられている。立石と住居奥壁の間で大小の壺形土器2点が出土した。類似した施設は、平成7年度に調査した38号住居で検出されている。



1号住居

長軸6.5m、短軸6mの楕円形の住居で、出土土器から曾利III式期の遺構と思われる。住居奥壁寄りに一辺1mの石圓炉が検出され、さらに奥壁部の柱穴埋土上に焼土の集石が検出された(写真6)。この集石は柱穴底部を避けたと推測される。平成7年度調査区38号住居や先に紹介した4号住居にみられる住居内の配石や立石との関係があるのか興味深い。

2号土坑

調査区南端で検出された井戸尻式期の土坑(写真7)で、長軸1.5m、短軸1.2m、深さ0.6mの楕円形である。埋土中には土器破片、焼土とともに焼成粘土塊1.35kgが含まれていた。これらの遺物は埋土とともに雜多に埋められたと思われ、出土状況に規則性は見出されない。焼成粘土塊は粘土のみから成り、砂粒子などの混和物は含まれていない。色調は被熱して変色した黒色と明黄褐色で、共伴した井戸尻式土器の明褐色とは異なる。一部に指先でなでた痕跡が認められる。

註1 佐野 隆 1996 「諏訪原遺跡」『平成7年度年報』
北巨摩市町村文化財担当者会



写真1 調査区全景



第1図 諏訪原遺跡概要図



写真2・3 1号住居奥壁部の配石（上）・
2号土坑（下）



写真4 4号住居



写真6 4号住居



写真5 炉隅に設置された深鉢形土器と小配石



写真7 炉奥の配石

平山遺跡

所 在 地 北巨摩郡須玉町江草5921他

事 業 名 田園空間整備事業

時 代 縄文、弥生、平安、中世、近世

調査期間 平成14年4月2日～平成14年11月1日

調査面積 24,000m² (調査対象面積約50,000m²)

担当者 山路恭之助・深沢裕三

本遺跡は、塩川の左岸、江草の根古屋地内から獅子吼城へ通ずる林道を登った平山、通称机山の西麓に広がる緩急斜面上に立地し、標高780m前後を測る。机山の西麓、古道小尾街道へ通ずる峠から湯戸ノ沢の沿う屋根上の北側をA区とし、獅子吼城通称城山へ続く緩斜面と、机山から流下した小河川によって堆積された平坦な縁辺部をB区とした。机山の北西部の急傾斜面に造成された田が、棚田状に立地しているところをC区とした。確認された遺構は、A区で石鎚工房址と考えられる遺構と、黒曜石の小型石鎚の完型、一部欠損した石鎚、剥片が數多く出土した。竈、壁溝、柱穴を伴わない隅丸方形竪穴遺構1と土坑10、ピット12、石列1が検出された。竪穴遺構の時期は、遺物整理中のため不明である。

B区では、縄文時代中期末の隅丸方形の竪穴住居址1(1号住)と、田の造成によって、住居址の石圍炉と床面のみを遺存した中期後半の遺構1(3号住)、後期の遺物を共伴したが、3号住と同様に石围炉と床面のみの遺構1(2号住)、渓谷際の緩斜面上で巨大石围炉1基、屋外石組み集石炉1を検出した。住居址周辺の土坑内から縄文時代中期末の中型の深鉢が横臥状で出土、他の土坑からは、縦条線文を施す口縁部を欠損した大型の深鉢が直立状態で出土した。

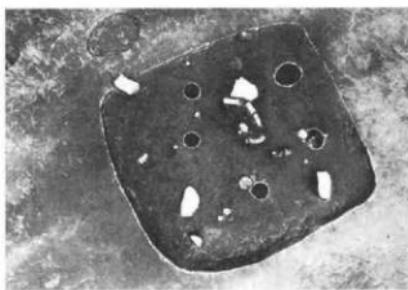
C区では、平行沈線による籠目文深鉢口縁片と、小型籠目文土器の完型を伴った4号住は、2基の石围炉と床面のみの住居址で、4号住よりはどの段丘上から、床面から地床炉と思われる焼土が薄く、2ヶ所に堆積した遺構を柱穴と貼り床の段差から縄文時代中期末の6号住、7号住とした。更に上段で、床面が調査外に山林の崖深く延びた遺構を5号住とした。共に平行沈線の籠目文土器口縁部、渦巻状把手、土偶の足等が出土した。地境の石積と崖の土止めの石垣の中から、五輪塔の宝珠以外水輪、火輪そして地輪が出土した。その他、隅丸形を呈した竪穴遺構が検出されたが、遺構内に9本の柱穴がほぼ等間隔に穿かれていた。出土遺物の整理中のため時期は不明である。前述の住居址群の傍に占地するところか



遺跡位置図 (1/25,000)

ら同時期ではないかと考える。

平山、通称机山には妙体石と呼ばれる巨石が中腹にそそり立ち、長く地元の人々によって、信仰の対象として祀られてきた。その麓に広がる平山遺跡から出土した理甕には、住居内のものと住居外から出土したものがあり、隅丸方形竪穴遺構も、住居址に伴うカマドがなく、四面に柱穴を伴うものと竪穴内に柱穴を穿くものとがあって、巨石信仰と埋甕、屋外集石炉と特殊な竪穴遺構が、祭祀的な場として意味をもつものか、今後に予定されている平山遺跡の北側一帯の開発に伴う調査によって解明できることを期待している。



1号住居址



逆位の深鉢出土状況

山ノ神遺跡

所 在 地 北巨摩郡須玉町若神子新町字山ノ神829他
事 業 名 県営圃場整備事業
時 代 繩文、平安、中世、近世
調査期間 平成14年7月11日～9月4日
調査面積 15,000m²（調査対象面積約2,000m²）
担当者 山路恭之助、深沢裕三
調査機関 須玉町教育委員会



遺跡の存在する須玉町は、山梨県の北北西に位置し、早川町に次ぐ広さを有し、その75%を占める山地が北東部を中心とし、平地は塙川と須玉川が形成した河岸段丘を中心に南西部に集中している。山ノ神遺跡は、須玉町の南端部の七里岩台地上、若神子新町字山ノ神地内に在って、標高550mが測られる。遺跡の周辺は、八ヶ岳山体崩壊に伴う蘿崎岩屑流によって、つくり出された小円頂丘と凹みが点在し、当遺跡周辺から始まって、蘿崎市穴山町から、同市蘿井町へと、畑と果樹園が多い田園地帯となっている。遺跡に近い小円頂丘は、中世城郭としての能見城があり、更に南西には、蘿崎市中田町中條上野に城山と呼ばれる新府城がある。

町内に於ける七里岩上の中世の城郭遺跡は、若神子城北城、古城、そして南城があり、平安時代の遺跡には、土師製作跡が発見された大小久保遺跡がある。平成3年度の町内遺跡詳細分布調査に於いて、当該地付近のすもも畑から、繩文時代中期の深鉢片や石器が数多く収集されており、又、平安時代から中世にかけての遺跡が、須玉町から蘿崎市にまで及んでいるところから、本遺跡に於ける本調査によって、繩文、平安そして中世に関わる

遺構や遺物の出土が期待された。調査面積15,000m²の殆どは田は、北東に掘けた窪地上に立地し、いわゆる「ぬた田」で試掘時も耕作土除去後の地山が深く、途中から水が湧き出る状況だった。分布調査で遺物を収集した果樹園に接する鉤手状の台地2,000m²について本調査した。その結果、平安時代10世紀前半かららば頭の住居址1軒と、隅丸方形の竪穴造構2、溝7条が発見された。出土した遺物は年代別に多岐に亘り、特に深さ2m程で水が湧き出た竪穴造構の下層、黒褐色土層内から繩文時代前期の鐵雜土器片、中期初頭の連続刺突文を施した深鉢片、中葉の連続爪形文片、横位沈線間に繩文を充鎮した後期の深鉢片、小型石斧、平安時代の内黒土器、甲斐型环、甕の破片、近世では染付陶器片などが挙げられる。又、溝からも繩文時代中期と後期の深鉢片、平安時代から近世に比定される遺物が出土し、石器では搔器、小型石斧、石鎚と町内初見の槍先型尖頭器がある。今回の調査に於いて、七里岩台地上の人々の長い生活の営みの痕跡の多いことに驚かされ、この地域一帯の聚落の変遷を解明する上で貴重な資料としたい。



1号住居址



溝遺構

かみこよういせき 上小用遺跡（第9次調査）

所 在 地 北巨摩郡白州町鳥原地内

調査原因 農業活性化施設建設事業

調査期間 2002年4月9日～9月5日

調査面積 990m²

調査主体 白州町教育委員会

担当者 杉本 充・五味孝広



本遺跡は、明石山脈の北部、甲斐駒ヶ岳の前山群を構成する巨摩山地東麓に位置し、1km程東を北西から南東に流れる釜無川が形成した河岸段丘高位面に立地している。この段丘面（以下鳥原平）の北側は流川に、南東側は松山沢川に削られ、急な段丘崖となっている。現況は、畑及び遊休桑園である。

鳥原平では一面に中世の遺物が散布しているが、段丘の南側には縄文時代中期の遺物が濃密に分布しているため古くから遺跡の存在が知られている。昭和63年度・平成元年度と平成9年度に遺跡範囲と遺構確認のため試掘調査が行われ、平成10年度から開発に伴う本調査が行われている。

本年度の調査区は遺跡の中央北側にある。縄文時代中期の竪穴住居址1軒、中世の竪穴状造構1基、地下式坑1基、土坑約20基が検出された。特筆すべき遺物として、縄文の竪穴住居址から径15cm程のパン状炭化物が出土している。

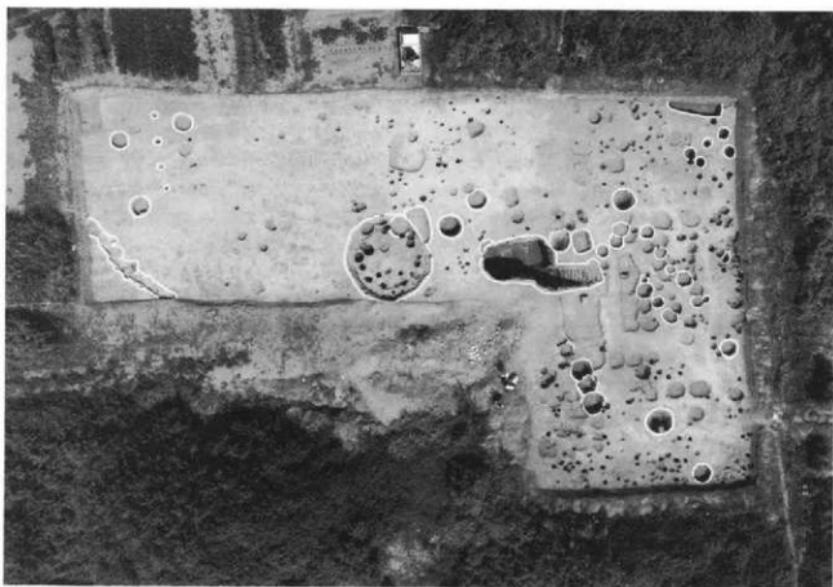
参考文献

白州町教育委員会 1989 『教来石民部館跡』

白州町教育委員会 1990 『教来石民部館跡』(第2次)

白州町教育委員会 2000 『鳥原平遺跡群1』

<http://www.asahi-net.or.jp/~rj5m-sgmt/>



遺跡全景

さねばら 真原A遺跡

所在地 武川村大字山高
調査原因 営農活動に先立つ発掘調査
調査期間 8月7日～12月24日
調査面積 約800m²
調査主体 武川村教育委員会
担当者 平山恵一・坂口広太

発掘調査の概要

真原A遺跡は、北西側を石空川、南東側を黒沢川に挟まれた北向きの緩傾斜をなす台地上に立地する。今回発掘調査を行った地点は、武川村大字真原に所在し、標高は約710mを測る。本遺跡では、過去に5回の調査が行われており、住居跡が7軒、土坑が115基ほど検出されている。住居跡の時期は、いずれも繩文時代中期後葉の曾利II～III期にあたる。今年度の調査地は、平成11年・12年度に調査された地点の北東側の構縁地である。

今年度、調査によって検出された遺構・遺物は曾利式期の住居跡6軒、土坑110基および同期の遺物である。いずれの住居跡も北向きの傾斜面に立地しているため、北壁はほとんど確認できなかった。

また発掘調査および整理作業は、現在継続中であるため、遺構・遺物の詳細に関して今後変更される可能性が十分にある。予めご了承いただきたい。

3号住居跡

楕円形で長軸4.6m、短軸4mを測る。壁高は最も残りのよい南側でも15cm程度である。10本のピットが検出されたが、規模の貧弱なものが多く、全体の配置にもあまり規則性がみられない。周溝は、壁面の5～20cm内側をほぼ全周している。炉は方形の石囲炉で奥壁側によっている。

住居覆土の上層から中層にかけて多量の遺物が廃棄されていた。とくに中層においては、土器片などのほかに、炭化物や焼土ブロック・焼磚も広範囲で検出された。

4号住居跡

楕円形で長軸6.5m、短軸5.5mを測る。3号住居跡同様、壁面は南東側の一部でしか確認できなかった。7本のピットが検出され、そのうち主柱穴は5本で、五角形に配置されている。周溝は壁面の5～25cm内側をほぼ全周している。炉は奥壁側により、石囲炉であったと思われるが、ほとんどの石が抜かれており、正確な規模・形



状は不明である。長期間使用されたものだろうか、炉底面はよく焼かれている。炉内北東部には土器が埋設されていた。

3号住居跡同様、覆土の上層から中層にかけて多量の遺物が廃棄されていた。

5～8号住居跡

遺構の一部を切り合ながら、南北に並ぶ住居跡群である。現在調査継続中であるため、遺構の規模・形状や、相互の新旧関係などの詳細は本報告に譲ることにし、ここでは現段階で最も調査が進んでいる5・6号住居跡の遺構について、雑駁ではあるが紹介していきたい。

5号住居跡は、周溝が2重に巡り、柱穴も多段検出されていることから、拡張がなされたものと思われる。南壁直下から炉跡に向かって、埋甕が3個体ほど一直線に並んで設置されていた。外側の2つは、2重に巡るそれぞれの周溝内に正位の状態で、残る1つは、床面の柱穴を精査していたところ、その壁面から逆位で検出された。

6号住居跡は5本主柱穴の楕円形プランで、該期の典型的な住居タイプである。炉は奥壁よりに位置する方形の石囲炉である。住居の規模から考えると、石圓い部は比較的大形で、北東のコーナーには3片の石を配して副炉を設けていた。炉の最も基本的な役割である“調理・暖房・照明”とは、異なる特別な機能を有した遺構なのだろうか。今後の類例増加を待って、検討をしていきたい。

土坑

土坑群は今回検出された6軒の住居跡の南側に広がっている。規模・形状は様々で、時期は曾利II～IV式期のものであった。土坑上層部に配石や火を使用した跡があるもの、覆土中層に炭化物を多量に含むもの、土器を埋設したものなど、そのバリエーションも豊富であった。

今年度と平成11・12年度の調査結果とを合わせると、現状を呈する居住域と、その内側に散在する土坑域とい

う集落の形態が、一部ではあるが明らかになってきた。詳細な検討は今後の発掘調査と整理作業を待たねばならないが、本村における縄文時代中期集落の様相の一端を示せた意義は大きい。



3号住居跡下層出土土器



4号住居跡完掘状況



6号住居跡下層出土土器



3号住居跡完掘状況



6号住居跡炉（右上隅に副炉）



4号住居跡炉



土器が埋設された土坑

史跡谷戸城跡及び周辺遺跡

所 在 地 ①谷戸字城山 ②谷戸2437 ③谷戸2841

調査原因 ①史跡整備に伴う遺構確認調査

②保存目的の学術調査

③公園化に伴う試掘調査

調査期間 ①2002年7月9日～12月26日

②2002年3月4日～3月20日

③2002年7月29日～9月12日

調査面積 ①640m² ②16m² ③128m²

調査主体 大泉村教育委員会

担当者 渡邊泰彦・伊藤公明

① 史跡谷戸城跡の5回目となる調査は、城の北斜面、東斜面、西斜面、南西斜面、帯郭にて行なった（第1図）。

北斜面（第2図）は四の郭から北に続く斜面で、途中に四の郭を取り巻くように整備された遊歩道を挟んで、更に角度を急にして城外まで続いている。遊歩道は元から細い道であったところを整備したものと考えられ、城内の通路をほぼ踏襲していると推測される。四の郭から遊歩道までの斜面は、若干反った形をしており、調査は行なっていないが途中に三日月型の郭が張り出している。

調査の結果、表土下30cmの深さで地表面と同じ傾斜の地山を確認したほか、遊歩道沿いで幅2m、確認面から深さ50cmの浅い壠状遺構を発見した。この遺構は、地形が斜面から平地に変わる境に掘られており、方向も遊歩道（平場）に沿うようであるが、1つのトレンチでしか確認できなかったため、掘られた目的ははっきりしない。遊歩道の北側では、完全に埋まっていた土星の調査を行ない、黒色土を盛り上げた状況を確認した。

東斜面（第3図）は北斜面から続く遊歩道の東側（城外側）になり、西側の四の郭とは約8mの比高差がある。現況の観察では、遊歩道（途中から低い土星と重なる）から東へ最大幅25mの郭→空堀→土星の低い土手→斜面→通路状の狭い平場→急斜面という地形が確認される。

調査の結果は、現況の地形と大差ないものであった。郭は現地形と同じく東にやや下っており、完全な平らではない。この郭と空堀の底部との比高差は3.7mを測り、空堀の中に入ると郭（城内側）の様子は全くわからない。同じく、空堀の底部とその東側（城外側）の土星の高まりとの比高差は1.6mと低く、土を盛った形跡はみられない。表土下20cmで現地形と同じ形の地山が確認された。そこから勾配20°、幅5mの斜面を隔てて幅4mの通路状



の帶郭となつた。

東斜面の空堀は、南北150m以上にわたって掘られているもので、今回の調査では南北の端を検出すること目的としていたが、北側は北斜面の遊歩道の下まで達していることが確認され、それ以上は調査できなかつた。南端は、斜面を下る堅堀（等高線に直交する堀）の手前まで堀を確認したので、そのまま堅堀に繋がつて終わつていると考えられる。

西～南西斜面（第4図）は三の郭の西～南西を指し、現在は等高線に沿つた3段の通路状の帶郭（東から西へ上・中・下段とする）が確認される。また、南西斜面は鉤の手に曲がつた道が今も残り、その道が埋まりきらない空堀に繋がつて城外に続いているため、大手口と想定された場所である。

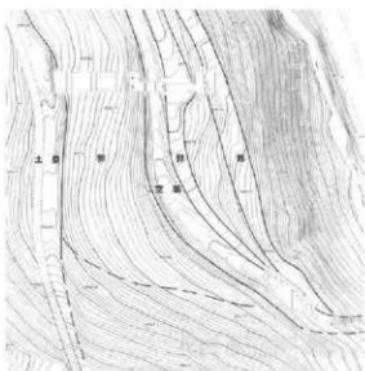
西斜面では、上段と中段の下から古い段階の遺構を確認した。初めは上段の部分に斜面を削つて2段の平場が造られるだけで、中段部分は斜面であったが、次の段階になると2段の平場は埋まって1段（現在の上段）となり、斜面であった中段部分を急角度で削るとともに、幅1.5mの平場を造り、その外側に土壁を築いている。現在の中段の外縁が土星のラインで、その内側は現地表面から60cmの深さで削られていたことになる。これは下から見上げた時に、ここを通る人の動きを慮るために考えられる。

南西斜面の調査からは、西斜面で確認した古い段階の遺構は確認されなかつたが、中段では幅3.8m、地表面からの深さ1.4mの空堀が発見された。南北に調査を広げたところ、堀は狭く、浅くなつてゐたことから、部分的に掘られた空堀で、細くなりながら消滅するものと考えられる。

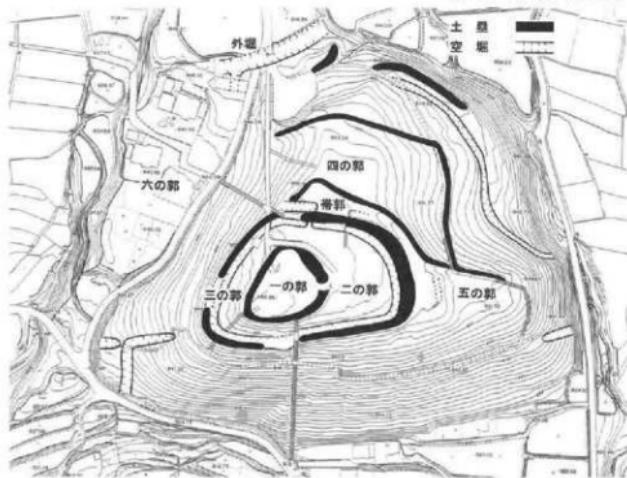
鉤の手に曲がる道については、これに沿つて空堀が掘られていることを確認した。幅6.5m以上、地表面からの深さ1.4mを測る。これにより、城の出入り口の1つであることは確実となつたが、大手か掘め手かという問題は解決していない。この空堀は、中段で発見された空堀と重複するが、新旧関係がはつきりせず、再度調査の必要



第2図 北斜面 (1/1000)



第3図 東斜面 (1/1000)



第1図 谷戸城全体図



第4図 西一南西斜面 (左 1/1000)
第5図 帯郭 (上 1/1000)

がある。

この南西斜面でも、斜面と下段の郭との境で堀状遺構を確認した。幅2.2m、確認面からの深さ60cmを測る。ここでも1つのトレンチでしか確認していないため、掘られた目的は不明だが、北斜面と規模、掘られる場所は共通している。

帯郭（第5図）は平成10～12年度にかけて、四の郭に近い部分と五の郭に近い部分の調査を行なっているが、今回はその中間部分の調査を行なった。

その結果、堀状遺構1、土壘下の掘り込み1、不明遺構1を確認した。堀状遺構は平成11年度調査でも見つかっているもので、二の郭の土壘に沿って掘られている。この時見つかった遺構は全長約20mであったので、今回確認した遺構もこの程度の大きさと考えられる。二の郭の土壘側を明瞭に掘り込むのに対し、反対側は緩やかに上がるだけで掘り込みはみられない。おそらく、帯郭外縁の土壘がこの遺構を区画するものと考えられる。

土壘下の掘り込みも平成12年度調査で確認されているもので、当初は二の郭土壘の土留めのためとも考えていたが、土壘の盛土より下層の土は、空堀の底に堆積する土の特徴とよく似ており、ある程度の時間がないと堆積しないものと思われることから、この土壘を築造する以前の空堀のような遺構の痕跡と考えておきたい。一の郭の土壘下でも空堀のような遺構が見つかっており、これらと合わせて考えることで、谷戸城の古い段階の縄張りについても解明が進むと期待される。

② 谷戸城の範囲を確認するため、谷戸城周辺遺跡として六の郭南東部の一部を調査した（第4図）。六の郭は史跡指定地となっている谷戸城（城山）の西に接し、現在は宅地や畠地となっている。山を背後にした平場といった感じで、この中を通るクランク状の道は今も使われている。

調査は2つのトレンチで行ない、ローム層上の黒色土層中から楽石らしき遺構1基を確認した。遺物は縄文時代と近世以降のものに限られ、谷戸城に関係する遺構・遺物の出土はなかった。

③ 中山間地域総合整備事業の一環として、谷戸城の北側で公園整備を行なうこととなり、調査を実施した。

谷戸城の北側は、北から南へ下る緩傾斜面で、現在は農地として利用されている。今回の調査区の西隣の畠では、地下式土壙が発見されているほか、谷戸城の西脇から北へ延びる道路は、途中でクランク状に曲がっている。

調査は8つのトレンチで行なったが、遺構は確認されず、中世の陶器片が数点と古鏡が出土した。



北斜面 堀状遺構（西から）



東斜面 空堀南端の近く（南から）



南西斜面 出入口（北から）



帯郭 堀状遺構（左）と土壘下の掘り込み

井富第4遺跡

所在地 大泉村西井出字井富7013他

調査原因 宅地造成

調査期間 2002年4月25日～5月24日

調査面積 700m²

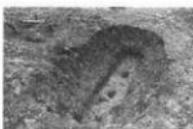
調査主体 大泉村教育委員会

担当者 渡邊泰彦

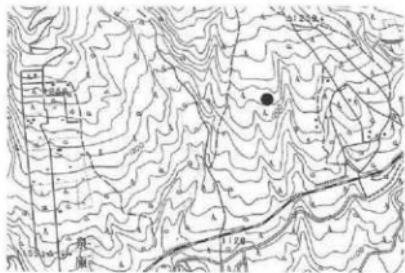
井富第4遺跡は、標高1200m付近の細長い尾根上に位置する。遺跡内は北から南に向かって平場→斜面→平場という地形で、上方の平場と斜面の境あたりで陥し穴と考えられる土坑を5基（1～5号土坑）発見した。平面形は楕円かそれに近い形で、長軸を南北方向に合わせる（等高線に対して直交）点で共通するが、配置に規則性はない。断面形は箱形（1土・4土）と漏斗状のもの（3土・5土）に分かれる。2号土坑は長軸方向が箱形、短軸方向が漏斗状の断面形で、底部に径10～15cmのピット3基が、長軸方向に合わせて掘られている。



井富第4遺跡 調査区全景



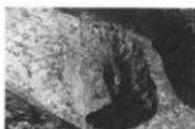
井富第4遺跡 2号土坑



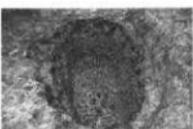
宅地造成の範囲が広大であるため、道路部分のみで調査を止め、宅地についてはその都度、個別に調査を行なっていくこととした。

土坑一覧

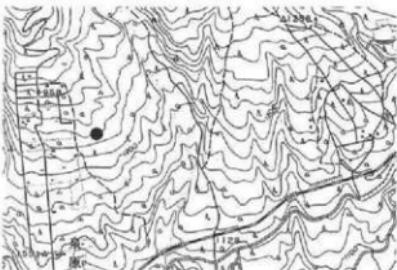
遺構名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	遺物
1号土坑	173	143	100	なし
2号土坑	278	144	80	なし
3号土坑	144	135	94	なし
4号土坑	175	113	90	なし
5号土坑	143	117	94	なし



井富第5遺跡 1号土坑



井富第5遺跡 2号土坑



井富第5遺跡

所在地 大泉村西井出字井富6813-1他

調査原因 宅地造成

調査期間 2002年10月21日～10月29日

調査面積 560m²

調査主体 大泉村教育委員会

担当者 渡邊泰彦

井富第5遺跡は、井富第4遺跡の西850mに位置し、標高は1220m付近と同じ高さにある。地形は全体的に緩やかに南へ傾斜しつつも、東側の沢に対しても傾斜している。調査区の北半が東へ落ちる斜面の途中であるのにに対し、南半は緩斜面の開けた空間になっており、両者から陥し穴と考えられる土坑が1基ずつ発見された。

1号土坑は南半で発見され、長径225cm、短径150cm、確認面からの深さ100cmを測る。断面は長軸側が箱形、短

軸側が漏斗状を呈し、軸は南北方向にある。

2号土坑は北半で発見され、長径165cm、短径90cm、確認面からの深さ60cmを測る。断面は箱形で、軸は南北方向にある。底部より石器の剝片が出土した。

井富第4遺跡と同じ理由により、道路部分のみの調査とし、宅地は個別に調査を行なっていくこととした。

上の原遺跡

所 在 地 高根町箕輪新町字上の原地内

調査原因 県道箕輪須玉線拡幅工事に伴う事前調査

調査期間 平成14年10月10日～12月28日

調査面積 2500m²

調査主体 高根町教育委員会

担当者 雨宮正樹



発掘調査の概要

上の原遺跡は、須玉川右岸の須玉川に浸食された台高約100mを測る段丘状の台地に所在した。遺跡のある台地は、標高約714mで、南北に延びる比較的幅のある尾根上の台地で、現状の道路は概ね台地の中央部分を南北に縱断している。拡幅される道路は、通称レインボーラインと呼ばれる茅ヶ岳広域農道と八ヶ岳広域農道の接続部分として計画され、七里ヶ岩（八ヶ岳火碎流）を須玉から高根に登り上げる部分は新設され、接続部は既存道路の拡幅が行なわれることとなった。

この事業計画により拡幅される一帯は、古くから遺跡の包蔵地として識られており、事業及び年度は異なるが2回ほど調査が行なわれている。1回目は昭和59年度に団体営の場整備事業に先立つ事前調査として高根町教育委員会により約1000m²の発掘調査が行なわれ、縄文時代中期末から後期初頭と平安時代の集落跡が検出され、2回目は平成4年に広域農道建設事業に先立つ事前調査として「川又坂上遺跡」（新津健他 1993）山梨県埋蔵文化財センターにより約2000m²の発掘調査が行なわれ、縄文時代後期初頭と平安時代の集落跡が検出されている。

今回の調査は、前述の場所から北西方向に約100mほど離れた地点での調査であり、遺跡自体の広がりを検証する事となった。

本調査に先立ち踏査及び試掘調査を平成14年2月から3月にかけて行ない、踏査により事業区域内のはば全域から遺物の表面採取が可能で、より詳しく確認するためには試掘調査を行なった。その結果、一部試掘できない場所があり、本調査の過程で確認を行ないながら遺構の確認を行なった地点はあったものの、全体的な遺構の広がりは比較的狭い範囲（南北方向約100m、東西方向±台地の幅）で、遺構の配置構成は外側に土坑群が幅40ないし50mで取り囲み、その中に土坑群を取り込んだ住居址が密集という形態ではなく、散在するようである。中心部は直径約40mを測る広場となり、ごく少数の土坑が存在した。

検出された住居址は、縄文時代中期中葉（戸井尻期）1軒、中期後葉（曾利III～V期）6軒、後期（称名寺期）1軒の計8軒あり、その他に単独の石窓い戸3基（中期後葉と思われる）、土坑約200基、単独の埋甕2基がある。これらのことから、当該遺跡は直径約100mの環状集落になると思われるが、幅4から7mという狭い線状のトレーニチの状況によるもので、全体像の把握は困難であるものの、想像することができる。

当遺跡の概要は、土坑群の中に比較的大きな黒色土の落ち込みがあれば、それが住居址であるという状況で、数多くの土坑が検出されている。これらの土坑の中で遺物を伴なうものは少ないが、3ヶ所の土坑から穿孔された硬玉1点、逆位で埋納された石皿1点、正位で底部が意図的に除去された土坑中の底に設置された土器1点などがあり、縄文時代中期の精神生活の一端を垣間見せる遺構・遺物が見受けられた。その他特殊遺物として有舌尖頭器1点が遺構覆土中より出土している。

各遺構の保存状況であるが、尾根上の台地で水の便が比較的悪いところであることから、蔬菜・飼料用の畑として耕されているが、以前は桑畠として使われていたこと等を含め考察すると、大型の農機具や營農により比較的深く耕作されていることは想像に難くなく、遺構確認面は深く削られていると思われたが、一部を除き、遺物の保存状況は概ね良好であった。

検出された住居址の中で第2号住居跡は、幅7mというごく限られた空間の中で住居のほぼ全貌が把握できた遺構である。平面プランは直径約6mのはば円形を呈し、中央よりやや北側に本来は石窓い戸が設けられていたと思われるが、石はすべて抜かれていた状況であった。

この住居址が位置するところは、調査区の中でも黒色土が著しく厚く堆積していた場所であったところから隠れ沢だけを予想していたが、調査が進むに連れて、焼土の確認・良好な床面とローム層・壁直下より周溝が検出されたことにより住居跡と確認された。遺物の出土状況

等から土坑等の重複が予想されたが調査区外へ広がるため不明である。当遺跡内に東西に延び横切る道路が2本有り、北側からA・B・C区と区分けして調査を行なつたが、A区からは土坑群と縄文時代中期後葉の住居址3軒、B区からは土坑群と単独の石囲い炉3基、周溝により確認された縄文時代中期後葉の住居址1軒、C区からは土坑群と縄文時代中期中葉の住居址1軒、後期初頭1軒が検出されている。現在整理中であり、今後の成果を待ちたい。



調査区近景



3号住居遺物出土状況



9号石囲い炉



くばた 窪田遺跡

所 在 地 長坂町大八田字窪田地内

調査原因 町道拡幅工事

調査期間 2002年8月28日～9月13日

調査面積 60m²

調査主体 長坂町教育委員会

担当者 村松佳幸

窪田遺跡は、長坂インターチェンジから北へ約500mの所、東に甲川・西に泉川とに挟まれた緩傾斜面の微高地に立地する。今回の調査区は遺跡の範囲の中央に位置し、標高は740mである。

平安時代の住居跡1軒、平安時代以降の溝1条、土坑5基、ピット25基が発見された。遺物は縄文時代中期後半～後期前半の土器・石器、平安時代の土器等が出土している。縄文土器のほとんどは後期前半のものである。

土坑・ピットの内、調査区北半分にあるものは、その周辺からは縄文時代後期前半の土器の出土が圧倒的に多く、平安時代の土器は極わずかしかないので、縄文時代



後期前半のものと考えられる。その中の2号土坑の上層から堀之内式土器が出土している。調査区が狭く断定は出来ないが、いくつかのピットは住居の柱穴の可能性が高い。

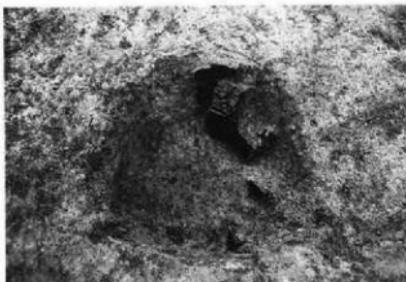
平安時代の住居跡は、出土した甲斐型土器から9世紀中頃(甲斐型土器編年VII～IX期、宮ノ前編年VI期に比定)のものと考えられる。また、少数ながら武藏型と思われる小型甕の破片が出土している。武藏型甕は、北巨摩郡では大泉寺寺第2遺跡、垂崎市北下条遺跡、高根町湯沢遺跡、同川又坂上遺跡でしか確認されておらず、出土例の少ないものである。



調査区近景（南から）



1号住居跡



2号土坑遺物出土状況



作業風景

上日野B・上日野C遺跡

所在 地 長坂町日野地内

調査原因 煙地総合整備事業

調査期間 2002年12月3日～2003年1月25日

調査面積 上日野B：1300m²、上日野C：1300m²

調査主体 長坂町教育委員会

担当者 長谷川誠

上日野B・C遺跡は、長坂町日野字上日野地内に所在し標高はおよそ640～650mほどである。本遺跡は七里岩台地を釜無川が削ってつくった急崖にかけてつづく緩傾斜面地に位置している。

煙地総合整備事業に伴い、2002年6～7月に試掘調査を行ったところ、溝と思われる遺構や繩文・近世～近代の遺物が出土したため、遺物・遺構がまとまって出土した地区を中心に両遺跡に各1区ずつ調査区を設定し、2002年12月より本調査を行った。現在（2003年1月）の段階では上日野C遺跡については調査を継続中であり、遺跡の全貌も明らかとはなっていないため、調査の終了した上日野B遺跡を中心に報告する。

上日野B遺跡からは、縄文時代中期中葉藤内式期の住居跡1軒、時期不明の溝7条、近代～現代にかけての炭焼き窯1基が検出されている。遺物も多くなく、総数で320点ほどである。繩文土器や土師器、近世～近代にかけての陶磁器などが出土している。



1号住居跡は、中心よりやや北側に石圓炉をもち、6本柱を有する長径420cmほどの藤内式期の住居跡である。当該期の住居跡にしては遺物が少なく、破片を入れても6個体分の土器しか出土していない。石圓炉は7個の礫で長方形に組まれており、長径31cm、短径24cmほどの小型のものである。炉の覆土の中からは焼土も検出されず、火焼面もなかった。しかし石圓炉の礫を外したところ、西側の礫の下からは焼土を伴い火焼面が検出され、掘り方の周りも被熱を受けていた。のことからもともとは現況よりも西側に炉があったことは間違いない、後に東側に作り替えたがほとんど使うことなく、住居を廃棄したものと考えられる。

包含層からは当該期の遺物はほとんど出土していないことから、北側の調査区外に集落がつづくとは考え難い。住居内の遺物が少ないとやがれもほとんど使われていないことからも、この住居跡は一時的な居住地のようなものと考えるのが妥当であろう。



調査区全景

中原遺跡

所在地 北巨摩郡小瀬沢町字中原3075-1番地

調査原因 宅地造成

調査期間 平成14年8月～平成14年10月

調査面積 2162m²

調査主体 小瀬沢町教育委員会

担当者 佐藤勝廣

本遺跡は、八ヶ岳南麓の標高921mから928m付近に位置する。遺跡周辺には湧水が多く、東側には西久保、西側には泉沢が流れ、そうした小河川による開析で舌状台地となっている。台地は幅200mほどの南向き斜面である。この地域は古くからよく知られた遺跡で、多くの土地を長野県諏訪郡富士見町の住民が所有し、農作業中に縄文土器が多く出土した。その一部であるが完形品で資料的に価値の高い縄文土器が富士見町の井戸尻考古館に所蔵されている。中央自動車道の工事に先立ち、昭和47年（1972）に山梨県教育委員会によって発掘調査が行われ、縄文時代中期の住居跡が調査区の西側に5軒、東側に4軒の計9軒確認され、住居跡周辺を中心16基ほどの土坑や集石が検出された。また平成4年（1992）と平成11年（1999）に小瀬沢町教育委員会によって住宅建設に伴う調査が行われて、縄文時代中期の住居跡があわせて7軒発見されている。

平成14年（2002）は、甲府市在住の地権者により宅地開発が計画されたため、町の開発調整会議において、地権者と小瀬沢町教育委員会が協議し、試掘調査を実施することになった。試掘調査の結果、土地の北側約半分は野菜作りのため深掘がされ、遺構は削り取られていた。中間点から南側はかろうじて遺構が残存し住居6軒が確認された。試掘調査をもとに地権者と再度協議をし、遺構の残存する地区的発掘調査を行うこととなった。

発掘調査はまずバックホーで表土を取り除き、その後、人力で精査し遺構調査を行った。調査の結果、住居跡6軒を検出したが、一部表土が浅く残りの良くないう住居跡も見られた。遺物はいずれも縄文時代中期の土器・石器等であった。以上、簡単に遺跡調査の概要について述べてきたが、未だ調査が終わる段階であるため、正式な報告は今後に譲るが、この地域の縄文時代中期の集落跡の資料として貴重である。



調査風景



遺構検出状況



遺物出土状況

平成14年度発掘・試掘調査一覧(2002年1月~2003年3月)

市町村名	遺跡名	所在地	面積(m ²)	調査原因	調査期間	備考	種別
藍崎市	新府城跡	中田町中郷	2000	史跡整備	02.7~03.3	発掘	城館跡
	宿尻第1	穴山町宿尻	3500	県道建設	02.8~03.2	発掘	集落跡
	丸山東	大草町上条東割	1000	県道建設	02.5~02.10	発掘	集落跡
	築地	大草町上条東割	50	住宅建設	02.9	発掘	集落跡
	後田	藤井町北下条	4000	開発事業	02.12	試掘	集落跡
	水無	藤井町南下条	1000	住宅建設	03.2	試掘	集落跡
	下横屋	藤井町北下条	600	店舗建設	02.10	試掘	集落跡
双葉町	久保人	大笠2216他	4000	道路建設	02.1	試掘	散布地
	中稼塚占墳	下今井2878-1他	436	学術調査	02.2	試掘	古墳
	大氣垢埋	下今井2877-1他	9388	結婚式場建設	02.10	試掘	散布地
	双葉町3号古墳	下今井3046他	32000	場外車券場建設	02.11~03.1	試掘	古墳
明野村	梅之木	浅尾字梅之木地内	22500	県営燃地帯総合整備事業	02.4~02.9	発掘	集落跡
	諫訪原	上神取1590	720	農地転用	02.09~03.3	発掘	集落跡
	村内	小笠原3659-1	4	住宅建設	02.6	試掘	集落跡隣接地
	村之内II	上手4547	604	住宅建設	02.8	試掘	集落跡
須玉町	平山	江草5921他	24000	園場整備	02.4~02.11	発掘	集落跡
	山ノ神	若神子新町828他	2600	園場整備	02.6~02.9	発掘	集落跡
	腰巻	藤日732-1他	40.5	病院建設	03.1	試掘	集落跡
	腰巻	藤田732-1他		病院建設	03.1~03.3	発掘	集落跡
	池下	藤田字池下28-1他	315	住宅建設	02.10	試掘	散布地
	妙円寺前	若神子妙円寺前728-1他	300	マンション建設	02.12	試掘	散布地
武川村	向原	黒沢字向原	800	開発事業	02.4~02.5	発掘	集落跡
	真原A	山高字真原	800	農業関連	02.8~03.3	発掘	集落跡
	大持原B	新奥字大持原	300	グラウンド建設	03.1~03.2	発掘	集落跡
	大持原B	新奥字大持原	20000	グラウンド建設	02.7~02.12	試掘	集落跡
	小路	黒沢字小路	600	農業関連		試掘	散布地
白州町	上小川	鳥原429他		県営燃地帯総合整備事業	02.4~03.3	発掘	集落跡
高根町	上の原	箕輪字上の原302-5	2500	県道拡幅	02.10~02.12	発掘	集落跡
大泉村	史跡谷戸城跡	谷戸字城山	640	史跡整備	02.7~02.12	発掘	城館跡
	谷戸城周辺	谷戸2437	16	学術調査	02.3	発掘	城館跡
	谷戸城周辺	谷戸2841	128	公園整備	02.7~02.9	発掘	散布地
	井富第4	西井出字井富7013他	700	宅地造成	02.4~02.5	試掘	陥し穴
	井富第5	西井出字井富6813-1	560	宅地造成	02.10	試掘	陥し穴
	古林第1	西井山字石堂8345-2他	56	住宅建設	02.6	試掘	散布地
	清春白樺美崎館南	中丸字久保	1635	立資料館建設	02.1~02.3	発掘	集落跡
長坂町	麻田	大八田字麻田	60	町道拡幅	02.8~02.9	発掘	集落跡
	上H野B	日野字上日野	1327	畑地総合整備	02.12	発掘	集落跡
	上日野C	日野字上日野	1311	畑地総合整備	03.1	発掘	集落跡
	米山東	大八田字米山	24	個人住宅	02.1	試掘	散布地
	長坂上条	長坂上条字西新井	8	個人住宅	02.3	試掘	散布地
	腰巻	中丸字腰巻	80	宅地造成	02.3	試掘	散布地
	頭無	藤川新田字頭無	8	バイオライン埋設	02.4	試掘	集落跡
	治郎出北	夏秋字大郡田	44	バイオライン埋設	02.6	試掘	散布地
	森田	大八田字森田	60	町道拡幅	02.6	試掘	集落跡
	螺田	大八田字螺田	16	個人住宅	02.6	試掘	集落跡
	柳坪南	大八田字三反田	16	事務所建設	02.6	試掘	集落跡
	上H野B他	日野字上日野	640	畑地総合整備	02.6~02.7	試掘	散布地

市町村名	遺跡名	所在地	面積(㎡)	調査原因	調査期間	備考	種別
長坂町	池之平北他	口野字池之平	300	畑地総合整備	02.7~02.8	試掘	集落跡
	池ノ平	中丸字池ノ平	240	駐車場建設	02.9	試掘	集落跡
	轟原他	長坂上条字轟原	300	ふれあい支援農道	02.10	試掘	集落跡
	後平	中丸字後平	4	個人住宅	02.10	試掘	散布地
	池之庭	長坂上条字東田	200	甲稜高校グラウンド整備	02.10~02.11	試掘	散布地
小瀬沢町	成巽	大八田字成巽	6	個人住宅	02.11	試掘	散布地
	中原	中原3075-1	2162	宅地開発	02.8~02.10	発掘	集落跡
	藤原	上笠尾字藤原3332-1254	748	住宅建設	02.8	試掘	散布地
	家の前	小瀬沢町8123-4	258	住宅建設	02.9	試掘	散布地
	不法平	松向字不法平2156-25	984	住宅建設	02.9	試掘	散布地
	棒道下	小瀬沢町10112-2	984	住宅建設	02.10	試掘	散布地

平成14年度刊行の発掘調査報告書一覧

市町村名	発行日	タイトル	発行機関	内 容	備 考	資料交換
明野村	2003.3.31	梅之木遺跡II	更野村 教育委員会	縄文時代の住居4軒、弥生時代の土坑5基、平安時代の住居21軒、掘立柱建物7棟、土坑12基、ビット	墨書き土器多数	○
須玉町	2002.5	五反田遺跡	須玉町 教育委員会	礎石3基、晴県1基、豊穴1基		○
	2002.11	五反田(蓬下西)遺跡・ ツツ木遺跡(第1次・第2次・第3次)・大免遺跡	須玉町 教育委員会	縄文時代中期の打製石斧、陶器破片出土		○
	2003.3	湯沢2号古墳・3号古墳	須玉町 教育委員会	古墳2基、石列など		○
	2003.3	平山遺跡	須玉町 教育委員会	縄文時代中期後半の住居6軒、後期の住居1軒、豊穴2基、溝1基、灰石炉1基など		○
	2003.3	山ノ神遺跡	須玉町 教育委員会	縄文時代～平安時代の土器破片出土		○
大泉村	2003.3.31	史跡谷戸城跡V	大泉村 教育委員会	史跡整備を目的に実施した帶郭の調査	平成14年度 調査概報	○
長坂町	2003.3.31	藤田遺跡	長坂町 教育委員会	縄文時代のビット群、平安時代の住居、溝		○
	2003.3.31	清春白樺美術館南遺跡	長坂町 教育委員会	縄文時代前期末の土坑7基、縄文時代中期の住居7軒他		○
	2003.3.31	上日野B・上H野C遺跡	長坂町 教育委員会	縄文時代中期の住居1軒、清		○

IV 新規指定文化財

双葉町新規指定文化財
諏訪大神社境内の登り窯跡

種 別 史跡

所 在 地 山梨県北巨摩郡双葉町宇津谷1016

所 有 者 諏訪大神社

指定年月日 平成14年10月2日

概 要

諏訪大神社は旧宇津谷村の村社で江戸時代は幕府から御朱印領が与えられていた。『甲斐国志』には「御朱印社領一石九斗余、社地五千四百六十坪。社記ニ曰ク、地主神ヲ保坂明神ト云フ。(中略)保坂ノ庄内ノ諸神ヲ本宮ニ配シ祀リ、保坂ノ總鎮守倭文ノ神社十五社大明神ト称ス。建保五年(1217)、元亀二年(1571)ノ棟札アリ。又祠中ニ上頭円ク下底平ニシテ長サ一尺五寸許ノ石ニ倭文ノ神社、其ノ背後ニ大同二年(807)ト刻スルアリ」とある。(元亀2年の棟札は「大旦郡武田信玄公再建立」とある)

御神体として祀られている石造物は長さ42cm、徑20cmの繩文時代中期の石棒と思われる。また刻まれている「大同2年(807)」という年号は「古い時代」という意味で使われていることが多く、御神体として大同2年に祀られたり、文字を刻んだ年号という根拠は乏しい。しかし、かなり古くからこの神社が存在していた可能性は高く、古代は穗坂牧の南端に位置し、その後官牧が衰退した中世には穗坂總社として穗坂一帯の中心的な神社であったと思われる。

この神社の境内に本殿の東約30mのところに江戸時代後期の窯跡がある。県教育委員会による生産遺跡調査の一環として、平成元年11月13~17日にわたり埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われた。長さ約15m、幅約10mで、両側に窓の口縁の破片を垂直に積み重ね、高さ70cm、底幅160cm、底部は10~15度の勾配であった。上部は崩壊していたが、アーチ状に竹を組み、泥を打ち付けて固め、高さは底幅と同じくらいの160cm程度あったと推定されている。

出土品は、甕・すり鉢の破片の他、糸尻の直徑35~45mmで釉薬が施された碗の破片も多く出土した。庶民の生活に欠かせない碗などを中心に焼かれていたようである。調査後は保存のため埋め戻された。

妙善寺文書によると、「一 永武百五拾壹文 申より寅迄七ヶ年季 瓶焼運上 文化九年(1812)より文政元年(1818)迄 七通七ヶ年分 一 永武百五拾八文 当卯ヨリ酉迄七ヶ年 文政二卯年(1819)より文政八酉年(1825)迄 七通七ヶ年分」とあり、14年間にわたり



年貢の割付を受け、完納している。

しかしその後年貢の割付はみられないことから生産はどうなってしまったのか、またこの窯による生産の主体者は誰なのか、不明な点が残るが、近世の庶民の生活に欠かせない道具を生産していた窯が残されていることは貴重である。



焚口方向より窯壁を見る

双葉町新規指定文化財
有泉橋斎翁墓及び句碑3基

種 別 史跡

所 在 地 山梨県北巨摩郡双葉町宇津谷4068 外

所 有 者 法喜院 外

指定年月日 平成14年10月2日

概 要

有泉橋斎は江戸時代後期から明治前半にかけての俳人・教育者で、文化5年（1808）に宇津谷村の名主の家に生まれた。本名は不明であるが、橋斎が書き写したとされる書籍の巻末に「宇津谷里有泉氏平兵衛 勝山亭橋斎也」とあることから「平兵衛」が有力とされている。しかし父の名である「源五右衛門」や「榮次郎」「蘇左衛門」と名乗っていたという説もある。

橋斎は幼少から学問に勤み、諱諱を身につけ、江戸に遊学したといわれている。天保年間（1830～1844）に名主を勤め、その後、家督を弟に譲り、俳人として、また教育者として活躍した。俳人としては甲斐国（後には山梨県）では当時かなり知られた存在で多くの俳諧を残し、弟子も50人を超えたといわれている。

教育者としては、天保8年（1837）に寺子屋を開き、60～70人を教えていたこともあるという。また明治6年（1873）の忠田学校（現在の双葉西小学校）開校にも協力をしている。

明治22年（1889）没。橋斎没後も宇津谷地区を中心に俳諧が盛んであり、後世に与えた影響は大きい。また墓と同時に橋斎の作品で直筆とされる次の句碑も指定した。

二日見ぬ 柳青木と 成りにけり （双葉町宇津谷4099-1）

萬からむ ふる木のかげや かたつぶり （双葉町宇津谷4465）

其下に 濁いよせて 露の露 （双葉町宇津谷4552）



有泉橋斎翁墓

双葉町新規指定文化財
金剛地金山神社祭典

種 別 無形民俗文化財
伝承者住所 山梨県北巨摩郡双葉町字津谷5118
伝 承 者 金山神社
指定年月日 平成14年10月2日

概 要

金山神社の祭神は金山猿田彦命で、現在では社地は狭く、本殿も小さいものであるが創建年代は天正年間(1573~1592)と伝えられ、鍛冶に関係する繩が祀られている。金山神社は武田氏の配下で金採掘などに活躍した金山衆に関係しているといわれ、武田氏滅亡後、徳川氏の配下となり佐渡・伊豆・秩父等の鉱山開発や関東地方の治水・利水工事に貢献したり、地元に帰住した者もいたという。

宇津谷村は武田時代以前から鍛冶職人等が住んでいたようだ。

一 鷹尾山権現(平林村、現増穂町)

(前略) 剣口ノ銘ニ 甲州逸見持地山延命寺公用
住持性清 宝徳二庚丑(1450)四月吉日宇津ノ谷
ト刻セリ〔『甲斐国志』〕

とあり、職人として刀の製作や普請等に従事し、その代わりに棟別銭や年貢が免除されていた。そして、近世になると、宇津谷村では大工2名、鍛冶3名、石切15名が職人集団として形成され甲府城をはじめとして様々な普請を請け負っていた。この鍛冶職の子孫とされる人々が金山神社の氏子である。

祭典は江戸時代中期の寛保年間(1741~1744)、あるいは戦国時代に始まったとされ、氏子である小林一族の子孫繁栄を願って毎年1月28日に行われている。

当番の家に氏子が集まり、男性たちが米の粉を練って男女の性器を作り、これを女性がゆでアソコをつけ一組ずつ仕上げていく。そしてこれらを神社へ運び神前に供え、氏子にわかる。初めは一族の繁栄(武田家臣の流れを汲む一族として、結束を高める意味もあったのか)を願う行事であったものが、いつの頃からか子授けの神としての信仰も厚くなり、子が授かりたいという一般の人々が参集するようになった。事前に予約があれば一組ずつ分けてくれる。



米粉で性器をかたどった団子をつくる



男女の性器をかたどった団子



アソコをまぶして氏子に分配する

双葉町新規指定文化財
伊豆ノ宮大権現湯立祭

種 別 無形民俗文化財

伝承者住所 山梨県北巨摩郡双葉町大塙560

伝 承 者 伊豆ノ宮大権現

指定年月日 平成14年10月2日

概 要

旧大塙村の村社である金山神社の一角に小さな祠である伊豆ノ宮大権現がある。大塙村は『甲斐国志』によると、「慶長十七年(1612)公命アリテ大塙村ヲ今ノ地ニ移シ新町ヲ建テ」とあり、金山神社から北東へ約1kmの三方を山に囲まれた地域に伊豆ノ宮という所から現在の地に移ったとされている。伊豆ノ宮大権現もこの時代に移され祀られたと推測できる。金山神社の由来は「双葉町新規指定文化財 金剛地金山神社祭典」で記してあるが、鍛冶・鉄物・鉱山に関係する職人たちが信仰する神社とされているが、現在ではこれらにに関する記録や言い伝えは残されていない。この神社の一角に伊豆ノ宮大権現という小さな祭神がある。

祭はいつから始められたのか不明であるが、伊豆ノ宮から移ってきた旧家で代々名主を勤めてきた長田家を中心として、現在でも4月15日に「長田」姓を名乗る十数軒(最近では「長田」姓以外の家も参加している)によって行われている。午前中はカマドを焚いて、大釜で湯を沸かし、奉納用の芋田楽などをを作る。午後になると先輩格の男性が笹の葉を煮えたぎる湯に入れ、集まった人々に振りかける。悪霊を祓い室内安全無病息災を祈念する意味がこめられていると思われる。そして里字を串に刺し、その先に昆布を巻いた芋田楽を奉納する。また湯立てに使用した笹でその年の春蚕の繭を作らせると生糸は豊作になるといわれ、集まった人々に分け与えられる。



伊豆ノ宮大権現に芋田樂を奉納する

明野村新規指定文化財
五社神社の御正鉢

指 定 種 別 明野村指定有形文化財

指 定 年 月 日 平成14年6月17日

名 称 五社神社の御正鉢

所 在 地 山梨県北巨摩郡明野村小笠原1242

指 定 点 数 一式(5点)

五社神社の御正鉢(懸仏)5点はいずれも針葉樹と思われる木製で、1点の法量は、直径32cm、厚さ1cm、重さ250gである。表面に五社権現の名称と本地仏の名称を墨書きし、本地仏阿弥陀如来、薬師如来、千手觀音、十一面觀音、文殊菩薩を彩色で描く。裏面には願主、施主以下の奉納にかかわった人物名を墨書きし、「天正八年庚辰十二月吉日」の紀年銘を有する。御正鉢上部には御神体として社殿内に懸けるための孔3箇所と紐がみられる。5点はいずれも木目に沿って割れており、補修が認められる。彩色の像容は顔料が剥落し、赤外線カメラにより一部が確認されるのみであるが、下地の胡粉、朱、黒色顔料、金粉が残存する。

『甲斐国志』「五社権現」項にはこの御正鉢に関する記述がみられ、明野村教育委員会が平成5年に村誌編纂に際して実施した調査において現存することを確認した。その後、周辺の歴史的背景の調査を経て改めて史料的価値が認められ、明野村の有形文化財に指定された。

御正鉢裏書は下記のとおりである。

筆者月輪一宗軒

神主民部大夫同左京大夫

施主新藤対馬守同妻女親婆女

願主社務福正院盛圓同懇七

施主深沢若狭守同妻女太女

天正八年庚辰十二月吉日諸衆

同施主御嶽山上坊

長坂善兵衛

散使清右衛門

願主福正院盛圓は現福性院と住持を指し、五社神社の別当(社務)である。施主の新藤対馬守と深沢若狭守は小笠原の在地豪族で、江戸期には長百姓を務めている。「同施主御嶽山上坊長坂善兵衛」は、江戸時代末に退転した御嶽山上之坊弥勒寺と住持を指すと思われ、実態に不明な点多い弥勒寺に関する初出資料である。

五社神社は、江戸時代末まで五社権現と称され、御嶽山弥勒寺末の真言宗福性院が別当を務めた。五社権現の



名称は、熊野本宮、熊野新宮、熊野那智山、白山、箱根の権現を祀ることに由来し、いずれも日本を代表する山岳信仰の対象となつた権現である。

福性院は御嶽山弥勒寺の隠居寺で、弥勒寺は江戸時代末まで金桜神社(甲府市御岳)の別当であった。江戸時代には弥勒寺に入山する住職はまず福性院に入山しており、両者は単なる本末関係を超えたつながりがあった。弥勒寺は、延宝8年(1680)に徳川幕府の宗教政策により龍藏寺報恩院末に連なるが、それ以前は衆徒の子弟に住持を求め、半僧半俗であったといふ。¹⁾こうした状況は御正鉢裏書とも合致し、上之坊(弥勒寺)が福性院とともに金峰山の修驗系寺院に出自することを示すと思われる。

平成10年度に発掘調査を実施した深山田遺跡は、13世紀から17世紀初頭にかけての宗教的色彩の濃い集落跡と寺院跡が検出されている。この発見を契機にはじめた歴史的背景の調査により、「古ヘ吉野ニ皇居アリシ頃ハ関東開闢ノ山伏等皆此山(金峰山)を指す。筆者註²⁾ヲ大峯ニ準擬シ入峯シテ修行ス」と『甲斐国志』に記された南北朝期の金峰山修驗と福性院、五社神社の関係が明らかとなり、五社権現の特殊な組合せの背景に、金峰山を中心とした中世甲斐國に展開した修驗者の活動があることが判明した。³⁾

五社神社の御正鉢は、有銘木製御正鉢として稀少例であることに加え⁴⁾、中世甲斐國の修驗道と福性院、五社神社とのつながりを雄弁に物語る歴史資料としても貴重である。

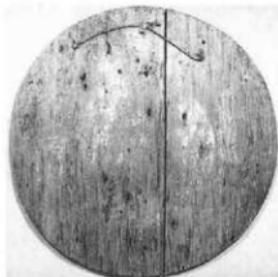
註1 太川 茂 2000 「甲州御嶽山金桜神社の鐘と論所争論」『甲斐路No.96』山梨郷土研究会

註2 山本義孝 2000 「深山田遺跡と中世修驗道」『深山田遺跡』明野村教育委員会

註3 下山 立 1996 「木製懸仏の歴史的展開」『仏教その文化と歴史』



五社神社の御正絃



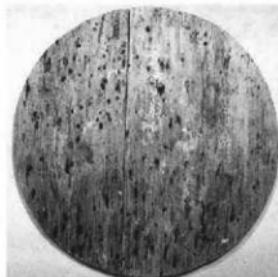
白山権現



熊野新宮



熊野本宮



箱根権現



熊野那智山



同左裏面

武川村新規指定文化財
高龍寺のシダレクロマツ

所在地 武川村山高2480

所有者 高龍寺

指定年月日 平成14年11月22日

樹種はクロマツである。シダレクロマツは多く海岸地帯に自生し、樹皮は暗灰色で葉は大きく堅いので雄松とも呼ばれる。庭木や盆栽とされる。このシダレクロマツの特徴は枝張りが優れていて、上枝を除いて下枝はよく枝が垂れている。また、道路工事のため主幹の根元2.0m位が埋められたため根張りをみるとことはできないが樹勢は極めて旺盛である。

根回り 2.80メートル

目通り 2.50メートル

樹高 14.2メートル



武川村新規指定文化財
高龍寺のサルスベリ

所在地 武川村山高2480

所有者 高龍寺

指定年月日 平成14年11月22日

本樹はミソハギ科の落葉小高木で、中国華南及びインド北部が原産である。幹肌がつるつるしているのでこの名がある。花弁は6枚で紅色である。球形のガクに包まれて枝先に群生し、夏から秋にかけて長く咲き続けるため“百日紅”的名がある。高龍寺のサルスベリは樹齢はおおよそ150年位と言われ、開花時期には見事な花をつける。

根回り 2.55メートル

目通り 合計 3.37メートル

樹高 8.02メートル



武川村新規指定文化財
宮脇のイロハモミジ

所 在 地 武川村宮脇1989-1

所 有 者 諏訪神社

指 定 年 月 日 平成14年11月22日

本樹はカエデ科のイロハモミジ（タカオカエデ）である。カエデの葉が手のひら状に5~7枚に分かれている「いろは…」と数えられたことからこの名がある。日本を彩る代表的な景観として紅葉狩りなど昔から詩歌にも詠まれてきた。諏訪神社のイロハモミジはその位置から自生したものと思われる。土地の古老は樹齢250年~300年位であろうといい伝えている。



武川村新規指定文化財
萬休院のツバキの生垣

所 在 地 武川村三吹2915

所 有 者 萬休院

指 定 年 月 日 平成14年11月22日

ツバキは日本、朝鮮半島、中国などに分布するツバキ科の常緑高木である。一般に暖地性で青森県が自生の北限である。高さ数メートルに達し、葉は厚く楕円形で波状の鋸歯がある。濃い緑色で光沢がある。春赤大花輪の5弁花を開く。実は円形で黒色の種子をもつ。材質は堅く、緻密で工芸用に用いる。このツバキの生垣は明治の中頃植えたもので樹齢は100年を越えている。大正初期頃の写真が現存する。





表紙は北岳（芦安村）です

八ヶ岳考古

北巨摩市町村文化財担当者会
平成14年度年報

平成15年3月24日 印刷

平成15年3月31日 発行

発行 北巨摩市町村文化財担当者会

事務局 山梨県北巨摩郡長坂町大八田3509-1
長坂町教育委員会

印刷 ほおずき書籍株式会社

長野県長野市柳原2133-5
TEL (026) 244-0235

